



平成28年度指定

スーパーグローバルハイスクール

研究報告書

第5年次

令和3年3月

宮城県気仙沼高等学校

発刊にあたって

平成28年度に文部科学省よりスーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受けてから5年が過ぎました。5年間本校の「海を素材とするグローバルリテラシー育成～東日本大震災を乗り越える人材をめざして～」を研究開発課題として取り組んできた今年度の取組について、ここに報告させていただきます。

平成23年3月の東日本大震災から10年目を迎えようとする今年度は、全く予想もしなかった新型コロナウイルス感染症が国内外で猛威を振るい、4月5月の臨時休業もあり本校の教育活動も大きな影響を受けました。台湾研修などいくつかの事業は中止となりましたが、これまで実施されていなかったICT（情報通信技術）を使ったオンラインでの新しい学びが様々な形で生まれました。例えば課題研究において、学校にいながら仙台や東京の大学の先生方から直接オンラインでご指導をいただいたり、県内外や台湾の高校生とオンラインで意見交換や研究発表を行うなどグローバルなネットワークが続々構築されました。

5年前、本校は東日本大震災からの復旧・復興への取組の中で地域を活性化し、21世紀をよりよく生きるためには、地域の資源や地域への思いを携えて、世界を舞台に活躍できる人材の育成が必要との考えに至りました。その人材とは、①世界の中で地域を活かす思考力豊かな人材、②海を通したグローバルな視点を持って異文化を理解し他者と協働できるコミュニケーション力が豊かな人材、③東日本大震災の経験を生かして社会に貢献し、海との共生による持続可能な社会の実現を求め、行動力豊かに未来に生きる人材、と定義しました。その人材に必要な資質・能力を「グローバルリテラシー」と名付け、「基礎的基本的な知識技能」、「思考力」、「コミュニケーション力」、「多様性・協働性・行動力」の4つとし、これらを育成して参りました。

SGH指定の5年間の成果としては、教員と生徒の変容が挙げられます。主管分掌である研究企画部のみならず、全ての校務分掌・全ての教員が本事業に真摯に取り組み、学校全体で組織的、計画的、発展的に教科指導のみならず、課題研究を含む各種のSGH事業に意欲的に挑戦しました。先日開催された5年間の集大成とも言うべきSGH全体発表会では、創造類型3年生有志による進行のもと、1、2年生が校内10会場に分かれ、生徒全員が全部で222テーマのポスター発表を行いました。参加されたSGH運営指導委員及び大学の先生方からは、「それぞれの研究に世界の共通課題を取り入れたものが多く、発表や質問などコミュニケーション力も確実に身に付けており、質の高い発表だった」との評価をいただいております。この5年間で、生徒たちにグローバルリテラシーが確実に身に付き、復興や貢献に向けたグローバルリーダーが育っていると自負しております。

来年度からはこれまでの取組をさらに持続可能な実践につなげられるよう、教職員一丸となって研究開発をさらに進めて行く覚悟です。

おわりに、これまで本校に対してご支援ご指導をいただきましたSGH運営指導委員の皆様、気仙沼市及び気仙沼市教育委員会の皆様、連携大学の先生方、NPO法人底上げ及び一般社団法人まるオフィスの皆様、地元企業等の地域の方々、そして、宮城県教育委員会に心から感謝申し上げますとともに、今後もさらなるご支援とご協力をお願い申し上げます。発刊にあたっての挨拶といたします。

令和3年3月

宮城県気仙沼高等学校長 狩野 秀明

目次

巻頭言	1
目次	2
S G H事業の概略	4
令和2年度研究報告【全体】	
令和2年度S G H研究開発完了報告書（別紙様式3）	7
1 課題研究活動	
1 学校設定科目「地域社会研究」における課題研究	27
2 学校設定科目「課題研究Ⅰ」における課題研究	40
3 学校設定科目「課題研究Ⅱ」における課題研究	48
2 授業改善	
1 主体的・対話的で深い学びを目指す授業改善	59
2 スモールステップ表の活用	61
3 授業改善の体制づくり・教員研修	62
4 P B L型授業法の研究・実践	64
5 教科での観点別評価法による指導と評価の一体化の研究・実践	66
6 課題研究とのリンクを図る教科指導	72
7 授業評価・学習実態調査による授業改善	73
8 I C T教育	74
3 英語教育・国際理解	
1 英語科の授業の充実	79
2 スピーチコンテスト	80
3 国際理解の促進	81
4 志教育	
1 1年生「総合的な探究の時間」	87
2 2年生「総合的な探究の時間」	88
3 3年生「総合的な学習の時間」	103
4 3年間を見通した進路指導	106
5 類型選択指導	107
6 心の教育	108

5	地域連携	
1	気仙沼の高校生マイプロジェクトアワードへの参加	1 1 5
2	気仙沼中学校生徒への探究活動支援	1 1 5
3	海洋教育こどもサミット	1 1 6
4	気仙沼市防災フォーラム	1 1 6
5	教職員間連携	1 1 6
6	フィールドワーク・アドバイザーの委嘱	1 1 6
6	国内交流	
1	SGHに関わる発表	1 2 1
2	震災交流	1 2 3
7	防災教育	
1	春季防災訓練	1 2 7
2	職員防災研修	1 2 7
3	秋季防災訓練	1 2 8
4	防災手帳の発行	1 2 8
5	ハザードマップ研修	1 2 9
6	生活防災委員の活動	1 2 9
7	「みやぎ防災副読本」の活用	1 2 9
8	外部組織との連携について	1 2 9
9	地域連携の取り組み	1 3 0
10	「みやぎ鎮魂の日」にかかる集会	1 3 0
	関係資料	
	運営指導委員会記録	1 3 3
	運営指導委員の先生方から	1 3 7
	SGH通信（29号～41号）	1 4 2
	令和2年度教育課程表	1 5 5

地域起点のグローバル・リーダーを育成

地域を超えたリーダーを育成

地域のリーダーを育成

協働型学習プログラム

東日本大震災復興プログラム

3学年

2学年

1学年

授業改善(8小事業)
英語教育(4小事業)
国際交流(5小事業)

全教員
英語科教員
英語科教員中心

(創造類型) (3学年全員)
課研Ⅱ 総学 志教育
教科選出(8名) 3学年教員

(創造類型) (2学年全員)
課研Ⅰ 総探 志教育
教科選出(8名) 2学年教員

(1学年全員) (1学年全員)
地域社会研究 総探 志教育
1学年教員+他学年選出 1学年教員

防災教育(4小事業)
地域連携(4小事業)
国内交流(3小事業)

全教員
事業主中心
事業主中心

- 大学
- 企業
- NPO
- 地域組織
- 保護者

- スモールステップアプローチ
- ディレクターリングアプローチ
- 教員専門性開発アプローチ

令和 2 年度研究報告【全体】

研究開発完了報告書

(別紙様式3)

令和3年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所	宮城県仙台市青葉区本町8-1
管理機関名	宮城県教育委員会
代表者名	教育長 伊東 昭代 印

令和2年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和2年4月1日（契約締結日）～令和3年3月31日

2 指定校名

学校名	宮城県気仙沼高等学校
学校長名	狩野 秀明

3 研究開発名

海を素材とするグローバルリテラシー育成～東日本大震災を乗り越える人材をめざして～

4 研究開発概要

気仙沼高等学校では、海洋問題に係る協働型学習を中心とする2つのプログラムにより、「グローバルリテラシー」と名付けた「思考力、コミュニケーション力、多様性・協働性・行動力」を育み、地域から世界に直接アクセスし、対話によって合意を形成し行動できるグローバルリーダーを育成することを目的として、研究開発を推進してきた。

協働型学習プログラムでは、1学年学校設定科目「地域社会研究」、2学年学校設定科目「課題研究Ⅰ（創造類型）」と総合的な探究の時間「課題研究（人文・理数類型）」、3学年学校設定科目「課題研究Ⅱ（創造類型）」を実施した。「課題研究Ⅱ」では担当教員6名の他、英語科教員9名全員が、英語ポスター作成、論文作成の添削、評価を担当し、英語による発表スキルの向上と論文作成に取り組んだ。

東日本大震災復興プログラムにおける「防災教育」では、生徒主体の避難訓練・避難所設営や防災手帳の作成、宮城県教育委員会作成の防災副読本を活用した各教科における防災学習の実施計画の作成と、

教科横断的なAL型防災学習に取り組んだ。「志教育」ではマスタープランに基づいた探究的な進路学習に取り組み、3学年では高校での学びを振り返り「学びの設計図」を作成させることで、高校卒業後も学び続ける意識の向上を図った。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会							○			○		
指定校との打合せ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
非常勤職員 (海外交流アドバイザー) の雇用	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SSH, 他 SGH 指定校等との 連携							○	○	○	○	○	○

(2) 実績の説明

①運営指導委員会

運営指導委員については、昨年度からの継続で4名（国際大学、岩手大学、公益財団法人宮城県国際化協会、住友林業株式会社）の委員を委嘱した。

第1回運営指導委員会は、令和2年10月23日（金）、3学年創造類型「課題研究Ⅱ」最終、2学年創造類型「課題研究Ⅰ」中間、2学年人文・理数類型「総合的な探究の時間」テーマ発表会に先立って開催し、12名が出席した。上半期の活動報告とSGH指定終了後の方向性について説明を行い、出席した4名の委員から指導・助言を得た。その後、発表会を参観していただき、創造類型生徒の研究内容、視点、発想、話の組み立て方について、前向きな評価をいただいた。一方、質問の少なさや「仮説→実証」の枠に無理にはめているものがあるとの指摘を受けた。

第2回運営指導委員会は、令和3年1月30日（土）、2学年創造類型「課題研究Ⅰ」、1学年「地域社会研究」及び2学年人文・理数類型「総合的な探究の時間」全体発表会の後に開催し、11名が出席した。運営指導委員から発表参観と事業についての報告を踏まえて指導・助言を得た。生徒の発表内容と発表後の質疑が10月と比較して充実したものとなったことやこれまでの取組と成果について、おおむね高い評価をいただいた。

②指定校との打合せ

過去4年間と同様、フィールドワークや課題研究発表会等、様々なイベントがスムーズに企画運営できるよう、事業を進めた。今年度は特に、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、台湾研修等、中止や内容の変更を余儀なくされたものが多かったことから、大学や関係諸機関とこれまで以上に綿密な連絡を取り連携を図りながら取り組んだ。

管理機関としては、本事業が教育課程の研究開発を主旨としていることから、評価方法の改善、気仙沼高校がねらいとする資質・能力の育成を目指した授業実践に取り組むよう助言した。

③海外交流アドバイザー（非常勤職員）雇用

海外交流アドバイザーは、台湾研修にかかる現地高校や大学の連絡調整、現地との交流コーディネーターなどの業務を担当した。特に今年度は台湾研修が中止となったことから、代替行事であるオンライン交流会に関する連絡調整を行った。また、プレゼンテーション講座等の生徒への直接指導を積極的に行った。

④SSH, 他SGH指定校等との連携

SGH指定校である気仙沼高校の全体発表会、SSH指定校である仙台第三高等学校のGSフェスタなどの開催に関する指導・助言及び運営支援を行った。また、気仙沼高校が全国高校生フォーラムへ参加するにあたり、主催者側との連絡調整などを行った。SGH指定解除後も、気仙沼高校で行われる探究活動の進捗状況を勘案しながら、具体的な指導助言を行っていく予定である。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

NO	業務項目	実施日程											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①	教育課程の研究	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②	課題研究活動			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③	志教育			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④	授業改善の企画・実践			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤	英語教育			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑥	国際交流				○				○				○
⑦	防災教育			○	○		○	○	○	○	○		○
⑧	地域連携活動			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑨	国内交流										○	○	○
⑩	成果の普及			○	○		○	○	○	○	○	○	○
⑪	事業全体の評価に関する事項			○		○		○		○	○	○	○
⑫	第5次報告書									○	○	○	○

(2) 実績の説明

①教育課程の研究

- 指定を受けた平成28年度より、「協働型学習プログラム」を学校設定科目、「東日本大震災復興プログラム」を総合的な探究（3学年は学習）の時間における志教育とAL型防災学習を中心に実施した。
- 課題研究を学校設定科目、防災教育・志教育を総合的な探究（3学年は学習）の時間で実施することにより、2つのプログラムでねらいとした「グローバルリテラシーの育成」と「社会貢献意欲と学び続ける意欲を兼ね備えた復興の担い手育成」を計画的かつ効果的に進めることができた。

②課題研究活動

ア 学校設定科目「地域社会研究」 1学年全員 1単位

- 水曜日6校時に配置。総合的な探究の時間（水曜日7校時）や土曜授業日を活用し、全69時間実施。

- ・担当教員は1学年所属13名に他学年所属5名を加えた18名。
- ・海を素材として「海と産業」「海と人間」「海と防災」「海の文化」「三陸の自然」の5領域を設定。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、4月～5月が臨時休業となったことから、休業期間中の5月にオンラインによるガイダンスを実施した。授業開始後の6月にテクニカル講座(研究スキル習得)、7月に地域理解講座を実施し、その後8月にかけて研究班を決定し研究テーマを決定。9月の研究計画書を作成、10月のフィールドワークⅠ(市内各施設訪問。一部オンライン)、11月の中間発表会(スライド発表)、12月のフィールドワークⅡ(県内大学訪問。一部オンライン)を経て1月に全体発表会(ポスター発表)を実施。2月に論文を作成。
- ・領域ごとに大学の教員をアドバイザーとして依頼し、フィールドワークや中間発表会に加えメールでも指導・助言をいただいた。

イ 学校設定科目「課題研究Ⅰ」 2学年(創造類型1クラス) 2単位

- ・火曜日6校時、金曜日7校時に配置。総合的な探究の時間(火曜日7校時)や土曜授業を活用し、全92時間実施。
- ・担当教員は国語科1名・数学科1名・社会科2名・理科2名・英語科1名・保健体育科1名の8名。
- ・個人研究とし、1年次の地域課題からグローバル課題へと発展しやすいようにSDGs17目標と関連したテーマを設定。SDGsの目標ごとにゼミを作り上記8名の教員が担当した。
- ・臨時休業期間中の5月にオンラインによるガイダンス(フィールドワークⅠは中止)、授業開始後の6月には1年次の振り返りと思考ツールを学ぶ講座を実施、7月テーマ発表会とフィールドワークⅡ、10月中間発表会(スライド発表)、12月フィールドワークⅢを経て1月に全体発表会(ポスター発表)を実施。2月に論文を作成。
- ・12月実施予定であった台湾研修が新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止となったことによる代替措置として、7月と11月に台湾に関する講演会を実施。3月以降台湾台南市の国立北門高級中学、国立台南高級海事水産職業学校とのオンライン交流会を実施することが決定しており、両校とは指定解除後も継続して交流を図っていく予定である。

ウ 学校設定科目「課題研究Ⅱ」 3学年(創造類型1クラス) 1単位

- ・木曜日6校時に配置。総合的な学習の時間(木曜日7校時)を活用し、全28時間で実施。
- ・担当教員は国語科1名・数学科1名・社会科1名・理科1名・情報科1名・英語科1名の6名。また、英語科教員9名が英語ポスター作成時の指導、英語発表の原稿・添削・評価を担当した。
- ・6月に2年次の研究内容を見直し「課題研究Ⅰ」の論文を修正、7月から英語論文の作成を開始し、並行して各種コンテストに研究成果を応募する準備を進めた。9月からは英語のポスター作成を行い、10月に最終発表会を開催。11月から英語論文の修正を行い2月上旬までに論文を完成させた。

エ 「総合的な探究の時間」での「課題研究」 2学年(人文・理数類型) 1単位

- ・火曜日7校時に配置。土曜授業を活用し、全45時間実施。
- ・担当教員は2学年人文類型(3クラス)・理数類型(2クラス)の正・副担任。
- ・昨年度まで行っていた「総合的な学習の時間」での「学問分野別課題研究」の内容を変更して実施。
- ・個人またはグループ研究で、各自の興味関心を突き詰めることをテーマに設定。授業開始後の6月から、ガイダンス、自己分析を行い、6月～10月でテーマ設定と発表会(ポスター発表)、11月～1月で探究活動と全体発表会で中間発表(ポスター発表)を実施。定期考査や冬季休業前に高校卒業時に目を向ける講演会等を設定し、探究活動と自己の在り方生き方を考える機会を設けた。

オ 探究型学習センターの充実

- ・「地域社会研究」「課題研究Ⅰ」「課題研究Ⅱ」「総合的な探究の時間」で作成した3年間のスライ

ドやポスターをデータベース化し、先行研究検索の効率化を図った。

- ・ア～エの探究型学習を進めるための客観的な情報を入手するためにSGH指定初年度より、CASAの導入や朝日新聞、読売新聞、河北新報の三紙の新聞記事検索サービスを導入。生徒の利用率も年次進行で増加した。
- ・課題研究の参考となる書籍を28年度より計画的に購入。英語教育に資する書籍も充実に努めた。また、今年度は、参考図書として『学びの技』（玉川大学出版部）を70冊購入し、図書館に常備して探究活動の際に活用した。

③志教育

ア 1学年「類型選択指導」

- ・気仙沼高校では、2学年より類型に分かれたクラス編成に基づいて授業が展開されている。平成28年度入学生からは、人文・理数類型に加え、文理の枠を超えた探究的な学習活動に重点を置く創造類型が設置された。「総合的な探究の時間」との関連づけを工夫し、キャリア教育の一環としての指導をさらに深めていく。

イ 3学年「総合的な学習の時間」

- ・「『強い志』を持って前進する」をテーマに、2年間の学びを振り返り、社会問題を中心としたディベート、進路希望別のガイダンスなどを実施し、3年間のまとめとなる「学びの報告書」と「学びの設計図」を作成させることにより高校卒業後も学び続ける志を高めた。

ウ 「心の教育」

- ・学級活動、学校行事、生徒会活動、部活動等での様々な活動や体験を通じて、人と関わり、他者への関心や共感を高め、学級づくりや学校づくりへ自主的に参画することで、自己と集団の望ましい人間関係の育成を図った。また、自分の役割を自覚しそれを果たすことで、責任感や使命感を育み、地域や社会に貢献していける人材育成を図った。

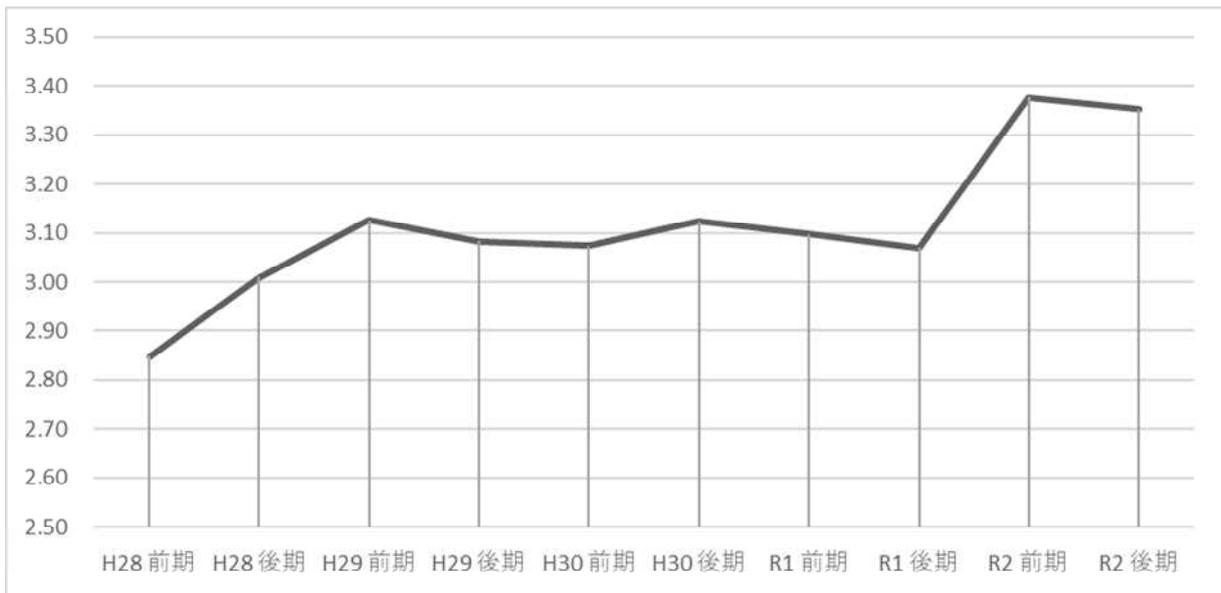
④授業改善の企画・実践

ア 授業改善

- ・今年度は、臨時休業期間中の5月にSGH事業内容を全職員対象の研修で確認。昨年度に引き続き授業改善の重点を「単元指導計画」に置いて研究授業「授業力向上プログラム」を実施した。特に今年度は、採用7年目以上の教員が授業を公開することで生徒が主体的・対話的で深い学びに向かうための取組を研究する「SGH実践チャレンジコース」と、採用6年目までの教員が研究授業を行い、授業力向上を目指す「開かれた授業実践コース」の2つのコースを設定し、計26回の研究授業を実施した。また、10月には、國學院大学の田村学教授を講師として、各教科や「総合的な探究の時間」で生徒にどのような資質・能力を身につけさせようとしているのか、学習指導要領改訂の読み解き方、「主体的・対話的で深い学び」の意味、カリキュラム・マネジメントの方法などについての研修会を行った。
- ・PBL指導法についても、昨年に続き9月に東北大学大学院の酒井聡樹准教授を講師として「地域社会研究」「課題研究Ⅰ・Ⅱ」など年間を通した課題研究活動の指導力向上をねらいとした研修会を実施した（7月にも予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止）。1月には課題研究におけるルーブリック表を用いたパフォーマンス評価の精度を高めるために、昨年度までに生徒が作成したポスターや論文を用いて評価に関する研修会を実施した。
- ・例年実施している生徒による学校評価（後期）では、「学ぶ意欲を高める授業が実施されている」について、「そう思う・大体そう思う」と回答した生徒の割合は1学年が81.6%（前年度1学年88.7%）、2学年が92.7%（1年次88.7%）、3学年が92.5%（2年次84.4%）

と、特に2・3学年が高率であった。同じく「授業以外の学習時間を確保している」の項目では1学年63.2%（前年度1学年72.1%）、2学年78.0%（1年次72.1%）、3学年87.5%（2年次59.5%）である。いずれの項目も1学年の肯定的評価が例年と比較して低くなっているのは、少子化に伴う入学希望者の減少により、高校入試において定員割れとなり学力水準の分散化が生じているものと考えられる。

- 一方、1学年について同評価における「SGH事業によって活動の場が広がり、学習意欲の向上に寄与している」は70.4%（前年度1学年67.8%）、「課題研究活動を通して、身近なものに疑問を持つようになった」は67.3%（前年度1学年は61.0%）と増加している項目もある。この点については、地域全体で幼稚園から取り組んでいる気仙沼市のESDを踏まえた探究活動が一定の成果を挙げていると判断できる。
- 生徒による授業評価では、設問ごとに4、3、1、0点で点数化した5教科平均値で「授業における教師の説明は分かりやすかった」（H27：2.92→H28：3.19→H29：3.23→H30：3.24→R1：3.20→R2：3.33）、「板書や配付資料・ICTが授業に役立った」（H27：3.07→H28：3.28→H29：3.30→H30：3.33→R1：3.34→R2：3.41）という結果となった。全項目平均の推移は下のグラフのとおりであり、全体として上昇傾向を示している。



イ 学習評価法の研究・企画・実践

- 気仙沼高校はSGH指定初年度である平成28年度に定期考査における観点別作問を開始し、翌平成29年度より観点別評価を実施している。観点別評価の導入に対して、多くの教員から肯定的な意見が挙がった。観点を意識することで、授業方法の改善につながったという意見も多かった。観点別評価は着実に定着しており、現在は考査問題だけでなく、小テストやワークシート等も観点別に評価する方法が浸透している。さらに、多くの教科でプリントなどの評価対象物において、ループリック（次ページに例示）を作成・提示しており、生徒が課題に取り組む際、目標を設定しやすくなっている。

	A	B	C	D
関心 (ノート)	数式、グラフ、 図が丁寧にま とめられている。 さらにメモ を書き込むな ど独自の工夫 が見られる。	数式、グラフ、 図が丁寧にま とめられてい る。	数式、グラフ、 図が丁寧にま とめられてい ない。	数式、グラフ、 図が丁寧にま とめられてい ない。さらに字 が汚い。

⑤英語教育

- 英語科教員の指導力向上及び校種間の連携促進を目的とした研修会を、今年度も東北学院大学との連携により実施した。講師として文学部教育学科教授である村野井仁氏を招き、気仙沼高校英語科教員による研究授業ののちに、『中高接続を意識したライティング指導』のテーマのもと、中学校教員とKJ法を用いて話し合いを行った。時代の変容に合わせて紙に英文を書く以外にも、パソコンやiPad等の端末機器を用いて入力させるライティング活動を授業に盛り込むといった場面設定をすることで生徒に英語の必要性を感じさせる良い授業につながっていくのではないかと、といった意見が出された。その後村野井氏による『主体的な学びを促す領域統合型の英語指導—ライティング指導を中心に—』をテーマに、様々な角度から生徒の考えを形成し、話すこと・書くことのアウトプット活動へと展開していく領域統合型授業を展開することの重要性や、生徒の書く力を向上させるライティング指導、ルーブリック表を作成し、妥当性と信頼性、実用性の高い評価を実施すること等についての講演があり、中高の英語教育の接続を考えるとともに、より教育効果の高い指導法を学ぶことができた。
- アウトプット能力の育成および伸長を図ることを目的としたパフォーマンステストを、今年度も全学年で年間3回以上実施した。1学年では音読テストや、主張・理由根拠・支持・結論の構成を意識したエッセイライティング、キーワードのみを使用して再発話するリテリングテストなどを実施した。2学年では、教員の質問に答えるインタビューテスト、イラスト内の人物描写、実際に起こりうるシチュエーションでの英会話、与えられたテーマに対する意見文の作成などを実施した。3学年では、与えられた英文の要約や、自分の好きなものについて紹介するShow and Tellなどを実施した。今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、以前まで行っていた従来の1対1や1対複数のパフォーマンステストの形式をとることができなかつたため、代替措置としてiPadの録画機能を用いてのスピーキングテストを試験的に実施した。
- キャリア・異文化理解・創造性の3つを軸に英語力強化を目指すプログラム「C-cube」を、本校英語科教員全員で分担しながら展開した。Career courseでは、各学年担当者が生徒の資格取得に向けて外部試験対策指導を行った。Cross-cultural courseでは、気仙沼市在住の海外出身者を講師に招いての講座、ALTとの会話練習、スカイプを通じた外国人学生との交流などの機会を提供し、異文化交流・異文化理解を促進した。特に今年度は、気仙沼高校の海外交流アドバイザーを講師に、英語を話す上で大切な構成について学ぶSpeech Writing Workshopを7月から9月にかけて3回行った。また、外国語を使う機会を更に増やし、国際理解や外国語学習への動機付けを促進することを目的としたEnglish Caféを12月から2月までの毎週水・木曜日に実施した。Creation courseでは、創造性の伸長と成果物の発表を目的に英語コンテストを開催し、1学年でクラス対抗暗唱コンテスト、2学年でテーマ選択型のプレゼンテーションコンテストをそれぞれ実施した。

⑥国際交流

- 「課題研究I」と関連した台湾研修は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響でやむを得ず中止とした。その代替行事として、台湾台南市の国立北門高級中学、国立台南高級海事水産職業学校とのオンライン交流会の実施が決定した。また、例年NPO法人等による海外研修に多数の生徒が参加してい

たが、今年度は参加予定であった計画がすべて中止という結果となった。

⑦防災教育

- ・長らく生徒主体の防災訓練・避難所設営を春秋の年2回実施してきたが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、職員のみ対象の防災訓練に変更した。
- ・防災手帳の作成及び、宮城県教育委員会作成の防災副読本を活用した各教科における防災学習実践計画の作成により、教科横断的なAL型防災学習に取り組んだ。
- ・防災教育に関心のある生徒が、気仙沼市防災フォーラムに参加し、市内関係者との情報共有を図った。
- ・気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館とけせんぬま震災伝承ネットワークのコラボレーション事業として行われている「語り部活動」に、気仙沼高校生徒が参加し、震災の記憶と教訓を伝承する役割を果たしている。

⑧地域連携

- ・新型コロナウイルス感染症拡大が心配された「地域社会研究」における市内フィールドワークであったが、様々な対策を講じながら、気仙沼市役所や市の施設、民間企業、NPO法人等の協力のもと、これまで同様の規模で実施できた。
- ・学校独自で委嘱しているフィールドワークアドバイザーによる相談会は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により10月からの開催になったが、アドバイザーが所属するNPO法人・社団法人のスタッフも加え、常時4～6名が生徒からの相談に対応した。1月末までに全7回実施した。
- ・昨年度末、「全国高校生マイプロジェクトアワード」において、気仙沼高校の生徒が最高賞である文部科学大臣賞を受賞した。今年度も関連大会である「気仙沼の高校生マイプロジェクトアワード」に12名の生徒が参加し、気仙沼市のためのアクションプランについての実践発表を行った。最高賞である市長賞を1名、視聴者の共感と呼んだ「オンライン共感賞」を1名がそれぞれ受賞した。また、上位大会である「宮城県・秋田県 Summit」において1名が「全国 Summit」代表に選出された。
- ・「海洋教育子どもサミット in 気仙沼（オンライン大会）」に2学年3名が参加。海洋に関する研究結果の発表を行い、他校の高校生と学びの深め合いを行った。
- ・志教育における校種間連携として、気仙沼中学校の探究型学習の授業に3学年2名が参加し昨年度の「課題研究Ⅰ」で手がけた研究について発表し、研究の進め方についてのアドバイスを行った。

⑨国内交流

- ・今年度、11月の仙台第三高校「GSフェスタ」、12月の「SGH全国高校生フォーラム」、2月の古川黎明高校「黎明サイエンスフェスティバル」、東京大学主催「全国海洋教育サミット」は、そのすべてがオンライン開催であったが、発表に参加することで全国の小中高生と交流し、課題研究に関して深い学びを得ることができた。
- ・これまで積極的に行われてきた震災交流であったが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、そのほとんどが中止を余儀なくされた。そのような中ではあるが、1月にスーパーサイエンスハイスクールである北海道滝川高等学校の生徒が来校し、交流を深めることができた。

⑩成果の普及

- ・活動をまとめた「SGH通信」は今年度12回発行するとともに、ホームページに掲載した。
- ・課題研究に関する発表会を昨年度と同じく4回実施。新型コロナウイルス感染症拡大への対応として案内送付先を大学教授や地元NPO法人等のアドバイザーに絞り、十分な対策を講じた上で行った。
- ・校外における成果の普及については、⑦防災教育、⑧地域連携、⑨国内交流を参照。
- ・気仙沼市ESD/RCE推進委員会の活動（円卓会議や各種研修会）等で、ユネスコスクールとして気仙沼高校が取り組んでいる課題研究・国際理解・地域連携を軸としたESDの取組を広く発信した。

⑩事業全体の評価に関する事項

- ・昨年度に引き続き、生徒対象「グローバル化アンケート」、事業全体に係るルーブリック表に基づく「GL生徒自己評価」、生徒による「授業評価」・「学校評価」を基本として事業評価を実施した。加えて、5年間の取組についてSGH運営指導委員、学校評議員、課題研究のアドバイザー（大学の教員）から指導・助言をいただいた。
- ・上記以外にも、生徒が実感しているSGH事業の成果と課題について把握するため、「地域社会研究」「課題研究Ⅰ」「課題研究Ⅱ」と課題研究に3年間取り組んだ3学年創造類型37名、人文・理数類型で学校推薦型選抜・総合型選抜を利用した生徒を対象にアンケート並びに聞き取り調査を実施した。

7 目標の進捗状況、成果、評価

(1) 研究開発の仮説の検証

構想調書にて設定した研究仮説について検証する。

【仮説1】「協働型学習プログラム」に取り組むことで、GLとしての思考力、コミュニケーション力、多様性・協働性・行動力を育成できる。

【仮説2】「東日本大震災復興プログラム」に取り組むことで、大震災の経験を活かすスケールの大きな復興の担い手を育成できる。

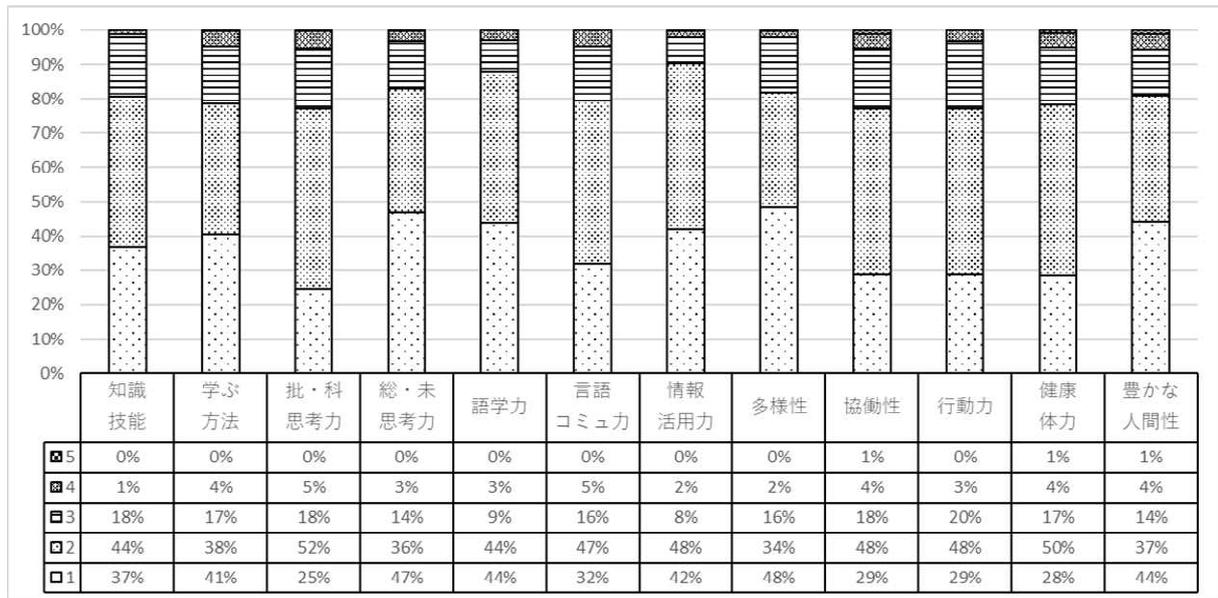
【仮説3】「教員専門性開発アプローチ」による全校あげでの取組、地域と連携した一貫性ある人材育成への取組で、**【仮説1・2】**に対する活動を一層推進できる。

仮説で述べている「GL」は、研究開発名にある「グローバルリテラシー」を指し、具体的には「思考力、コミュニケーション力、多様性・協働性・行動力」のことである。気仙沼高校のSGH事業の取組は「協働型学習プログラム」、「東日本大震災復興プログラム」、「教員専門性開発アプローチ」を通してGLを育み、地域から世界に直接アクセスし、対話によって合意を形成し行動できるグローバルリーダーを育成することが目的である。GLが生徒にどれだけ定着したか、毎年度末に実施している「GL到達度自己評価」等によって仮説を検証する。

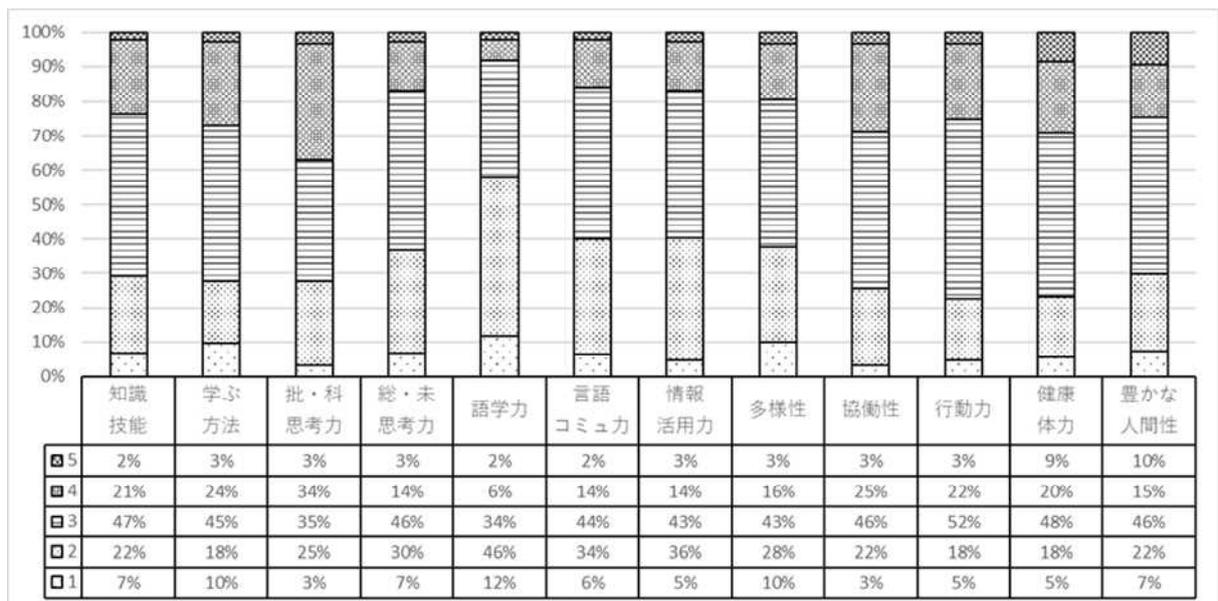
①【仮説1】について

気仙沼高校では平成29年度からGLの到達度についてルーブリック表を用いた生徒による自己評価を実施している。特に自己評価については、GL各項目を「1：努力を期待する段階」「2：もう少しの努力を期待する段階」「3：気高生として到達して欲しい段階」「4：気高生の模範となる段階」「5：全国レベルで高校生模範となる段階」の5段階で評価している。ここでは、令和2年度3学年（平成30年度入学）のデータを使用して、検証する。

平成30年度1学年全員（平成30年5月実施）



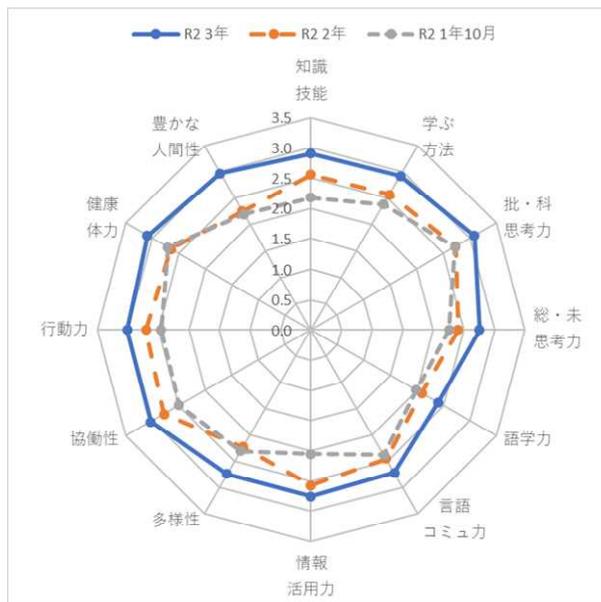
令和2年度3学年全員（令和3年1月実施）



全ての項目において段階3以上の割合が増加している。特に「行動力」は1年次の23%が3年次では77%に、「協働性」は23%が74%に、「批判的・科学的思考力」は23%が72%に、それぞれ大きく増加している。「行動力」については、研究成果を外部発信する生徒が増加し、また、研究内容に関連する具体的実践を行う生徒が現れていることが、高評価につながっていると考えられる。「協働性」については、主に1年次の「地域社会研究」でグループ研究を行う中で培ったものと推察する。「批判的・科学的思考力」については、一定の根拠と論理性を持って成果発表をする過程で身につけたのではないかと。これらの点については【仮説1】は十分達成されたものとする。

一方「語学力」については、1年次の12%が3年次では42%と、大きく伸びているが半数を下回っている。気仙沼高校は国際的な交流等によって海外との交流や留学に対する意欲はあるものの、語学力やコミュニケーション力については指定前から不安視されていた要素であった。数多くの国際交流機会が日常の英語学習につながっていないことが課題として残る。

右のレーダーチャートは、今年度1学年（探究活動本格化前）と、2・3学年（年度末）のGL自己評価各項目の平均値を表したものである。探究活動に3年間取り組んだ3学年の平均値が全ての項目において他学年を大きく上回っていることがわかる。授業改善で重点を置いた「教科における習得→活用→探究をベースとした『単元指導』の充実」のサイクルが機能したことの効果が現れたものと考えられる。ただし「語学力」の平均値が他と比べて低いことについては、先述したとおりである。



②【仮説2】について

「東日本大震災復興プログラム」は、被災地のSGH指定校にしかできない、大震災の経験を素材とする学びを中心として目標資質・能力を育み、グローバルな観点から未来の社会像を創造し、その実現に向けて協働的に行動するスケールの大きな復興の担い手の育成をめざすプログラムである。本プログラムにより、地域への愛着や社会性を高めるだけでなく、世界的視点を持って豊かな未来を希求する人材育成をめざしている。

SGH指定前の平成27年度から「グローバル化に関する意識調査」を実施しているが、「東日本大震災復興プログラム」に関連する質問から【仮説2】を検証する。

Q2 将来、グローバル社会で通用する人材になりたいですか。

	H30 1年	R1 2年		R2 3年	
		全体	創造類型	全体	創造類型
ぜひになりたい	27.5%	23.4%	45.9%	25.0%	39.4%
できればになりたい	64.4%	64.7%	43.2%	65.5%	54.5%
あまりなりたいたと思わない	6.9%	8.1%	5.4%	8.2%	3.0%
全くなりたいたと思わない	0.9%	1.6%	5.4%	1.4%	3.0%

Q6 将来、震災復興や地元のために貢献したいと思いませんか。（3年生対象の設問）

	H30 3年	R1 3年		R2 3年	
		全体	創造類型	全体	創造類型
貢献したいと強く思う	28.4%	27.4%	31.4%	30.0%	30.3%
できれば貢献したいと思う	62.5%	62.0%	62.8%	60.0%	60.6%
あまり貢献したいと思わない	7.4%	9.0%	2.9%	8.2%	6.1%
全く貢献したいと思わない	1.8%	1.6%	2.9%	1.8%	3.0%

Q2「将来、グローバル社会で通用する人材になりたいですか」について、基本的に入学時より肯定的評価が高水準で推移しているが、指定前から高水準にあり（平成27年度で82%）、気仙沼高校生が国際的な交流等の実施により海外との交流や留学等に対して継続して意欲を持ち続けているということが言える。

Q6「将来、震災復興や地元のために貢献したいと思いませんか」であるが、こちらも、指定期間を通じて肯定的評価が9割程度を維持している。東日本大震災から10年が経過し、令和2年度1学年は震災後小学校に入学したこともあり、記憶の風化が懸念されるころではあったが、少なくとも気仙沼高校生については、大震災からの復興に高校生として取り組む活動の中で、地域の良さや強みを多面的に分析し、社会をシステムとして捉えながら思考し、世界に発信し、コミュニケーションをとりながら協働的かつ総合的に未来を構想できる素地ができあがっていると考えられる。

③【仮説3】について

【仮説1】、【仮説2】に対する取組を推進する環境づくりとして、学校をあげて効果的な学習に取り組むために、気仙沼市等との連携を強め、教員専門性開発アプローチに取り組んできた。具体的な取組として、AL型授業法、PBL型学習指導法などの授業改善やパフォーマンス評価（ルーブリック評価）を含む評価研究を行い、全校をあげて継続的・発展的に繰り返されていくらせん型教員研修システムを構築した。

また、学習に対する詳細な実態調査に基づく生活習慣の指導法の見直しを行うことで、生徒への指導の改善に活かし事業の推進に寄与するだけでなく、教員集団の育成につながることも意識した。

「6 研究開発の実績」（2）-④-アで先述のとおり、生徒による授業評価の平均値も上昇傾向にあるということから、5年間の授業力向上の取組が一定の評価を受けていることがわかる。この取組により【仮説1】、【仮説2】に対する取組を推進する環境形成が図られたと考えられる。

（2）中間評価において指摘を受けた事項についての改善・対応状況

【中間評価の結果より】

- ・「これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成がおおむね可能と判断されるものの、併せて取組改善の努力も求められる。」
- ①テーマごとに主担当の教員を任命するシステムとすることで教員の参加と責任が明白になっており、各教員が事業の運営に積極的・主体的に関わっている点が高く評価できる。
- ②「震災復興」プログラムなど地域の力をうまく活用している例もあり、東日本大震災を経験し、その復興に努力している気仙沼地区の期待を担った一層素晴らしい研究となることが期待される。
- ③学校が独自で設定している評価の観点や通常の教科の指導の在り方が本事業の趣旨に合致していない点が見られるため、中間評価自己評価票に示された評価の観点を参考として、日常的な振り返りを行いながら吟味し、十分な成果をあげるよう改善することを期待したい。

【改善・対応状況】

③について

SGHで目指す課題研究を中心としたカリキュラムに向けて、学校が独自で設定している評価の観点は、令和4年度から始まる新学習指導要領に円滑に移行できるように、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に変更した。また、すべての教科において観点別評価を導入した。高等学校で観点別評価を行うことは、これまでの考査による知識に偏重した評価の在り方から、3観点のバランスのよい指導が求められる。3観点で評価するには考査以外の複数の評価の材料があるべきで、「地域社会研究」「課題研究Ⅰ」「課題研究Ⅱ」での培った研究手法を用いて、すべての教科で探究活動を実施してきた。探究活動と教科の学習の一体化を目指し、今後も改良を加えていきたい。

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

気仙沼高等学校SGH事業の教育課程上の中心となる課題研究として、1学年学校設定科目「地域社会研究」、2学年創造類型学校設定科目「課題研究Ⅰ」、3学年創造類型学校設定科目「課題研究Ⅱ」を設定した。

①「地域社会研究」

指定初年度より1学年必履修の学校設定科目「地域社会研究」をスタートさせ、地域の宝である海を素材として、多種多様な地域課題を理解させるとともに、批判的・科学的思考力やプレゼンテーション力を中心としたコミュニケーション力を育成するための取組を行った。

活動序盤は、地域の現状を改めて知り、興味・関心がわいたキーワードを見つけることを目的として、「海と産業」「海と人間」「海と防災」「海の文化」「三陸の自然」の5領域について地域の有識者の講演を聴く「地域理解講座」や、課題研究を行う上で必要となる、情報検索方法や文章の書き方等について学ぶ「テクニカル講座」等を実施した。

その後、研究グループを編成する。基本的手順は指定初年度から変更なく、2クラスをひとまとまりにし、学校側が設定した5領域24分野から生徒各自の希望をとり、機械的に（男女比等も考慮せず）3～5名の班を作成する。決定後メンバーで話し合いを重ね、担当教員の助言を受けながら研究テーマを決定する。2クラス単位とすることで、クラスをまたいだグループとなり担任の状況把握が難しくなる問題を最小限にとどめつつ、生徒の希望を重視した編成を可能とした。

フィールドワークは、気仙沼市内の官公署・事業所および仙台市内の大学を訪問先に2回実施した。気仙沼市内の訪問先は、指定初年度の22カ所から最終年度は32カ所と約1.5倍に増加しており、このことは気仙沼高校の探究活動が市全体に浸透してきていることを表している。また、大学訪問については、年を追うごとに有用性が高いと評価する生徒が増加しており、専門的な助言をもらえる機会が重要なことを証明している（H28：60%→R2：63.2%）。

探究活動のまとめとして、1月末に全体発表会を実施し、全ての班がポスター発表を行い、優秀賞・優良賞を領域ごと選出している。指定4年目の令和元年度からは、受賞班のポスターを校内複数箇所に掲示しており、掲示を見た下級生がポスター作成の参考にしている。また、多くの人々に探究活動に対する理解を深めるため、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館や気仙沼市総合体育館でもポスター展示会を開催した。

②「課題研究Ⅰ」

指定2年目に2学年創造類型対象の学校設定科目「課題研究Ⅰ」をスタートさせた。「地域社会研究」での経験を踏まえ、他の地域や海外との比較をし、SDGsに代表されるグローバル課題と関連づけることで研究活動の深化を図った。

地元の自然に触れ合うフィールドワークⅠやクリティカルシンキング育成の授業を経てから、個人でテーマ設定を行う。7月のフィールドワークⅡで、大学の先生から研究の方向性について助言をもらい、研究活動を始める。担当教員を8名配置し、日々の指導や評価に当たる。

「課題研究Ⅰ」の中心事業のひとつである台湾研修は指定2年目（平成29年度）から始まり、当初は参加希望者を募り、校内選考の結果決定した生徒が参加する形態をとった。国立成功大学や国立台南高級海事水産職業学校を訪問し、研修や交流を行うなど、参加生徒にとっては協調性、計画力、行動力、コミュニケーション能力がそれぞれ伸長するなど有意義なものとなったが、参加できなかった生徒の授業のあり方が実施初年度から問題視された。実施2年目（平成30年度）には異文化理解のイベントや外部コンテストへの応募準備等、学習計画に一定の工夫を行ったが、参加

生徒が得た各能力や経験を、探究活動に励むできるだけ多くの生徒に積ませたいとのことから、実施3年目（令和元年度）からは、2学年創造類型全員（1クラス）対象の研修旅行とした。このことで、研修の各場面で級友相互の協力が図られる様子が見られたが、一方で、特に英語でのやりとりが必要な場面において、英語の苦手な生徒が得意な生徒に頼ってしまい、英語を話さないまま終わってしまう場面も見られた。指定解除後も台湾研修は基本的に継続の方向であることから、生徒全員が英語でのやりとりをできる方法を準備することを今後の課題としたい。

発表会は、10月下旬と1月下旬の2回実施する。10月の発表会は、夏季休業前にテーマが決定し、研究がスタートする状況から、中間発表会として位置付け、多くの意見をもらうことで研究を整理させることと、発表方法や発表技術について向上を図ることを目的としている。その後研究が本格化するとともに、外部発表会に参加することで、プレゼンテーション能力の伸長を図り、1月の全体発表会を迎える。「地域社会研究」と同様に審査を行い、優秀賞数点を選定し、受賞生徒のポスターを校内複数箇所や気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館や気仙沼市総合体育館に掲示している。

③「課題研究Ⅱ」

指定3年目に3学年創造類型対象の学校設定科目「課題研究Ⅱ」が始まった。2年生までの研究をブラッシュアップするとともに、研究を融合することも視野に入れながら、年度前半は課題の洗い出しに力を入れている。また、夏休みを通して、自らの研究を外部のコンテストに応募することで、研究成果を広く伝え、外部からの評価をうけることを狙いとした。年度後半は、英語によるポスターや論文作成に向けて活動を行う。最終発表会を「課題研究Ⅰ」と同日に行い、英語によるポスターを作成し、発表も英語で行うことを基本とした。年度当初は英語での活動に苦手意識を持っていた生徒が多い中、苦戦しながらもやり抜けたことが自信となり、その後の進路活動にも生かされている。興味関心から疑問を持ち、自らが考え行動するというプロセスが、課題研究を3年間行ってきたことで養われ、その内容が自己の進路希望とマッチした結果、大学入試等でも研究成果を面接やプレゼンテーションで発表することができ、多数の生徒が成果を生かすことができている。3年間探究活動を行うことは、生徒の様々な能力の伸長にとって非常に有意義であると考えている。

（2）高大接続の状況について

気仙沼高校と各大学との教育連携については、その地理的環境から継続・発展させることができるのか不安もあったが、県内では東北大学、宮城教育大学、宮城大学、東北工業大学に今年度は尚絅学院大学を加えた5大学、県外では東京大学や東京海洋大学と連携し、各種講演会の講師、フィールドワークでの指導や発表会でのアドバイザー等の協力をいただいている。特に、東北大学災害科学国際研究所には、SGH指定以前から、東日本大震災からの復興を目指した取組において協力をいただいていたが、指定後も震災・防災講演会の講師や「地域社会研究」内の「海と防災」分野をはじめとする課題研究に対する指導を中心に多大なる協力をいただいている。また、今年度から始まった気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館とけせんぬま震災伝承ネットワークのコラボレーション事業である語り部活動を行っている生徒に対しても支援をいただいている。

これら大学とは、単位履修制度の設置には至っていないものの、SGH指定解除後も探究活動を継続していくことから、引き続き連携を深めていきたい。

（3）生徒の変化について

SGH指定の5年間における、生徒の変化や課題研究活動を通して生徒の能力・資質及び意識の

変容について、気仙沼高校で毎年実施している各種調査の結果から考察する。

①「グローバル化社会に関する意識調査」

Q1 自分の将来にグローバル化の影響はあると思いますか。

	H30 1年	R1 2年		R2 3年	
		全体	創造類型	全体	創造類型
ある	60.9%	54.0%	67.6%	64.5%	69.7%
ない	2.1%	5.1%	5.4%	3.6%	6.1%
わからない	36.9%	38.7%	27.0%	31.8%	24.2%

「ある」と答えた生徒の割合はSGH事業開始前年度（平成27年度）1年生が54.1%であった。事業開始後は概ね60%以上の割合で推移してきたが、令和元年度1年生は60%を割り込んだ。ただし、「ない」と答えた生徒の割合は1.7%と、これまでと同傾向であることから、今後の社会におけるグローバル化が一層進むであろうという認識は、一定程度定着しているものと考えられる。一方、他の質問にも言えることだが、2年生になると肯定的評価が低下する傾向がある。1年生のように入学した当初のような手探り感や緊張感を感じるわけでもなく、3年のように受験や進路選択に対する社会からの緊張感を感じるわけでもなく、1年間経験を積んだことで学校生活の効率的な過ごし方をなんとなく把握し、また、後輩ができたことで、ある程度学内での地位ができて気を抜いてしまうという、いわゆる「中弛み」の影響が、探究活動に関する意識調査の結果にも表れているものと推察する。ただし、課題研究を軸とするカリキュラムを展開する創造類型は肯定的評価が高率であることから、創造類型での取組をいかに学校全体に波及させていくかが課題となる。

Q2「将来、グローバル社会で通用する人材になりたいですか」及びQ6「将来、震災復興や地元のために貢献したいと思いますか」については「7 目標の進捗状況、成果、評価」（1）-②で先述したとおり。

②「学校評価アンケート」

気仙沼高校で実施している学校評価アンケートには、探究活動・課題研究に関連する「SGH事業によって、生徒の活動の場が広がり、学力向上に寄与している。」「課題研究を通して、身近なものに疑問を持つようになった。」という2つの設問がある。以下はこれら設問の回答推移である。

Q：「SGH事業によって、生徒の活動の場が広がり、学力向上に寄与している。」

入学年度	1年次		2年次		3年次	
	9月	1月	9月	1月	9月	1月
R2（現1年）	79.3%	70.4%				
R1（現2年）	72.7%	67.8%	63.7%	64.9%		
H30（現3年）	78.7%	90.4%	58.1%	49.6%	67.9%	72.9%
H29			64.9%	88.0%	69.0%	73.1%
H28					62.2%	91.0%

Q：「課題研究を通して、身近なものに疑問を持つようになった。」

入学年度	1年次		2年次		3年次	
	9月	1月	9月	1月	9月	1月
R 2 (現1年)	68.8%	67.3%				
R 1 (現2年)	56.9%	61.0%	64.1%	65.4%		
H 3 0 (現3年)	62.6%	67.6%	57.0%	56.6%	62.2%	73.9%
H 2 9			57.8%	56.2%	64.6%	68.3%
H 2 8					57.6%	60.8%

各年度とも、1年次の数字が高いのは、気仙沼市が小・中学校9年間を通して探究活動を重視しており、その効果が現れていることと、「地域社会研究」を学年全体で取り組んでいることが大きな要因と考えられる。一方、2年次になると、他の設問と同様、探究活動の中心が創造類型になるということもあり、人文・理数類型の生徒を中心として数字が落ち込む傾向がある。3年次になると数字を戻していることから、①で述べた「中弛み」の影響をいかに最小限にとどめ、活動を充実させていくか検討し、SGH指定終了後の取組に反映させていく必要がある。

(4) 教師の変化について

学校評価アンケートの質問項目より…各年度後期（1月）実施

	H 3 0	R 1	R 2
私は生徒が進んで課題を追求する態度を育てる授業を行っている	58.3%	63.6%	73.9%
私は授業に関する調査の結果を受けて、その後の授業改善を行っている	89.6%	93.0%	90.9%
SGH事業によって、生徒の活動の場が広がり、学力向上に寄与している	86.0%	91.3%	89.1%

SGH事業が気仙沼高校の教育活動に好影響を与えたという認識については、職員集団のほぼ一致した見解である。この5年間ではほぼ全ての教員が探究活動の指導を担当し、もはや探究活動は当たり前なものとなっている。また、各教科の日常的な授業の改善が進み、GL育成の視点で「主体的、対話的で深い学び」が多く取り入れられているようになってきている。教科の特性により取り組みやすさに違いがあるのは事実だが、各教科の工夫について研究授業等を通して情報を共有し、意見交換を重ねながらさらなる授業改善を図っていくことが期待される。

(5) 学校における他の要素の変化について

SGH事業における実践手法の一つである「教員専門性開発アプローチ」では、授業・評価・生活習慣指導法の改善、問題解決型（「PBL型」）学習指導法の開発、パフォーマンス評価法の開発を行ってきたが、本アプローチにより授業改善が進められたことが、大きな変化と言える。令和元年度より「授業力向上プログラム」を実施し、数多くの研究授業を実施し、その中で、GLの育成のため、AL型授業法、PBL型学習指導法などの授業改善を行った。その成果として日常的な授業においても生徒が主体的に学習を行う場面が多く取り入れられてきている。

また、令和元年度にはAL型授業法の実践先進校である岩手県立盛岡第三高等学校から講師を招き、授業実践と検討会を行い、今年度は、國學院大學人間開発学部の田村学教授から、新学習指導

要領の理念、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善、総合的な探究の時間における探究のプロセスについての講演を受けた。これら研修により、授業実践の手法を学び、新学習指導要領の考え方を理解することで、一層の授業力向上が図られている。

さらに、日々の授業実践につながるものとして、ICT機器利用技能の向上が挙げられる。今年度、気仙沼高校にも電子黒板等のICT機器が本格導入されたが、使用上の注意や授業での使用例等について教員間で研修を行った。特に、授業での活用例については、ICT機器を利用した具体的な活用方法を模擬授業形式で研修することにより、日々の授業実践につなげている。

その他、学校行事や進路指導、部活動等において探究的な活動が展開されており、学校全体が探究活動に彩られていると言える。

(6) 課題や問題点について

SGH事業が気仙沼高校の生徒にとって大変有意義な取組であることは、もはや言うまでもないが、探究活動をどのように指導していくかについては、事業開始当初より多くの教員が戸惑い、苦しんだ点であった。5年間にわたり校内外の研修や先進校視察を積み重ねることで、次第に気仙沼高校の探究指導法として定着が図られたと考えられる。しかし、SGH指定終了後の学校の方向性、探究活動のあり方については教職員から様々な指摘がなされた。

- ・課題研究は特色として非常に重要であると思うので、生徒の有用感や、将来にも役立つと感じるスキルを身につけることが重要だと考える。
- ・生徒が大きな成果を得るには緻密な指導計画や充実した授業作り、システムの構築が必要なので教員の多忙感につながると思うが、片手間でやっても大変なものは大変なので、それで成果が見込まれない方が無駄に感じる。
- ・普段の授業も理解するのに苦勞している生徒もいる中、あれもこれもとやらせるような状況になり生徒にとって負担になる。
- ・教員側が想定している以上に、部活・学習・探究活動・帰宅後の情報過多（スマホ等の端末による情報提供）で生徒は手一杯な気がする。過去の生徒像はいったんリセットして、どのように生徒に学習機会を無理なく提供できるかを整理して考える必要もあるのかもしれない。
- ・課題研究がどのようなものか、どう指導すべきか、全教員で統一を図るのは難しい。

これらから、探究活動が生徒に与える有効性については概ね理解が図られているが、生徒・教員とも負担が大きくなるのではないかと、という懸念をどのように解消し、探究活動を充実させていくかが今後取り組むべき課題である。

この課題にいかに対処して、新たな探究学習を展開していくかについて、気仙沼高校では現在、これからの学校づくりのための「グランドデザイン」が検討されており、今年度末までには提示できる見通しである。

(7) 今後の持続可能性について

今年度でSGH指定期間は終了するが、これまで取り組んできた各事業については、基本的に継続していく予定である。特に「地域社会研究」については、気仙沼高校教育課程の柱として、学習指導要領本格施行後も学校設定科目として実施する。また、「6 研究開発の実績」の(2)－②－エに記載のとおり、今年度より2学年人文・理数類型においても「総合的な探究の時間」での探究学習を本格化させ、さらに、令和4年度入学生からは「課題研究Ⅰ」を名称変更の上2年生全員が取り組む計画である。

これら探究活動内の個別具体的な事業については、国からの予算措置がなくなることから、これまで実施してきた全ての事業を同一内容で実施することは困難ではある。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大は、多くの事業の中止・計画変更を不可避にしたものの、海外交流やフィールドワークのオンライン実施等代替事業により、今後の可能性に一定の示唆を与えた。生徒に対しこれまでのようにコストをかけることはできないが、同等かそれ以上の教育的効果を生むことができるよう、計画を策定していきたい。

協力をいただいた各大学に対しては引き続き連携をお願いし、探究活動に対しての指導助言をいただきたい。また、台湾研修を通じて生まれた、国立成功大学、国立台南高級海事水産職業学校、国立北門高級中学等、台湾の教育機関との連携については、これを恒常的なものにすべく、継続的なオンライン交流を重ねながら、台湾研修の再開と相互訪問の実現に向けた取り組みを展開していきたい。

SGH事業の指定終了に伴い、管理機関としての県教委の関わりは終了することになるが、今後も緊密に連携し、これまでの成果を普及させるとともに、今後も続く気仙沼高校の探究活動を積極的に支援していきたいと考えている。

【担当者】

担当課	高校教育課教育指導班	TEL	022(211)3624
氏名	高木 伸幸	FAX	022(211)3696
職名	主幹(指導主事)	e-mail	takagi-no557@pref.miyagi.lg.jp

課題研究活動

1 課題研究活動

1-1 学校設定科目「地域社会研究」における課題研究

(1) 目標

地域の海を素材として、多様な地域課題を理解させるとともに、科学的探究の各段階の手法を身に付けさせながら、批判的・科学的思考力、プレゼンテーション能力を中心としたコミュニケーション力を育成する。

(2) 対象学年

1 学年 229名

(3) 内容

水曜日 6 校時に地域社会研究を配置し、表 1-1 の内容で全 69 時間実施した。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で 6 月まで臨時休校期間があったが、「論文やポスターの見方」や「統計分析」、「未来分析 SDGs や Society5.0」といったテーマの動画を作成・配信をした。臨時休校明けから夏季休業までの期間ではテーマを設定するための「研究を行う意義」や「テーマの探し方」、「研究を進める上でのさまざまな技術」について学んだ。

夏季休業明けの 8 月に、5 領域 24 分野から希望をとったうえで、3~5 名の班を作った。各班に 1 名ずつ教員を配置し、指導や評価、フィールドワークの引率を担当した。各班が取り組んだテーマが表 1-2 になる。

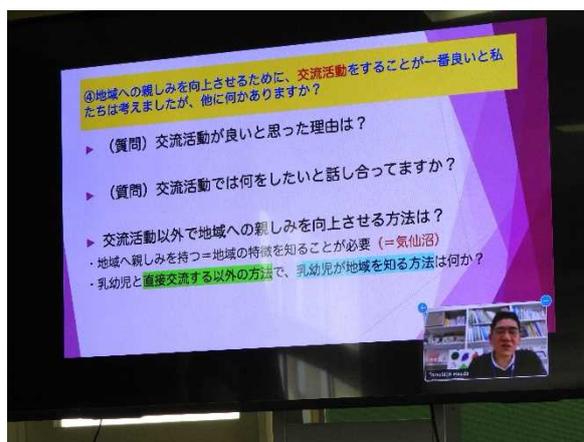


表1-1 実施内容一覧

月	学習テーマ	学習内容	時数
臨時 休校 期間	遠隔授業	動画 A：論文ポスターの見方 動画 B：地社研ガイダンス 動画 C：統計分析 動画 D：未来分析 (SDGs, Society5.0, 新しい生活様式)	
6	ガイダンス	地域社会研究の概要について理解する。	1
	①テクニカル講座	研究を進めるうえで必要となる技術について学ぶ。	2
7	未来分析 A	自分の未来と次年度の類型選択について考える。	1
	②震災・防災講演会	災害安全・生活安全における自助のための知識を得る。	2
	③地域理解講座	地域が抱える課題や現状についての講演を聞き、今後の研究テーマ決定への準備を進める。	2
	自己理解	R-CAP 結果の分析, 自分, SDGs と地域を考える。	2
8	研究領域とテーマを知る	研究活動の導入を体験し, 研究分野を決定する。	1
	グループ内 ディスカッション	思考ツールを用い, SDGs と地域を絡め, 考えをグループ内で共有する。	2
	研究計画書の作成	研究計画書を作成し, 今後の計画への見通しを立てる。	4
	未来分析 BC	職業と学問についてまとめ, 発表する。	4
9	未来分析 D	進路高話を拝聴し視野を広げる。(自分と社会を結びつける)	2
	未来分析 E	類型ガイダンス	2
10	フィールドワーク事前準備	研究テーマを焦点化し, 各事業所での発表準備をする	6
	④フィールドワークI	市内施設等を訪問し, 研究に関する新たな知識を得る。	3
	グループ研究 α	中間発表会に向けて研究計画を見直す。	2
	校内発表会見学	2～3 学年の発表を見学する。	2
11	グループ研究 α	担当教員の指導を受けながら, 研究を深める。	2
	グループ研究 α	中間発表会に向けてスライド作成の等準備を進める。	2
	⑤中間発表会	パワーポイントを用いて, ここまでの研究成果について口頭で発表する。	3
	グループ研究 β	担当教員から助言を受け, 研究を深める。	3
12	グループ研究 β	フィールドワークに向けて準備を進める。	2
	⑥フィールドワークII	課題研究のテーマに関連する施設や大学での指導・オンラインによる指導を受けることで, 研究内容をより高いものにする。	4
	グループ研究 β	フィールドワークを振り返り, 研究を深める。	3
1	グループ研究 β	研究を深化させる。	1
	グループ研究 β	発表会に向けて, ポスター作成を進める。	2
	グループ研究 β	口頭発表の準備やポスターの修正を行う。	2
	領域発表会	担当教員に向け, ポスター発表を行い, 助言を受ける。	2
	⑦学年発表会	ポスターセッションにより, 研究成果を発表する。	4
2	まとめ	資料やデータ, ファイルの整理を行う。	1

表1-2 研究領域とテーマ一覧

	領域	班名	テーマ	人数
海と産業	観光業	1102A	現在ある観光資源を利用して、気仙沼の魅力をPRする方法について	4
	観光業	1102B	気仙沼市のふるさと納税をグローバル化し、活発化させるにはどうしたらよいか	4
	観光業	1102C	若者観光客を増やすためのネットの活用法とは	3
	商業・商店街	1103A	気仙沼の観光スポットとBRTの連携を強めれば利益をもたらすことにつながるのではないかな	4
	観光業	1103D	気仙沼の観光地をよりよいものにし、観光業を発展させるために私たちができることとは	3
	海洋資源	11XA	観光客が気仙沼に思い出を残し、リピーターになるためには	4
	コミュニティ	11XC	気仙沼を舞台とした朝ドラをきっかけに気仙沼の食産業を潤す。また継続させるためにはどうしたらいいのか考える。	3
	観光業	1302A	気仙沼の海に商業施設を作って利用できるか	4
	観光業	1302B	気仙沼の豊かな食べ物を利用して、気仙沼をよりPRするには	5
	商業・商店街	1303A	平均寿命の低い気仙沼は地産地消で改善できるか	5
	観光業	1501A	商店街をどのように改善したら、1ターンの期待できるか。	4
	観光業	1501B	コロナ禍から学ぶ、気仙沼のスローフードを通して観光客としての魅力を再発見・発信していく方法	3
	観光業	1501C	ご当地食材を観光資源とし、観光業を発展させる。	4
海と人間	教育・スポーツ	1106A	気仙沼の自然を生かした施設は気仙沼の観光客の増加につながるのか	4
	教育・スポーツ	1106B	気仙沼市の人口減少を軽減するためには、どのようなことが必要か	3
	保健・医療・福祉	1107A	市立病院と個人医院の医療体制の違いと効果から病院マップを作成する	3
	保健・医療・福祉	1107B	若者の流出を防ぐ医療福祉・教育にはどのようなものがあるのだろうか	3
	人口・過疎	1305A	気仙沼の保育園児への交流による気仙沼への親しみの向上について	3
	保健・医療・福祉	1307A	気仙沼における親のための子育て支援	4
	保健・医療・福祉	1307B	気仙沼の医療の現状をオンライン医療で発展させられるか	4
	保健・医療・福祉	1307C	医師不足とその解決策	3
	保健・医療・福祉	1307D	気仙沼の少子高齢化から見た地域活性化の在り方	3
	コミュニティ	1308A	若者が住みたいと思う気仙沼とは	5
	教育・スポーツ	13XC	気仙沼市における学校に通えない子供の現在と状況と教育を改善するために	3
	人口・過疎	1505A	過疎化が進む気仙沼における都市化が及ぼす影響と再建について	4
	人口・過疎	1505B	どうしたら気仙沼市民や気仙沼を訪れる観光客にマンホールを通して魅力を伝えPRできるのか。	4
	人口・過疎	1505C	気仙沼を子育てしやすい町にするためにはどうすればいいのだろうか	3
	教育・スポーツ	1506A	勉強スペースを市内に増やすことは中高生の学力向上につながるのか？	4
	教育・スポーツ	1506B	撒布が気仙沼に与える影響とは	3
	教育・スポーツ	1506C	気仙沼の学生における少子化を利用した学力向上について	4
	コミュニティ	15XA	気仙沼の外国人労働者の多くを定住させるためには	3
	コミュニティ	15XB	人材確保を目的とした離職させない職場環境作りとは	4
地理歴史	15XC	気仙沼のみなとまつりの魅力をもっと多くの若者たちに伝える方法は何か。	3	
海の文化	伝統文化	1109A	自然と共存する文化をつくることで持続可能な町を実現できるか	5
	国際化	1112A	気仙沼のグローバル教育を促進させるためには	4
	衣食住	1310A	気仙沼の伝統料理を活用したアレンジ料理によって認知度を向上できるのか	4
	伝統文化	1509A	気仙沼の人口減少を防ぎ、地域活性化するにはどうするべきか？	5
	国際化	1512A	気仙沼に来る外国人観光客を増やすために考えられるInstagramの可能性	4
三陸の自然	三陸の海	1115A	三陸の海は震災の前と後で、気仙沼にどのような持続可能な利益をもたらしたか	3
	三陸の海	1115B	海洋ゴミ問題を改善するために私たちにできることとは	3
	エネルギー	1314A	気仙沼市内における海産物を利用したバイオマス発電を実現するには	3
	三陸の海	1315A	気仙沼の海の特産品を対象としたクラウドファンディングによる気仙沼の認知度向上について	4
	環境	13XA	どうすれば森恋活動を周知させることができるか(森恋:海の自然環境改善のための植林など)	4
	環境	1513A	太陽光発電は気仙沼で推進していくべきか	3
	三陸の海	1515A	気仙沼の魅力を伝えていくためには	3
	三陸の海	1515B	気仙沼の海を生かした人を呼び込む町づくり	3

海 と 防 災	地震津波	1117A	災害時の SNS の有用性について考える	4
	復旧復興	1118A	観光客増加は気仙沼の復興に有効か	3
	復旧復興	1118B	コロナ禍で震災の教訓を学ぶにはどうすれば良いか	3
	震災の記録・伝承	1119A	高校生の語り部を増やすことは私たちの防災意識向上につながるのか	3
	減災	1122A	災害時の防災アプリの有効性について	4
	減災	11XB	災害時マニュアルを作ることによる気高生の防災意識向上について	3
	防災町づくり	11XD	おにごっこ等のゲームを通じて小学生の災害発生時の判断力を高めることは可能か	4
	国際化	1312A	イスラムの人々でも食べられるような気仙沼の特産品を用いた料理の開発	5
	地震津波	1317A	気仙沼市内の小・中学生の防災意識をゲームを用いて向上させる	5
	震災の記録・伝承	1319A	気仙沼市内における石碑の有効活用について	5
	災害医療	1323A	気高生は避難所開設・運営のためにどのような行動をすればよいか	3
	復旧復興	13XB	震災を知らない幼稚園児に震災の教訓を伝える絵本を使った防災意識向上について	3
	震災の記録・伝承	1519A	震災の記憶がある人々の記憶の風化防止の有効手段について	3
	災害医療	1523A	災害時の気仙沼においてどのような災害用ロボットが役に立つのか。また現在抱える課題への解決策を講じる	5
	減災	15XD	津波から海と陸の豊かさを守る強いまちをどうやってつくるか？	3
防災町づくり	15XE	災害が起こった時、住民が安心・安全に過ごせる町とは？	3	

(4) 具体的内容

① テクニカル講座

ねらい：課題研究を行う上で必要となる、情報検索方法の種類や媒体による特徴の理解、各システムの使い方、文章の書き方について学ぶことで、今後研究を進める上での基礎知識・技能を身につけさせる。

日 時：6月24日（水） 6～7校時

内 容：3講座を2クラスずつローテーションで受講

講座名	会場	担当教員
A：IT活用講座	第1・2PC室・A教室	鮎貝（情報科）・菊池（図書情報部） 久野（図書情報部）
B：図書情報講座	視聴覚室・B教室 北3階講義室	山本（図書情報）・丸森（司書教諭）・菊田（司書）

A：IT活用講座

インターネットを用いての情報検索方法、新聞データベース検索、論文検索について学ぶ。

B：図書情報講座

参考文献の書き方、書籍分類や探し方、校内外の蔵書検索方法について学ぶ。

総括：さまざまな技術について学んだことで今後の研究活動の円滑化の一助になると感じる一方、インターネットに重きを置きがちにならないよう、文献調査の重要性なども強調すべきだと感じている。



② 震災・防災講演会

ねらい：災害安全・生活安全における自助のための知識を身につけさせる。また、将来直面する課題に対し、適切な意志決定を行い、的確な行動が選択できる能力を育成する。

日 時：7月15日（水） 6，7校時

講 師：東北大学災害科学国際研究所 准教授 佐藤 翔輔 氏

内 容：講演「災害科学の超基礎+α」

ワークショップ「講演内容をワークショップで振り返る」

総 括：震災から数年が経ち、次第に薄れつつある防災意識をもう一度高める良い機会となった。また、被害をどうすれば最小限に食い止めることができるかという「減災」という考えがあることを知ることもでき、今後の研究に生かせる有意義な取り組みだった。また、ワークショップにて生徒が主体的に防災について考えることができる時間となった。



③ 地域理解講座

ねらい：地域が抱える課題や現状について地域で活躍されている方を講師としてお招きし、講演していただく。この講座を通して、講話の中から興味を湧いたテーマや関心が高まったキーワードを書き出し、今後の研究テーマ決定に活かせるようにする。なお、新型コロナウイルス感染症の影響により、事前の動画収録によって講演をしていただいたものもある。

日 時：7月22日（水） 6～7校時

講 師：	「海と産業」	一般社団法人気仙沼地域戦略	小松志大 氏（動画）
	「海の文化」	リアス・アーク美術館 副館長	山内宏泰 氏（動画）
	「海と防災」	気仙沼市総務部危機管理課防災情報係長	鈴木秀光 氏（動画）
	「海と人間」	気仙沼市震災復興企画部長	小野寺憲一 氏
	「三陸の自然」	NPO 法人森は海の恋人 研究員	白幡勝美 氏

総 括：研究活動を始めるとあって、気仙沼の現状や気仙沼が抱える諸課題を意識することができる最適な講座だと感じた。今年度は、5領域から生徒が希望した2つの領域の講話を受け、量質ともに高い貴重な話を伺うことができた。



④ フィールドワーク I

ねらい：課題研究のテーマに関連する市内施設・企業等を訪問し、その分野の現状や抱える課題を聞いたり、現場を見学したりすることで、書籍や電子情報から得られないことができない知識を得る。

日 時：10月7日（水） 5～7校時

内 容：市内施設や企業からのその分野における現状や課題の説明を受ける。また、質疑応答を通して、研究を行う上での助言を受ける。

13：00 方面別に学校出発（バス5台）

13：30 訪問

15：00 終了・移動

15：30 学校到着・点呼

場 所：気仙沼市役所（計74名）

危機管理課（23名）、下水道課（4名）、水産課（9名）、環境課（16名）、
子ども家庭課（6名）、健康増進課（3名）、企画課（4名）

気仙沼市教育委員会（13名）、一般社団法人まるオフィス（19名）

一般社団法人 omusubi（4名）、気仙沼市立病院（13名）

愛好幼稚園（3名）、株式会社阿部長商店（9名）、気仙沼市立病院（13名）

株式会社シグマテック（4名）、気仙沼地域開発株式会社（15名）

一般社団法人気仙沼地域戦略（8名）、齊吉（4名）、リアスアーク美術館（5名）

気仙沼市移住定住支援センターMINATO（4名）、株式会社気仙沼産業センター（4名）

東日本旅客鉄道（株）気仙沼BRT営業所（7名）

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館（14名）、NPO法人森は海の恋人（4名）

総 括：（6）全体的な総括を参照



⑤ 中間発表会

ねらい：これまでの研究を口頭で発表し、生徒やアドバイザーから助言をもらうことで、研究をより深化させる。

日 時：11月11日（水） 5～7校時

内 容：10枚程度のスライドを発表する。発表5分・質疑応答2分・指導助言3分。

教室割・アドバイザー一覧

領域	題数	人数	会場	アドバイザー	担当教員
海と産業	11	42	地学室 (A会場)	東京海洋大学 産学・地域連携推進機構 勝川俊雄 准教授	最上龍 谷内
海と人間①	11	40	視聴覚室 (B会場)	宮城教育大学 英語教育講座 鈴木渉 准教授	小山 菅原希
海と人間②	11	38	1-2教室 (C会場)	一般社団法人 まるオフィス 加藤拓馬 代表理事	最上拓 佐藤龍 内海
海の文化	11	46	物理室 (D会場)	宮城大学 食産業学群 三上浩司 教授	加藤 小野寺潤
三陸の自然	10	35	1-3教室 (E会場)	東京海洋大学 海洋生命科学部 佐々木剛 教授	久野 菊池
海と防災	8	26	1-4教室 (F会場)	東北大学 災害科学国際研究所 佐藤翔輔 准教授（オンライン）	村上 山本

総 括：（6）全体的な総括を参照



⑥ フィールドワークⅡ

ねらい：大学や市内事業所等へ出向き、さまざまな知識を得ることで、研究を深化させる。

日 時：12月12日（土）

●大学グループ（計76名）

号車	人数	フィールドワーク先
1	36	宮城教育大学
2	45	東北大学災害国際研究所
3	21	東北工業大学八木山キャンパス
4	27	東北工業大学長町キャンパス

7：30 気仙沼高校発（友愛団地・大谷・階上公民館・津谷・志津川で途中乗車）
 10：30 各大学着（研究室等訪問）
 13：00 各大学発（志津川・津谷・大谷・階上公民館・友愛団地で途中降車）
 16：00 気仙沼高校着

●市内活動グループ（計20名）

場所	人数	フィールドワーク先
現地	4	Brunch（洋食レストラン）
現地	5	ワルーンマハル（インドネシア料理レストラン）
D教室 （校内）	11	気仙沼医師会 村岡外科クリニック村岡先生

8：30 学校へ登校 その後フィールドワーク先へ移動
 12：20 現地解散

●大学オンラインフィールドワークグループ（計33名）

場所	人数	フィールドワーク先
D教室	23	東京海洋大学
地学室	10	尚綱大学

9：00 東京海洋大学オンラインフィールドワーク開始
 10：30 尚綱学院大学オンラインフィールドワーク開始
 12：00 両大学オンラインフィールドワーク終了

●大学オンラインフィールドワークグループ（計76名）12/15実施

場所	人数	フィールドワーク先
物理室 地学 準備室	6	東北工業大学
E教室 D教室 地学室	70	宮城大学

- 13:45 宮城大学オンラインフィールドワーク開始
- 14:50 東北工業大学オンラインフィールドワーク開始
- 15:30 両大学オンラインフィールドワーク終了

総括：(6) 全体的な総括を参照



⑦ 学年発表会

ねらい：研究の成果をポスターを用いて発表し議論することで、今後の研究に向けて課題を見つけるとともに、発表する態度や聞く姿勢について学ぶ。

日時：1月30日（土）

内容：ポスターセッションによる発表。全62班をA～Cの3グループに分け、各グループで発表5分、質疑5分で同じ内容を3回発表する。発表時間以外は、聴衆としてその時間にやっている発表を自由に見学する。

地域社会研究担当教員が審査をし、各領域から優秀賞・優良賞を1班ずつ選出する。

- 9:40 開会行事
- 10:00 第①セッション（35分間）
- 10:45 第②セッション（35分間）
- 11:20 休憩
- 11:30 第③セッション（35分間）
- 12:10 閉会行事
- 12:20 ポスター撤去・ワークシート記入

受賞班

領域	賞	班	タイトル
海と産業	優秀賞	1501B	コロナ禍から学ぶ、気仙沼のスローフードを通して観光客としての魅力を再発見・発信していく方法
	優良賞	1102A	現在ある観光資源を利用して、気仙沼の魅力をPRする方法について
海と人間	優秀賞	15XB	人材確保を目的とした離職させない職場環境作りとは
	優良賞	1307A	気仙沼における親のための子育て支援
	優良賞	1307B	気仙沼の医療の現状をオンライン医療で発展させられるか
	優良賞	15XC	気仙沼のみなとまつりの魅力をもっと多くの若者たちに伝える方法は何か
海と文化	優秀賞	1509A	気仙沼の人口減少を防ぎ、地域活性化するにはどうするべきか
	優良賞	1310A	気仙沼の伝統料理を活用したアレンジ料理によって認知度を向上できるのか
三陸の自然	優秀賞	1314A	気仙沼市内における海産物を利用したバイオマス発電を実現するには
	優良賞	13XA	どうすれば森恋活動を周知させることができるか（森恋：海の自然環境改善のための植林など）
海と防災	優秀賞	1323A	気高生は避難所開設・運営のためにどのような行動をすればよいか
	優良賞	1523A	災害時の気仙沼においてどのような災害用ロボットが役に立つのか。また現在抱える課題への解決策を講じる
	優良賞	1317A	気仙沼市内の小・中学生の防災意識をゲームを用いて向上させる

総括：ポスターデザインがこれまでよりも見やすくなっているという評価が見られた一方で、結論ありきでの論理構成、テーマと結論の矛盾など、内容面ではまだ改善すべき点が見られた。年間での指導内容をいま一度精査し、研究を行ううえでの論理的な考え方などが身につくような指導をしていきたいと考える。



(5) 評価について

学校設定科目であることから、表1-3の観点により表1-4の配点で評価を行った。レポートやフィールドワークなど、活動ごとにルーブリック表を用いて、担当教員によって、できるだけばらつきが出ないように評価している。

今年度も昨年度同様、学年発表会実施前に、担当教員を対象に、ルーブリック評価研修会を実施した。昨年度の発表映像や実際に使われたポスターを用いて、各評価項目で判断にばらつきが生じる可能性がある点について整理した。

学年発表当日は担当教員2名を1班とし、評価した。

表 1 - 3

評価項目（観点）	具体的な活動
a 地域課題を理解している。	地域を起点とした課題に対して、SDGs や Society5.0 への理解に基づきながら、協働的・科学的に検討し、未来に向かって行動しようとする。中学校での学習や予備調査・講義に基づいて地域課題を設定する。
研究手法を身に付けている (①知識・技能)	先行研究について新聞や書籍、講演等から適切な情報を選びだしたり、講演を聞いたり、文献を読んだりして、基礎的な知識を得る。アドバイザーやTAによる指導を活用しながら適切な方法で研究を行い、丁寧に記録する。
b 批判的・科学的思考力を身に付けている (②思考・判断・表現)	地域課題について、教科横断的に知識を使い、科学的に研究する。未解決な課題を明確化する。対話を通じて批判的にテーマについて考え、研究をより良いものとするよう努力する。研究活動を通じて、論理的に研究を深める力を養う。
c 主体的に解決しようとする態度を身に付けている (③主体的に学習に取り組む態度)	社会や地域が抱える諸課題について関心を持ち、主体的に解決しようとする態度を養う。設定したテーマに関して探究的に取り組む。ポスターセッションやオーラルセッションなどのプレゼンテーションの技法を理解し、相手に適切に伝えるとともに、質疑に対し適切に対応する力を身に付ける。また聞き手として、種々の疑問に対して自ら発問し、議論していく積極的な姿勢を養う。

表 1 - 4

			a	b	c	小計
臨時 休校中	研究を知る 地域・自分・未来を考える	ワークシート Classi アンケート	4			4
6月	テクニカル講座	ワークシート	3			3
7月	地域理解講座	レポート		3		3
8月	グループ内 ディスカッション	ワークシート			3	3
	研究計画書	研究計画書の内容	3			3
10月	フィールドワーク①	事前事後レポート	4			4
11月	中間発表会	感想用紙、聞く態度		3	3	6
12月	フィールドワーク②	事前事後レポート	4			4
1月	領域発表会	論の構成、発表態度	1 5	5	1 5	3 5
	学年発表会	論の構成、発表態度	1 0	1 0	5	2 5
		感想		3	3	6
2月	まとめ	ファイル	4			4
			4 7	2 4	2 9	1 0 0

(6) 全体的な総括

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、例年通りの地域社会研究の諸行事を行うことができなかったが、オンラインを用いたフィールドワークを活用し、例年と比べ生徒がいわゆるホンモノと触れる機会を増やすことができた。その結果として、フィールドワークを有意義だったと答えたイベントにおよそ63%の生徒が答えた。その他、震災・防災講演会やフィールドワークI、領域発表会や学年発表会においてそれぞれ高い数値が表しているとおおり、生徒が学校以外の様々な大人の方と会ったり実体験したりするダイレクターニングが、やはり生徒にとって非常に有意義なものであったと分析する。また、学年発表会が有意義だったと答えた生徒が63.7%だったということにも着目したい。

Q3の多くの項目が昨年度と比べ低く答えている。高校入学が遅れ、様々なことに不安を抱えたまま始まった影響からか、自己肯定感の低さが窺える。しかし学年発表会終了後にSGH指導運営委員の方々からSGH指定5年間でもっとも質の高いものであったといったお褒めの言葉をいただくことができた。無事に自分たちの研究を発表という形で、且つ良いコメントをいただくことができたという点が彼らにとって大きな充足感を与えた要因なのではないか。Q3では「思考力」と「協働性」の項目で肯定的な自己評価が多かった。これは今年導入した3種類の探求プロセスシートが彼らのアイデアや論の展開の手助けになったものと考えられる。「アイデア提案型」「10時モデルを用いた課題解決型」「蚊取り線香モデルを用いた文献中心論証型」の3つの型から1つ選び、枠に沿って情報やデータ、考え等を書き記し、論理を進めていくことができるものであるが、このシートは生徒にとって分かりやすいものであり、それをもとに議論が生まれ、「思考力」と「協働性」が高い数値につながったものと推察する。

一方、最後の学年発表会にて指摘されたことだが、テーマとそれに対する仮説、根拠にズレが生じていたグループが多かったということである。テーマ設定-FWI-中間発表-FWII-学年発表会と、少ない時間の中で研究を深め、いただいたアドバイスを整理しながらポスター作成にも取りかからなければならない計画であった。その過程の中で研究の方向性が多少変わっていくことは十分考えられるが、変わったときにその都度、テーマや仮説を修正する時間を設けることが大切であると実感した。

別紙1-1 事後アンケートの結果 (回答数214 回答率93%)

Q1 将来、震災復興や地元のために貢献したいと思いませんか。

	人数	割合
貢献したいと思う	23	10.0%
できれば貢献したい	52	22.6%
あまり貢献したいと思わない	96	41.7%
まったく貢献したいと思わない	43	18.7%

Q2 研究を進める上で、有意義だったイベントを選んでください。（複数回答可）

		地域理解講座	震災・防災講演会	テクニカル講座	課題図書レポート	グループ内 ディスカッション	フィールドワークⅠ	研究の進め方講演会	中間発表会	フィールドワークⅡ	領域発表会	学年発表会
R2	人数	39	56	28	/	50	117	/	76	136	50	137
	割合	18.1%	26.0%	13.0%	/	23.2%	54.4%	/	35.3%	63.2%	23.2%	63.7%
R1	人数	19	28	42	19	/	124	16	47	140	28	128
	割合	8.3%	12.2%	18.3%	8.3%	/	54.1%	7.0%	20.5%	61.1%	12.2%	55.9%
H30	人数	41	13	49	15	/	128	51	90	135	/	114
	割合	17.3%	5.5%	20.7%	6.3%	/	54.0%	21.5%	38.0%	57.0%	/	48.1%
H29	人数	34	18	27	11	/	126	/	58	103	/	84
	割合	17.3%	9.2%	13.8%	5.6%	/	64.3%	/	29.6%	52.6%	/	42.9%

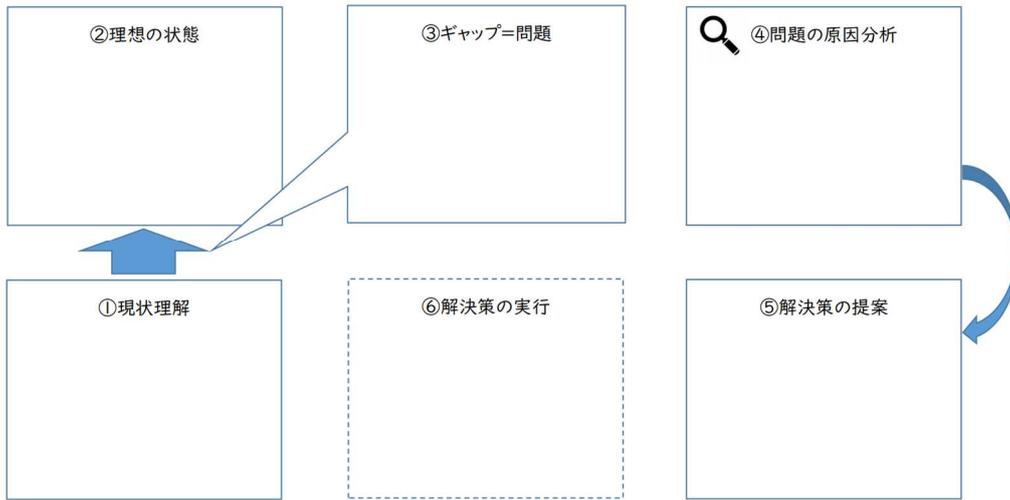
Q3 次の力を現時点で持っていると思いますか。あてはまるものを選んでください。

(①：十分持っている ②：まあまあ持っている ③：あまり持っていない ④：全く持っていない)

	①		②		③		④	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
基礎的・基本的な知識・技能	6	2.8%	108	50.3%	76	35.3%	25	11.6%
批判的思考力・科学的思考力	7	3.3%	128	59.5%	75	34.9%	5	2.3%
総合的思考力・未来思考力	3	1.4%	98	45.6%	95	44.2%	19	8.8%
語学力	2	0.9%	50	21.7%	131	57.0%	31	13.5%
言語的コミュニケーション力	1	0.5%	113	52.6%	94	43.7%	7	3.3%
情報活用力	9	4.2%	112	52.1%	78	36.3%	16	7.4%
多様性	4	1.9%	81	37.7%	105	48.8%	25	11.6%
協働性	8	3.7%	119	55.6%	78	36.4%	9	4.2%
行動力	2	0.9%	102	47.9%	94	44.1%	15	7.0%

別紙 1-2 探究プロセスワークシート

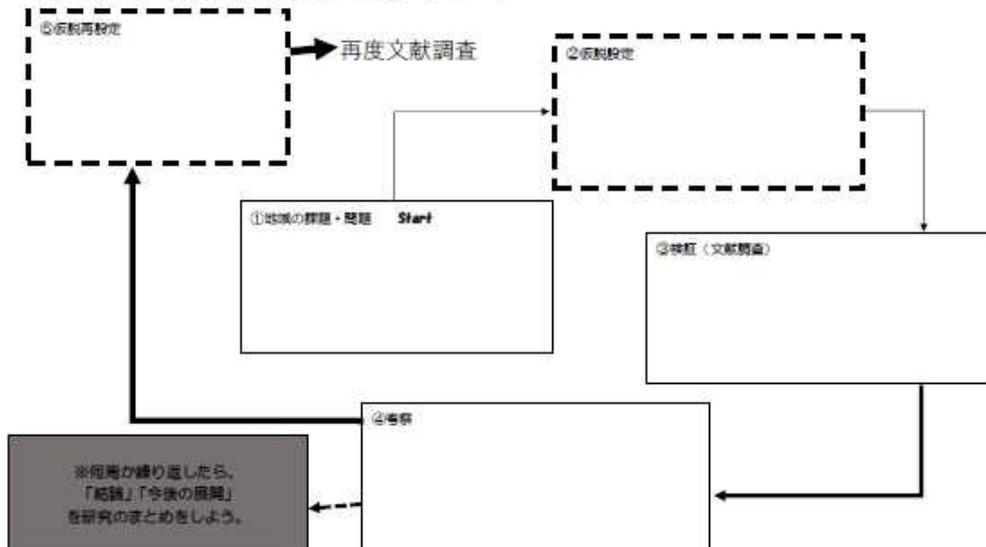
アイデア提案型レポート ()班 テーマ「 」



十字モデルを用いた課題解決型レポート ()班 テーマ「 」



蚊取り線香モデル(論証型:文献中心) ()班 テーマ「 」



1-2 学校設定科目「課題研究Ⅰ」における課題研究

(1) 目標

地域の海を素材として、多様な地域課題を理解させるとともに、科学的探究の各段階の手法を身に付けさせながら、批判的・科学的思考力、プレゼンテーションする力を中心とするコミュニケーション力を育成する。

(2) 対象学年

第2学年創造類型38名

(3) 内容

火曜日6校時、金曜日7校時に課題研究Ⅰの時間を配置し、72時間実施した。また、他類型が総合的な探究の時間で研究活動をおこなった20時間も、創造類型の生徒が自らの研究を進める時間として活用した。4・5月の休校期間中は各自でSDGsについて調べ、世界の課題に目を向けるとともに、新聞記事やニュースから課題を見つける演習を行った。また、地元の自然について学ぶフィールドワークⅠは中止となったが、思考ツールやケースメソッドについての授業を経てから、先行研究調査を経て個人でテーマ設定を行った。7月のフィールドワークⅡではオンラインで大学の先生から助言をいただき、研究計画を立てた。各教科から担当教員8名を配置し、教員1名につき4・5名の生徒を担当し、日々の指導や評価にあたった。大学の講師を招いて効果的な発表について学び、これを踏まえて中間発表会や秋以降の外部発表会に参加することで、プレゼンテーション能力の伸長をはかった。12月の台湾研修は中止となったが、講師を招き、台湾に関する講演会や中国語講座などを2回実施し、異文化理解やグローバルな視点を取り入れるきっかけとした。また、台湾の高校とのオンライン交流会に向けて、英語での自己紹介や学校紹介の準備を行った。1月の全体発表会を目標として研究を深め、ポスター発表を行った。その後、論文執筆を通して1年間の研究をまとめ、次年度の課題研究Ⅱに向けての課題を見つけるとともに次の目標を立てて活動を行った。

表 2-1 実施内容一覧

月	学習テーマ	学習内容	時数
4・5	ガイダンス • 昨年の振り返り	課題研究 I の授業のねらいや、1 年の流れを知る。 昨年の研究を振り返り、今年の研究のヒントを得る。	
	SDGs について	SDGs について知り、テーマ設定の参考とする。	
6	思考ツールを学ぶ	論理的な物事の考え方について理解する。	2
	先行研究調査	昨年度の課題研究 I の論文を読むことでテーマ設定の参考とするとともに、文献の読み方を学ぶ。	1
	言葉の定義・反証可能性	言葉の定義の重要さや、反証可能性の必要さを学ぶ。	1
	ケースメソッド	ケースメソッドを行って、問いを立てる力や、様々な視点から物事を考える力を養う。	2
	テーマ決定に向けて	テーマを絞るための方法について学ぶ。	1
	研究計画書作成	これまでの学習をもとに、研究テーマを見つける。	5
7	テーマ発表会	テーマを発表し、他者や教員から助言をもらい内容の改善を図る。他者の発表を批判的に聞く力を養う。	2
	台湾に関する講演会 I	台湾の文化や伝統について学び、グローバルな視点から物事を考える。	1
	フィールドワーク II (準備含む)	設定したテーマや調査方法に対する改善策や今後の研究方針について、大学の先生から助言をいただき、今後の研究の方向性を修正する一助とする。	4
	研究 α	テーマ発表会を踏まえ、内容の改善を図り研究を進める。	2
8	報告会	各自の研究の現状と今後の進め方を考え、中間発表会に向けて見通しを持って研究を進められるようにする。	2
	研究 α		13
9	講演会 I	研究全体にわたるスキルの部分を改めて学び、修正点等を見つけ出す。	1
	仙台三高 G S フェスタ	希望者が参加し、口頭発表の動画を撮影しウェブ上で公開した。また、オンラインで口頭発表を行った。 課題研究 I からは 2 名が参加した。	
10	研究 α		2
	中間発表会 (準備含む)	大学の先生方をはじめとして、多くの人から意見をもらえる場を設定し、研究内容をより良くしていくための助言を受ける。また、発表方法や発表技術について向上を図る。	8
	研究 β	中間発表会での反省を生かしながら、各自の研究を進める。必要に応じて他者と対話をし、多角的な視点から課題について考える。	7
11	地域社会研究中間発表会 見学	1 学年地域社会研究の発表会を見学し、自らの研究を進めるうえでの参考とする。	2
	台湾講演会 II	台湾の文化や伝統について学び直すとともに、中国語について学び、言語を通して「海外との比較」という視点を持たせた。	2
	海洋教育こどもサミット	課題研究 I から 3 名がオンラインで口頭発表を行った。	
12	研究 β		2
	台湾交流会準備	台湾の高校生との交流会に向けて、日本の文化や自己紹介の内容について考えた。	1

	フィールドワークⅢ・ 集中研究日	大学訪問，地域の企業・団体訪問，アンケート実施などを行い，自らの研究に必要な情報を集める。	4
	全国SGH高校生フォーラム	課題研究Ⅰから1名が英語でのポスター発表を行った。また，2名が高校生同士の英語でのディスカッションを行った。	
1	発表準備	効果的な発表方法について探る。	6
	全体発表会	ポスターセッションによる発表会	4
	論文執筆	論文の書き方について学び，論文を作成する。	5
	みやぎのこども未来博	口頭発表の動画を撮影し，ウェブ上で公開した。 課題研究Ⅰから5名がポスター発表を行った。	
	ダメだっちゃん温暖化	課題研究Ⅰから1名がポスターと制作物を展示した。	
2	課題研究Ⅰのまとめ	情報の整理，アンケートを実施して，1年間の活動を振り返る。	1
	研究γ	まとめを通して見つけた課題や新たな目標についてまとめなおすとともに，課題研究Ⅱに向けた計画を立てて，さらに研究を深める。	5

表3-2 研究テーマ

No.	テーマ	備考
1	数学は世界各国の人々に情報を伝えるツールになりうるか？また，実際の活用法は？	
2	人に過度な恐怖を与えない緊急地震速報を作ることは可能か。	
3	気仙沼における「ゼノフォビア」の実態とその向き合い方	
4	気仙沼の外国人の存在感を高めるには	
5	家庭内の子どものしつけが緩くなったと言われるようになったのはなぜか。	
6	ゆとり教育は本当に失敗だったのか	
7	海岸のゴミ拾いに取り組む人を増やすにはどうしたらよいか	
8	計画の実行力を身につけるにはどうすればよいのか	
9	気仙沼の海水浴場の賑わいを持続させるためには。	
10	COVID-19がもたらすさらなる影響を防ぐためには	
11	民話を使用することで地域愛着を促し，地元離れを防ぐことはできるのか	
12	新型コロナウイルスに対して気仙沼の宿泊業が今すべきことは？	
13	新たな気仙沼の魅力を発見したい～外国人と私たちの見方の違いからアプローチする～	優秀賞
14	在宅で看取りやすい社会を創るには～高校生ができることは～	優秀賞
15	韓国と日本のつながりを深めるにはどうしたらよいか	優秀賞
16	高校生の睡眠の質を高めるためにはどうすればよいか	
17	人に依存している人の特徴とその心理とは	
18	気仙沼の観光をSNSで活性化させることはできるのか	
19	循環資源を用いて有害赤潮問題に貢献できるか	
20	ファッション業界における環境問題を解決するにはサステナブルファッションは有効的か	
21	メンズメイクに対する父親世代の足かせとなっている固定的な概念とは	
22	武道をどのように生活に活かせばよいのか	
23	精神病患者の人権を守るためには	
24	子供への接し方で大切なことは	
25	海洋汚染を解決する取り組みに必要な考え方，行動とは	
26	訪日ベジタリアンに満足して帰ってもらうには	
27	気仙沼を育児のしやすい町にするには～産後うつを防ぐには～	
28	クーポン利用率の現状と経済活動の活発化のためにできること ～クーポンがもたらす可能性～	
29	気仙沼の小学校において，TESOLを用いて英語教育を充実させることは可能か	
30	幼児の防災意識を高めるには	
31	自分自身を好きになるには	
32	気仙沼の鳴き砂海岸の生成とその保全	
33	コロナ禍で気仙沼の観光資源を活性化させるためにできることはあるか。	
34	暮らしにくさを解消するためには	
35	ジェンダーバイアスがもたらす影響とは。私たちができることは。	
36	交通網の拡大による気仙沼の都市開発	
37	教育で最も重視すべきだと言われている「人間力」が重視されなくなってきているのはなぜか，それを改善するにはどうしたらよいのか。	
38	気仙沼にライブハウスができたときの利点	

(4) 具体的内容

① 台湾に関する講演会 I

ねらい：台湾の人々の生活、文化や習慣について、歴史・気候などの視点から理解し、国を超えて世界の人々を理解する素地を育成する。

講師：南三陸町国際交流協会 理事 佐藤 金枝 氏（台湾出身の南三陸町在住者）

日時：7月22日（水）4校時

内容：台湾の文化や習慣、食文化などについて日本との共通点と相違点を交えながら紹介していただいた。また、台湾でのコロナ対策について、マスクの自動販売機や販売場所を知らせるアプリなどを紹介していただき、日本とのコロナ対策の違いについて考える良い機会となった。最後に交流予定の国立北門高級中學からのビデオメッセージを視聴し、交流に向けた意欲を高めることができた。



② フィールドワーク II

ねらい：設定したテーマや調査方法に対する改善策や今後の研究方針について、大学の先生から助言をいただき、今後の研究の方向性を修正する一助とする。

訪問先：宮城教育大学、宮城大学、東北工業大学、東北大学災害科学国際研究所

日時：7月27日（月）～8月19日（水）

内容：上記の期間に1人ずつ大学教員とオンラインで繋ぎ、研究内容と研究計画について助言をいただいた。



③ 講演会 I

ねらい：2年生は中間発表会、3年生は最終発表会に向かうこの時期に、研究全体にわたるスキルの部分を改めて学び、修正点等を見つけ出す。また、本校職員の課題研究指導力向上の機会を設ける。

講師：東北大学大学院生命科学研究科准教授 酒井聡樹氏

日時：9月8日（火）6～7校時

14：20 来校・打ち合わせ（講師控室：小会議室）

14：40～15：35 生徒対象講演会（教員の聴講も可）（於：大講義室）

16：10～17：00 教員対象講演会（於：会議室）

内容：研究の効果的なまとめ方とプレゼンテーション法（ポスター作成等）、論文作成のポイント、聴衆への効果的な伝え方について。



④ 中間発表会

ねらい：大学の先生方をはじめとして，多くの人から意見をもらえる場を設定し，研究内容をより良くしていくための助言を受ける。また，発表方法や発表技術について向上を図る。また，2学年と3学年の縦のつながりをつくり，研究への多角的な見方を養う。今までの研究を発表し，生徒同士の議論やアドバイザーの先生方から助言をもらうことで，後半の研究に向けて課題を見つける。

助言者：宮城大学 高大連携推進室長 教授 笠原 紳 先生
東北大学 災害科学国際研究所 准教授 佐藤 翔輔 先生
東北大学大学院 生命化学研究科 准教授 酒井 聡樹 先生
東京海洋大学 海洋政策文化学科 教授 佐々木 剛 先生
宮城教育大学 教育学部 准教授 野崎 義和 先生
東北工業大学 ライフデザイン学部 経営コミュニケーション学科 教授 二瀬 由理 先生
認定NPO 法人底上げ 理事 成宮 崇史 先生
一般社団法人まるオフィス 代表理事 加藤 拓馬 先生（他 NPO 関係者数名）
市内各中学校の先生方

日 時：10月23（金） 5～7校時

内 容：10枚程度のスライドを作成し発表する。発表5分・質疑応答3分。



⑤ 台湾に関する講演会Ⅱ

ねらい：簡単な中国語について学び，言語を通して他国に興味を持つ。

講 師：南三陸町国際交流協会 理事 佐藤 金枝 氏（台湾出身の南三陸町在住者）

日 時：11月17日（火）6～7校時

内 容：台湾に関する講演，質疑，中国語講座（あいさつ・日常会話），交流先の高校へのメッセージカードの作成，中国語の歌の練習



⑥ フィールドワークⅡ・集中研究日

ねらい：課題研究のテーマに関連する施設の訪問や街頭での調査、大学の専門家による指導を受けることで、現在の研究内容をより高いものにする。また、集中的に研究活動を行い、1月の全体発表会に向けて研究内容を深める。

日時：12月12日（土）1～4校時

場所：フィールドワーク→宮城教育大学、市内民間企業、市内施設
集中研究 →気仙沼高等学校

内容：自身の研究に関わる市内施設等の視察や市内企業にインタビューに伺うことで、1月の全体発表会に向けて研究を深めた。また、アンケート調査の集計や文献調査を集中的に行うことで考察を深めた。

⑦全体発表会

ねらい：研究の成果を発表し議論することで、今後の研究に向けて課題を見つけるとともに、発表する態度や聞く姿勢について学ぶ。

日時：1月30日（土）

内容：ポスターセッションによる発表。38題の研究を①～③の3セッションに分け、各グループで発表5分、質疑2分で同じ内容を3回発表する。発表時間以外は、聴衆としてその時間の発表を自由に見て回り質問やアドバイスをする。あらかじめ時間を設定し、審査団がまわり審査をし、それをもとに優秀賞を選出する。

9：40 開会行事

10：00 第①セッション発表（35分間）

10：45 第②セッション発表（35分間）

11：30 第③セッション発表（35分間）

12：10 閉会行事・講評



<成績上位>

令和2年度課題研究I 成績上位者

ルーブリック表 (評価の観点と予想される行動例の点数)						評価		
観点	5	4	3	2	1	No.13	No.14	No.15
課題設定	世界に共通する課題や地域と世界を結びつけるテーマを課題とし、問題の背景を総合的な視点で捉え、論点が明確である。	世界に共通する課題や地域と世界を結びつけるテーマを課題とし、問題の背景を部分的にしか捉えていないが、論点が明確である。	グローバル社会と関連していないテーマを課題とし、問題の背景を総合的な視点で捉え、論点が明確である。	グローバル社会と関連していないテーマを課題とし、問題の背景を部分的にしか捉えていないが、論点が明確である。	グローバル社会との関連性のある無しに関わらず、問題の背景を調べておらず、論点が不明確である。	5	3	4
研究活動・実行	課題に対する研究手法が適切であり、事実に基づいた研究内容を記録している。外部指導者等の助言を受けながら、実行している。	課題に対する研究手法が適切であり、事実に基づいた研究内容を記録している。外部指導者等の助言を受けずに、実行している。	課題に対する研究手法が適切であるが、研究内容の記録に不備がある。外部指導者等の助言を受けながら、改善しようとしている。	課題に対する研究手法が適切ではないため、外部指導者等の助言を受けながら、改善しようとしている。	課題に対する研究手法が適切ではないため、外部指導者等の助言を受けて、早急な改善が求められる。	5	5	5
情報の処理	既存のデータのみならず、実験や調査等から得られたオリジナルのデータも適切に処理・加工して使っている。	既存のデータのみならず、実験や調査等から得られたオリジナルのデータを使っているが、処理・加工に不備が見られる。	他人が作成したデータを適切に選び、加工しているが、オリジナルのデータがない。	他人が作成したデータを加工しているが、適切なデータではない。適切なデータを選びなおす必要がある。	科学的なデータや情報が無いいため、データによる裏付けが早急に求められる。	5	5	5
情報収集	3種類以上の情報源から5つ以上の情報や資料を集め、引用部分と自分の意見を明確にわけて記載している。	1・2種類の情報源から5つ以上の情報や資料を集め、引用部分と自分の意見を明確にわけて記載している。	複数の情報源から2～4つの情報や資料を集め、引用部分と自分の意見が明確にわけて記載している。	複数の情報や資料を集めているが、引用部分と自分の意見が明確に分けて記載していない。	情報や資料を集めておらず、自分の意見しか記載していない。早急な改善が求められる。	5	5	5
論の構成	主張を裏付ける客観的で有効な根拠が2つ以上あり、反対意見も踏まえ反論できる材料をそろえ、とてもしっかりしている。	主張を裏付ける客観的で有効な根拠が2つ以上あり、自分の立場からの主張はしっかりしている。	主張を裏付ける客観的で有効な根拠が1つあり、自分の立場からの主張はしっかりしている。	主張を裏付ける根拠や証拠を挙げているが、客観性や信ぴょう性が低く有効とは言いがたい。客観性を高める必要がある。	文章の因果関係や論法に誤りがあり、主張や裏付ける根拠が不明確である。論の構成を一つ一つ改善する必要がある。	4	5	4
発表態度	発表では、原稿を見ずに声を通るように大きくはっきりと発言し、聞く人が理解できるようにテンポや強弱、身振りなどに工夫があり、効果的である。	発表では、原稿を見ずに声を通るように大きくはっきりと発言し、聞く人が理解できるようにテンポや強弱、身振りなどに工夫のあとがみられる。	発表では、原稿を見ながらではあるが聞く人が理解できるようにテンポや強弱、身振りなどに工夫のあとがみられる。	発表では、原稿を見ながら声小さく一部聞き取れない部分がある。テンポや強弱、振りなどに工夫が求められる。	言葉を失う、または声が小さいため発表の大半が聞き取れず、内容が理解できない。原稿のアウトラインを用意するなど改善が求められる。	5	5	5

(5) 全体的な総括

今年度はフィールドワークIや台湾研修の中止，外部発表会の形式の変更など，活動が制限されることが多い1年だった。しかし，そのような状況でも多くの生徒が外部の発表会に積極的に参加したり，外部指導者や地域の企業・人材と自主的に連絡を取り助言を受けたりするなど，工夫を凝らし意欲的に活動している姿が見られた。

毎年7月に実施していたフィールドワークIIでは，自身の研究分野に近い大学の研究室を訪問し，教授から研究テーマや計画について助言を受ける予定であったが，直接訪問することができなかったため，Zoom や Microsoft Teams を用いてオンラインで結び，助言を受けることができた。実際に研究に携わる大学の先生方から直接アドバイスをいただいたことで，研究への意欲が増し，研究計画を練り直して夏休み明けの研究活動に臨んでおり，良い刺激となったようである。

同様に外部発表会も例年とは異なる発表形式での実施が多く，口頭発表を録画して Web 上で公開するものが多かった。質疑応答がない分，聴衆へ自身の研究内容を効果的に伝えるにはどうしたらよいかを考えながら発表動画の撮影に臨んでいた。

10月の中間発表会や1月の全体発表会では外部のアドバイザーの方から直接助言をいただくとともに，同級生や下級生からの質問に答えることで，自身の研究に不足している点に気づき，課題研究IIに向けての改善点に気付くことができたようである。また，アドバイザーの先生方からは「質問がなかなか出ない」との意見をいただき，聴衆として相手の研究に関心を持ち，さらに批判的に物事を捉える力を伸ばすことが必要であると感じた。

12月に予定していた台湾研修については中止となったが，台湾出身の講師の方から台湾の伝統や文化について教えていただく機会を2回設け，日本だけでなく海外へ関心を持つことや海外との比較の視点を持つといった点でよい機会になったと考えている。今後は台湾の高校とのオンライン交流会を通して，実際に他国の同世代と交流し，英語を使ったコミュニケーション能力の育成なども行っていきたい。

最後に，この課題研究Iで行った研究を学校内だけで終わらせずに，地域のNPOや人材の力を借りて地域の方を対象にしたイベントの主催やマイプロジェクトアワードなどの発表会に積極的に参加し，自身の研究を深化・発展させようと自主的に行動している生徒が多くいる。地域の課題に関心を持ち，さらに広い視野から物事を捉え，課題解決に向けて自ら行動できる人材を育成していきたい。

1-3 学校設定科目「課題研究Ⅱ」における課題研究

(1) 目標

グローバル課題「海洋問題」に対して、2年生で研究を重ねた課題研究Ⅰを発展させ、科学的探究活動の習熟を目指し、文理融合をさせた研究を目指す。グローバルに思考するための批判的思考力・科学的思考力を磨くことで、総合的思考力・未来思考力にまで高め、同時に英語による海外発信を可能とするコミュニケーション力をさらに育成する。

(2) 対象学年

3年生創造類型37名

(3) 内容

木曜日6校時に課題研究Ⅱを配置し、総合的な学習の時間（木曜日7校時）を一部活用し、全28時間実施した（表3-1）。2年生までの研究をブラッシュアップするとともに、研究を融合することも視野に入れながら、前半は課題の洗い出しに力を入れた。また、夏休みを通して、自らの研究を外部のコンテストに応募することで、研究成果を広く伝え、外部からの評価を受けることを狙いとした。後半は、英語によるポスター作成と研究発表に向けて活動を行った。

年間を通して、国語・数学・英語・理科・社会・その他（今年度は情報）から各1名（計6名）の教員を配置し、研究やコンテスト応募の指導に当たり、英語ポスター作成や英語での発表については、英語科の教員9名で分担して指導に当たった。

表3-1 実施内容一覧

月	学習テーマ	学習内容	時数
6	ガイダンス 昨年の振り返り	課題研究Ⅱのねらいや流れについて知る。他者の論文を読み、分からない部分などを指摘し、課題を洗い出すとともに、他者との共同研究を検討する。	1
	今後の研究の進め方	自分の研究の核は何かを意識して、今後の研究の方向性や、応募するコンテストについて考える。	1
	研究γ ①コンテスト応募	研究の融合なども見据えながら、まだ残っている課題に取り組む。また、自分の研究内容とコンテストの趣旨が合致するコンテストを選び、応募に向けての準備を進める。	8
7			
8	②講演会Ⅰ	気仙沼高校 海外交流アドバイザー Daniel Ross 氏	1
9	研究内容の振り返り	英語ポスター作成のために、ここまでの研究内容をループリック表に基づいて振り返る。	1
	③講演会Ⅱ	東北大学大学院生命科学研究科准教授 酒井 聡樹 氏	1
	研究γ	研究をまとめ、英語によるポスター作成や発表練習を行う。随時、英語科教員から添削を受ける。	8
10	④最終発表会	英語ポスターによる発表会	3
			1
11	まとめ	最終発表会の振り返りをおこなうとともに、3年間の研究活動について振り返りをおこなうことで、自身の変容に気づき、今後につなげていく。	2
12			1

(4) 具体的内容

① コンテストへの応募

ねらい：研究成果をひろく発信し、外部の専門家に評価をしてもらうとともに、作品を作る過程で、自らの研究を振り返る。

方 法： 6月4日 ガイダンス時にコンテスト一覧を配布。

その後、要項が掲載され次第、情報を更新して、クラスに掲示する。

各生徒で応募するコンテストを選び、担当者が添削等を行い、応募する。

生徒が応募したコンテスト一覧

名称	主催	備考
高校生「ものづくり・ことづくり」プランコンテスト	静岡理科大学	
第8回 わたし遺産	三井住友信託銀行	
全国高校生・留学生作文コンクール	拓殖大学	
全国学芸サイエンスコンクール	旺文社	作文／小論文部門 高校生の部 入選
高校生論文コンテスト 2020	京都先端科学大学	
地域伝承文化に学ぶコンテスト	國學院大學 高校生新聞社	
36℃の言葉	日本福祉大学、朝日新聞社	
高校生地球環境論文賞	中央大学	
NRI 学生小論文コンテスト	野村総研	
田舎力甲子園	福知山公立大学	
高校生小論文コンクール 2020	生涯学習振興財団	
言の葉大賞	言の葉協会	
高校生小論文・スピーチコンテスト	多摩大学	スピーチ部門 最優秀賞
環境甲子園	NPO 法人 環境会議所東北	
全国中学高校 Web コンテスト	学校インターネット教育 推進協会	
SDGs－Web マルシェ	尚絅学院大学	高校生研究部門優秀賞 (生徒2名での共同研究)

総 括：(6) 全体的な総括を参照

② 講演会 I

ねらい：視覚的に伝わりやすい文字や写真の配置を学び、英語ポスター作成に活かす。

講 師：気仙沼高校 海外交流アドバイザー Daniel Ross 氏

総 括：1, 2年次のポスター発表の際に、ポスターのどこにどの内容を配置すると読みやすいかは学んでいたが、自分が強調させたい部分を目立たせる技法については、生徒にとって新しい学びとなったようである。特定の情報を意図的に強調するという技法は、ポスター作成において非常に役に立つものであった。

③ 講演会 II ※課題研究 I と共同開催

ねらい：最終発表会にむけて、問いの設定や研究内容のポスター表現方法といった、研究全体にわたるスキルを改めて学び、修正点等を見いだす。

講 師：東北大学大学院生命科学研究科准教授 酒井聡樹氏

※詳細は「1－2 課題研究 I (4) ③講演会 I」を参照

総 括：英語による最終発表会に向けて、研究を他者に発表する意義を確認することができ、英語ポスター作成に対する生徒の意欲も高まっているようであった。研究発表の意義やポスターのレイアウトなどに関して学ぶことができ、講演会 I の内容と併せて、どのようにポスターを作成するかを考える機会となった。

④ 最終発表会 ※課題研究 I と共同開催

ねらい：今までの研究を英語ポスターで発表し，生徒同士の議論やアドバイザーの先生方から助言をもらうことで，今後の研究に向けて課題を見つける。

日時：10月23日（金） 5～7校時

内容：3つのグループに分け，セッションごとに発表する。ポスターは基本的に全員英語で，言語は英語を基本とする。5分間で発表し，その後3分の質疑を設ける。

※詳細は「1－2 課題研究 I （4）④中間発表会」を参照

準備等：9月3日 研究内容振り返り（ワークシート）

9月以降 担当の英語教員で添削（授業で作成を進めたものを，その都度担当教員に持って行き，チェックしてもらう）

10月20日 英語ポスター提出（印刷）

11月 5日 発表会当日欠席だった生徒の発表。担当教員で評価。

総括：（6）全体的な総括を参照



（5）成績について

学校設定科目であることから，表3－2の観点により表3－3の配点で評価を行った。最終学年ということで，研究成果を発信することに力を入れるため，コンテストへの応募を15点分評価に加えた。評価はルーブリック表（表3－4）を用いて，担当者が行った。更に入賞した生徒は，上位で5点，中位で4点，入賞で3点の加点を行い，令和2年度は4名が加点に該当した。発表会や論文においては，内容面の評価を担当者6名で行い，英語表現に関する部分のみを英語科9名で行った。なお，新型コロナウイルス感染症の影響により6月から授業が始まったこともあり，当初予定していた英語論文の代替として，英語発表の際の原稿を評価対象とした。

結果は次のようになった。

	総合	観点 a	観点 b	観点 c
平均点	77.2	19.9	24.0	31.3
最高点	93	26	30	38
最低点	54	12	17	25
標準偏差	8.6	3.9	3.2	2.8

表3-2 課題研究Ⅱの評価年間計画

評価項目（観点）	具体的な活動
a 研究手法を身に付けて活用できている （①知識・技能）	<p>社会や地域が抱える諸課題から世界に目を向け、世界に共通する課題や地域と世界とを結びつけるテーマを自ら設定し、科学的に探究しようとする。</p> <p>先行研究について新聞や書籍、講演等から適切な情報を選びだし、大学教員や高校教員による指導を活用しながら、適切な方法で研究を行い、丁寧に記録する。研究内容を的確な方法でまとめる。</p>
b 批判的・科学的思考力を身に着けている （②思考・判断・表現）	<p>地域や社会の問題をグローバルな視点からとらえ、目的意識をもって研究活動を行うとともに、論理的・総合的に考察し、科学的に判断している。さらに、これらの一連の過程を的確に効果的な方法で相手に伝え、未解決な課題を明確化しながら発表し議論している。</p> <p>また、文理融合や他の研究内容との関連性を意識しながら、多方面から課題の解決に取り組もうとしている。</p>
c コミュニケーション力を身に着けている （③主体的に学習に取り組む態度）	<p>口頭発表やポスターセッションの特徴を理解し、英語により発表を行い、質疑に対しても適切に対応する。また聞き手として、種々の疑問に対して自ら発問し、議論していく積極的な姿勢を養う。各種コンテストや校外の発表会に参加し、外部に発信する機会を自ら獲得している。</p>

表3-3 課題研究Ⅱの評価年間計画

月	項目	a	b	c	小計
6月	振り返り		2	3	5
	今後の研究に向けて		2	3	5
夏休み	コンクール応募	5	5	5	15
8月	講演会		2	3	5
9月	講演会（プレゼン）		2	3	5
10月	形成的評価	10	10	15	35
	学年発表会		3	2	5
	論文	10	5	5	20
	ファイル・ノート	5			5
加点	校外発表会			(5)	
	コンクール入賞		(5)		
		30	31	39	100

※「論文」の評価は、英語発表に向けて準備した原稿で代替した。

表3-4 コンテストのルーブリック表

観点	5	4	3	1
a コンテストのねらいを理解し、適切な方法で作成している	コンテストの趣旨を理解した内容やまとめ方であり、指導を受けながらさらに良いものになった。		コンテストの趣旨を理解した内容になっているが、まとめ方などにまだ改善の余地がある。	コンテストの趣旨とあっていない内容になっており、改善が求められる。
b 批判的・科学的思考力を身に付けている	自らの研究内容と結び付けながら、複数の視点からの考察があり、論理的・総合的である。	自らの研究内容との結び付きは薄い、複数の視点からの考察があり、論理的・総合的である。	問題や課題の一部分だけを扱ったものになっており、複数の視点からの考察が今後必要である。	主張を裏付ける根拠が不適切であったり、信ぴょう性が低かったりするため、主張が弱く一貫性に欠ける。
c コミュニケーション力を身に付けている	主語と述語の関係が明確であり、一文の長さも適切である。言葉を吟味し伝わりやすくするなど工夫がみられる。		主語と述語の関係が明確であり、一文の長さも適切である。	主語と述語の関係が不明確であったり、一文が長くなったりしているため、伝わりにくい文章になっている。

(6) 全体的な総括

別紙3-1のアンケート調査を行った結果が別紙3-2である。

まず、課題研究Ⅱに該当する部分を分析すると、「英語ポスター・原稿作成」「最終発表会」を挙げている生徒が多い。自分の研究内容を英語でポスターにまとめ、英語で発表するということは生徒にとっても高いハードルであったが、発表会に向けて成し遂げることができたことが、有意義だと答えた割合の高さにつながっていると考える。記述形式の振り返りにおいては、「自分の伝えたいことを英語で表現するために試行錯誤できた」「自分の英語が伝わったときに達成感があった」と答える生徒もいた。

Q1の授業内のイベントでは、1・2年生でのフィールドワークを挙げており、市役所や市内の企業への訪問や、大学の専門家への訪問が有意義だったと答えている。また、2年次に実施した他校との交流会も10名が有意義だったと答えている。各学年において、定期的に行われた中間発表会や最終発表会が有意義だったと答えた生徒の割合も高く、研究を他の人に伝えるための論理立てやポスターデザインとその構成、原稿作りのための言葉の精選に多く力を注いだと分析する。

Q2の校内のイベントでは、地域のNPOを主催しているフィールドワークアドバイザーの方との相談会を積極的に有効活用したことがうかがえる。フィールドワークアドバイザーに研究について相談したり、研究内容に関わるイベントの実施について相談したりする姿が見られた。また、2年次9月から12月に放課後を活用して全6回で実施した、英会話の練習をするスピーキングラボも、参加した18名中11名が有意義だと回答した。

Q3の校外のイベントでは、外部での発表会への参加は有意義であったと答えた生徒の割合が非常に高くなった。自ら希望し参加した外部発表会では大きな収穫があったと答える生徒が多かった。外部の発表会に参加し、異なる地域で研究発表をして意見をもらうことや、他校の生徒の発表を見ることで、自分の研究の方向性を考え、研究のモチベーションを高めることにつながったと考えられる。台湾研修やコココーラ研修会では基本的に英語のみを使用し、研究発表や交流をしたことが印象深いものとなったようだ。

また、Q4から課題研究を行うことで地域や世界に目を向ける機会が増えたため、「地域や世界への興味関心が増した」と答える生徒が多かった。また、前年度と比較して、行動力があったと答える生徒の割合が高かった。外部の発表会に多くの生徒が参加できるように調整したことや、自分たちでイベントを企画する機会が多かったことが影響していると考えられる。

別紙3-3①に挙げる研究の振り返り（記述）を見ると、生徒たちはさまざまな面での成長を実感することができていることが分かる。特に、「地域の課題を知り、貢献したいと思うようになった」「複数の情報源から調べることや、自分の意見を持つことが習慣になった」といった成長は、課題研究Ⅱの目標と合致する部分だと言える。また、大変だったこととして挙げている内容も、「もっとこうしていればよかった、こういう力が必要だった」という前向きなものが多い。

別紙3-3②に挙げるグローバルリテラシーの自己評価において、他の類型より全項目で高い数値となった。特に言語的コミュニケーション力・情報活用力の項目では顕著な数値となっている。課題研究を通して、さまざまな情報源から情報を集めて判断する機会や、発表会などで自分の考えを他者に伝える機会が多かったことが要因であると考えられる。また、昨年度の創造類型の生徒と比較しても、ほぼすべての項目で平均値が上昇している。それに加え、多くの項目で、昨年度卒業生における「創造-創造以外」の差よりも今年度の「創造-創造以外」の差が小さくなっていることから、今年度卒業生については、1年次の地域社会研究や2年次の総合的な学習での課題研究などで、創造類型以外の生徒にもグローバルリテラシーを涵養することができたと考えられる。

今年度で、学校として「課題研究Ⅱ」の実施は3回目になったが、3年分のアンケート結果を比較すると、その結果には同様の傾向があることが分かった。地域課題の理解や専門家からの意見をもらえるフィールドワーク、自身の研究内容の整理や発信の場となるポスター作成・論文作成・発表会、主体的な行動の場となる外部発表会への参加やイベントの企画・実施は有意義だったと答える割合が高い。特に、平成30年度の後半から定期的に行っているフィールドワークアドバイザー相談会は、生徒が研究内容の相談をする中で、市内でのイベントの企画や実施につながる事が多く、生徒にとって主体的に行動する貴重な機会となっている。その一方で、講演会や研究手法を学ぶ授業は、有意義だと答える割合が低い傾向にある。講演会の内容などが、自身の研究にどう活かされるのかが分からない生徒が多いことが原因である可能性があるため、講演会の時期や事前準備を工夫することや、講演会以降の研究の際にも講演会の内容を参照できる機会を増やすことで、より有意義だと感じられるようになると考えられる。また、研究内容に関して論理性が足りないものもあったため、基本的な読解力を養成するような工夫も必要になると考える。

1年次に地域社会研究でグループ研究、2年次に課題研究Ⅰで個人研究、3年次には課題研究Ⅱで研究を進めつつ、必要に応じて共同研究をするという流れで3年間実施した。今年度は、例年よりも3年次に共同研究をする割合が多く、共同研究7題（17名）個人研究20題となった。共同研究をしたことで新たな視点を得られたという意見もあったので、今後も共同研究を推奨したり、個人研究でも他者との意見交換の機会を増やしたりといった工夫をしていく必要があると考える。進路を考えるきっかけになることや、入試でアピールするポイントになるといったメリットはもちろんであるが、生徒が思考力・表現力などさまざまな成長を実感できるという点は、課題研究の重要性を特に示していると言える。

課題研究Ⅱ 事後アンケート

3年間お疲れさまでした。3年間を振り返り、マークしてください。なお、課題研究活動についてののみ考えてください。

各設問は複数回答可です

3	4
0	0
0	0
1	1
2	2
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
6	6
7	7
8	8
9	9

- Q1 研究を進める上で、有意義だった授業内のイベントを選んでください
- 地域理解講座(1年生5月 5領域に関する講演)
 - テクニカル講座(1年生6月 文章の書き方・情報の調べ方・図書館の活用)
 - 震災・防災講演会(1年生6月 防災主任 長根先生)
 - 課題図書レポート(1年生夏休み)
 - フィールドワークⅠ(1年生10月 市内各企業・事業所)
 - 中間発表会(1年生11月 スラバゴによる発表)
 - フィールドワークⅡ(1年生12月 大学・市内・国際理解セミナー・女川等)
 - 学年発表会(1年生1月 アドバイザー来校)
 - 日本語ポスター・論文作成(1年生)
 - 総合学習発表会(1年生3月 代表がステージ発表)
 - 研究基礎を学ぶ(2年生4~5月 思考ツール・数字に疑問を持つ)
 - フィールドワークⅠ(2年生5月 森は海の恋人)
 - 早稲田大学高等学院との交流会(2年生5月)
 - 講演会Ⅰ(2年生7月 東北大学酒井先生「これから研究を始める高校生へ」)
 - フィールドワークⅡ(2年生7月 県内大学)
 - 講演会Ⅱ(2年生9月 東北大学酒井先生「研究のまとめ方とプレゼンテーション」)
 - 中間発表会(2年生10月 分野内で口頭発表、全体でポスター発表 アドバイザー来校)
 - フィールドワークⅢ(2年生12月 県内大学・市内調査・国際理解セミナー・PWアドバイザー相談)
 - 講演会Ⅲ(2年生11月 菅原綺花氏「台湾の文化について」)
 - 学年発表会(2年生1月 ポスター発表 アドバイザー来校)
 - 日本語ポスター・論文作成(2年生)
 - 各種コンテストへ向けた準備(3年生)
 - 講演会(3年生8月 ロス先生「ポスターの作成技法」)
 - 講演会(3年生9月 東北大学酒井先生「効果的な発表について」)
 - 英語ポスター・原稿作成(3年生)
 - 最終発表会(3年生10月 英語によるポスター発表)
 - その他()
- Q2 研究を進める上で、有意義だった校内のイベントを選んでください
- フィールドワークアドバイザーとの相談(随時)
 - CS講座(随時)
 - スカイブセッション
 - 英語スピーチコンテスト(1,2年生10月)
 - スピーキングラボ(2年生9~12月 ロス先生 全6回)
 - その他()
- Q3 研究を進める上で、有意義だった校外のイベントを選んでください
- コカ・コーラ講演会(1年生9月)
 - 仙台三高GSフェスタ(1,2年生11月)／古川黎明研究発表会(2年生11月)
 - 全国海洋教育サミット(1年生2月 東京大学)
 - 東北SGH課題研究発表会(1年生3月 東北大学)
 - APU研修(1年生3月 大分県 立命館アジア太平洋大学)
 - 海洋教育子どもサミットin洋野(2年生11月)
 - 全国SGHフォーラム(2年生12月 東京国際フォーラム)
 - 台湾研修(2年生12月)
 - 子ども未来博(2年生12月)／ダメだっちや温暖化(2年生1月)
 - 自分たちで企画したイベントの実施(随時)
 - 気仙沼マイプロジェクトアワード
 - その他()
- Q4 研究活動を3年間行って、良かった点や効果があったと思うのは、次のうちどれですか
- 地域への興味関心が増した 行動力がついた
 - 社会や世界への興味関心が増した 学校が楽しくなった
 - 知識を融合させる力がついた 英語の力がついた
 - 教科の授業が楽しくなった 大学等の入試に有効であった
 - 進路先決定に良い影響を及ぼした その他()

別紙 3-2 別紙 3-1 の事後アンケートの結果 (回答数 37 回答率 100%)

Q1 研究を進める上で、有意義だった授業内のイベントを選んでください

地域理解講座 (1年5月)	5人	14%	フィールドワークⅡ (2年7月)	20人	54%
テクニカル講座 (1年6月)	6人	16%	講演会Ⅱ (2年9月)	6人	16%
震災・防災講演会 (1年6月)	3人	8%	中間発表会 (2年10月)	10人	27%
課題図書レポート (1年夏休み)	2人	5%	フィールドワークⅢ (2年12月)	15人	41%
フィールドワークⅠ (1年10月)	11人	30%	講演会Ⅲ (2年11月)	5人	14%
中間発表会 (1年11月)	7人	19%	学年発表会 (2年1月)	15人	41%
フィールドワークⅡ (1年12月)	10人	27%	日本語ポスター・論文作成 (2年)	11人	30%
学年発表会 (1年1月)	7人	19%	各種コンテストへ向けた準備 (3年)	2人	5%
日本語ポスター・論文作成 (1年)	6人	16%	講演会 (3年8月)	7人	19%
総合学習発表会 (1年3月)	3人	8%	講演会 (3年9月)	5人	14%
研究基礎を学ぶ (2年4~5月)	2人	5%	英語ポスター・原稿作成 (3年)	15人	41%
フィールドワークⅠ (2年5月)	11人	30%	最終発表会 (3年10月)	11人	30%
早大高等学院との交流会 (2年5月)	10人	27%	その他 ()	0人	0%
講演会Ⅰ (2年7月)	7人	19%			

Q2 研究を進める上で、有意義だった校内のイベントを選んでください

FWアドバイザーとの相談 (随時)	20人	54%	英語スピーチコンテスト (1, 2年生10月)	6人	16%
CS講座 (随時)	4人	11%	スピーキングラボ (2年生9~12月)	11人	61%
スカイプセッション	2人	100%	その他 ()	2人	5%

※スカイプセッションとスピーキングラボは、参加人数を分母として割合を計算している。

Q3 研究を進める上で、有意義だった校外のイベントを選んでください

コカ・コーラ講演会 (1年生9月)	10人	83%	全国SGHフォーラム (2年生12月)	3人	75%
仙台三高GSフェスタ (1, 2年生11月) / 古川黎明研究発表会 (2年生11月)	10人	100%	台湾研修 (2年生12月)	25人	68%
全国海洋教育サミット (1年生2月)	2人	100%	こども未来博 (2年生12月) / ダメだっちゃ温暖化 (2年生1月)	3人	75%
東北SGH課題研究発表会 (1年生3月)	2人	100%	自分たちで企画したイベント (随時)	7人	41%
APU研修 (1年生3月)	1人	50%	気仙沼マイプロジェクトアワード	5人	63%
海洋教育こどもサミットin洋野 (2年生11月)	2人	100%	その他 ()	2人	5%

※各種発表会は、参加人数を分母として割合を計算している。「その他」では、「海外留学」「ボランティア」が挙げられた。

Q4 研究活動を3年間行って、良かった点や効果があったと思うのは、次のうちどれですか

地域への興味関心が増した	15人	41%	行動力がついた	21人	57%
社会や世界への興味関心が増した	24人	65%	学校が楽しくなった	2人	5%
知識を融合させる力がついた	13人	35%	英語の力がついた	7人	19%
教科の授業が楽しくなった	1人	3%	大学等の入試に有効であった	13人	35%
進路先決定に良い影響を及ぼした	9人	24%	その他 ()	4人	11%

※「その他」では、「自律した行動ができるようになった」「研究のノウハウが少し分かった」「疑問や課題意識を持って情報収集できるようになった」「レジ袋を使わないようになった (海洋プラスチックを研究した生徒)」が挙げられた。

別紙 3-3① 研究の振り返り（記述）での質問項目と回答内容

質問 1 3年間の課題研究活動をしてみて得られた力（伸びた能力）、また3年間課題研究に取り組んでよかったと思うことを書いてください。

プレゼン力がついた／興味を持ってニュースなどを見れるようになった／他者と協働する中で新たな視点が得られた／他者の発表を聞いて、社会問題を知れた／地域の課題やよさに気づけた／英語が伝わったときの喜び／疑問を持ったことを調べる習慣／複数の情報源から調べることや、自分の意見を持つことが習慣になった／他校や台湾に知り合いができて、つながりが広がった／台湾研修などで日本を他国と比較して見ることで様々な課題が見えた／台湾研修やSGHフォーラムを通して英語学習のモチベーションが上がった／難しいことに進んで挑戦できるようになった／課題発見力・解決力と思考力を深めることができた／3年間の研究を成し遂げた時の達成感／1つのことを数年に渡って続けるという経験は進学先や職場で生きる／自分で調査をしたりイベントを企画したりすることで自信がついた／高校生活で頑張ったこととして人に言える／資料作成力が身についた／必要な情報とそうでない情報を見分ける力がついた／自分の住んでいる地域についてより知ることができ、貢献したいと思えた／集めた情報から新しい考えを出す発想力が身についた／初対面の人と話す機会が増え、コミュニケーション力が向上した／自分よりも知識のある外部の方と話せたこと／1つの課題を様々な側面から考察する重要さを高校生のうちに学べたこと／課題発見力・解決力やグローバルな視点を得られたとは思わないが、大学での研究に生きる失敗を経験することができた。これからがスタートである／論文をたくさん読むことで読解力がついた／疑問に思ったことを積極的に質問できるようになった／デリケートな問題を扱ったため、自分の発言や文章に責任を持つようになった

質問 2 3年間の課題研究活動をしてみて大変だったと思うことを書いてください。

アンケート作成が難しい／研究内容と進路の関連／どうすれば研究内容が深められるのかがあまりわからなかった／部活との両立／企業と協力してみたかったがやり方がわからず難しかった／グループで協働すること／英語で発表することはできても、質疑応答がスムーズにできない／論理的かつ客観的に考えること／スケジュール管理／テストや行事とかぶると、どちらも中途半端になってしまった／3年になってからより興味のあるテーマを思いついてしまった／調査結果が自分の予想と違ったとき／発表で普段使わない英単語を使ったり、原稿を見ずに話すこと／休日にパソコン室が開いていなかった／結果に至る過程の説得力を追求する「研究」の側面と、結果を実際に実行することを考えた時の現実味を追求する「一企画」としての側面を両立させること／自分の考えを言葉にすること／誰が読んでわかる文章を書くこと／実験が行えず、後悔が残った

別紙 3-3② グローバルリテラシー自己評価

表 グローバルリテラシー3年生の結果

		知識 技能	学ぶ 方法	批・科 思考力	総・未 思考力	語学力	言語 コミュニカ	情報 活用力	多様性	協働性	行動力	健康 体力	豊かな 人間性
全体	平均	2.9	2.92	3.09	2.76	2.4	2.72	2.75	2.75	3.03	3.01	3.09	2.97
創造以外	平均	2.88	2.9	3.05	2.7	2.35	2.64	2.66	2.7	2.98	2.97	3.06	2.92
創造の先輩	3年次平均	2.86	3.06	3.06	2.81	2.67	2.78	2.75	2.81	2.94	2.97	2.94	2.81
創造	3年次平均	3	3.06	3.32	3.06	2.68	3.15	3.21	3.03	3.32	3.24	3.24	3.24
	2年次平均	2.32	2.41	3.03	2.84	2.57	2.7	2.81	2.69	2.94	2.68	3.03	2.89
	創造-創造以外	0.12	0.16	0.27	0.36	0.33	0.51	0.55	0.33	0.34	0.27	0.18	0.32
	3年次-2年次	0.68	0.65	0.29	0.22	0.11	0.45	0.4	0.34	0.38	0.56	0.21	0.35
	先輩との比較	0.14	0	0.26	0.25	0.01	0.37	0.46	0.22	0.38	0.27	0.3	0.43
昨年度卒業生	創造-創造以外	0.45	0.61	0.52	0.57	0.61	0.48	0.41	0.6	0.49	0.53	0.56	0.57

授業改善

2 授業改善

2-1 主体的・対話的で深い学びを目指す授業改善

主体的・対話的で深い学びを目指した取り組みを行っている中で、英語科のパフォーマンステスト、数学科の課題研究、地歴・公民科のアクティビティを紹介する。

(1) パフォーマンステスト（英語科）

定期考査のようなペーパー試験だけでなく、4技能をバランスよく育成することを目指し、生徒の英語の技能を実演する形式のパフォーマンステストを実施している。パフォーマンステストでは、主に「話す」力を図るスピーキングテストと「書く」力を図るライティングテストを行っている。具体的には、教科書で読み込んだ単元の内容をキーワードとイラストだけを見て英語で話したり書いたりするリテリングのテストや、読解した内容に関する英問英答、内容に関するテーマを設定した Show & Tell などを行っている。評価方法は、iPad で生徒のパフォーマンスを動画で撮影し、事前に生徒に示したルーブリックに基づいて評価を行っている。ルーブリックでは、英文法の正確さに加え、分かりやすく伝えようとする姿勢や話し方、表現の工夫などを総合的に評価している。以下は、ピクトグラムに関する単元を扱った際に行ったパフォーマンステストの原稿と評価基準である。

図1：生徒が作成したプレゼンテーション原稿

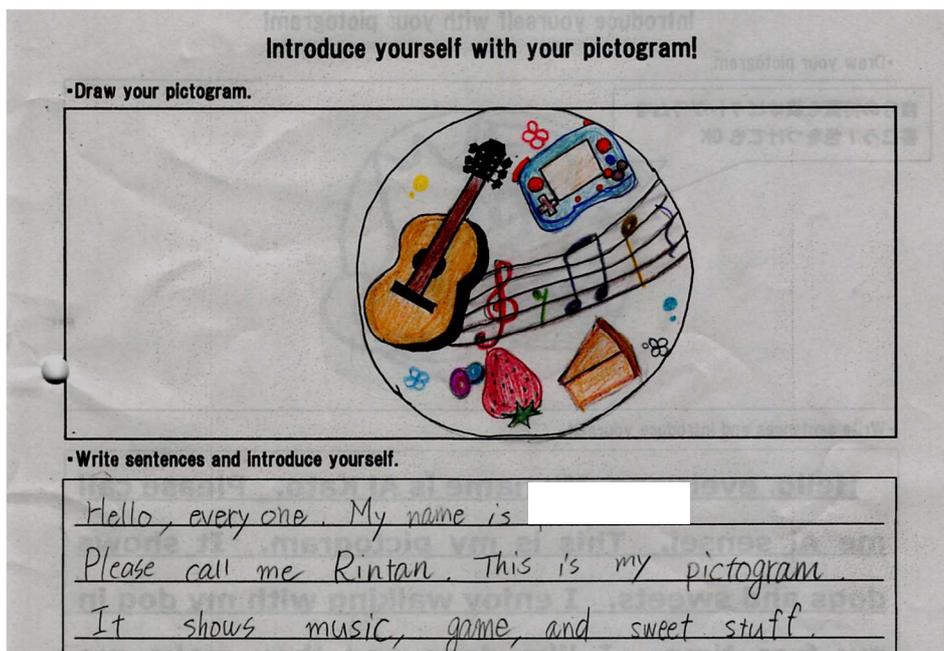


図2：パフォーマンステスト(ライティング)の評価基準

	A	B	C
【知識・技能】 (2点)	自己紹介文のスペル、文法、表現のミスが3ヶ所以内である。 [2点]	自己紹介文のスペル、文法、表現のミスが5ヶ所以内である。[1点]	自己紹介文のスペル、文法、表現のミスが6ヶ所以上ある。[0点]
【思考・判断・表現】 (3点)	自分を紹介する話題が2つ以上あり、それぞれ補足をつけて書くことができる。 [3点]	自分を紹介する話題が2つ以上あるが、補足が書けていない箇所がある。 [2点]	自分を紹介する話題が1つしか書けていない。 [1点]
【主体的に学習に取り組む態度】 (10点)	自己紹介を60語以上で書くことができる。 [10点]	自己紹介を40語以上で書くことができる。 [7点]	自己紹介を30語以上で書くことができる。[5点]
※29語以下の場合は0点とする。			

10月には1年生対象の英語コンテストを実施し、スピーキング能力、及びプレゼンテーション能力の向上を図っている。今年度は、「私が紹介したい気仙沼」というテーマで行った。実際にコンテストに出場するのは各クラスの代表6名だが、事前に海外交流アドバイザーを利用した指導を1学年の全生徒対象に行い、アイデアの引き出し方や聞き手を引きつける構成の仕方など、プレゼンテーションの基礎を学ぶ機会を出場する生徒以外にも設けた。コンテストに出場する生徒は立候補制で募り、生徒の自主性を尊重している。参加者は事前に提示された評価基準をもとに練習を重ねた上で本番に挑む。参加者以外の生徒にとっても、同級生の質の高い発表に触れることがよい刺激となり、英語学習に対する意欲向上や目標設定につながっている。

評価は、声の大きさ、発音や流暢さ、視線、発表態度、内容の5つの観点で行う。審査員は、英語科教員、海外交流アドバイザー、ALTが行い、発表を聞いている生徒もアプリを利用した投票によって評価に参加し、最優秀賞と審査員特別賞を選出する。普段の授業で行っているパフォーマンステストにおいても同様であるが、評価基準は評価者にとっても評価される生徒にとっても分かりやすいものであることを意識し、主観に頼らない評価の公平性や、具体的にどのようなことができればいいのかという目標設定や振り返りをしやすくするという点に留意している。

(2) 課題研究 (数学科)

数学科では、思考力養成のため、普通の数学の問題とは趣向を変えた問題を「課題研究」と題して課している。以下に、課題研究の問題の1例を示す。

課題

バレーボール部員であるあなたがバックアタックの練習をします。コート後方より助走して踏み込み、アタックライン上から相手コートの端(エンドライン)に向かって真っすぐスパイクを打つとき、垂直方向に何cmのジャンプが必要か。

《条件》

身長：あなたの身長 スパイクの打点：身長+ (身長の半分) ネットの高さ：男子 2 m40 cm 女子 2 m20 cm

コートについて：ネットからエンドラインまで 9 m, ネットからアタックラインまで 3 m

- ①あなたの予測を書きなさい。
- ②ネットより 10 cm 上から相手コートのエンドラインに向かって真っすぐスパイクが打ち込まれるとき、コートに打ちこまれるボールの角度は何度になるか求めなさい。なお、ネットの高さはプリント表面の《条件》のとおりである。また、教科書の巻末にある「三角関数の表」を用いること。
- ③ ②の結果を用いて、《条件》をもとに、ジャンプの高さを求めなさい。
- ④ ③の結果を受けて、気付いたこと・思ったことを書きなさい。

評価は、基準を示し、5点、4点、3点の3段階で行っている。数学で学習した内容を身近な場面を例として計算することで、学習した知識の理解を深め、数学の抽象的な概念や内容の意味を実感することが期待される。課題研究に取り組む生徒達は、級友と話し合いながら考えている様子も見られ、活動的な学びが実現されていると感じる。

(3) アクティビティ (地歴・公民科)

地歴・公民科ではアクティビティと題し、スピーチやグループワークなど、授業中の活動的な学習に対する取り組みや成果を評価する課題を実施している。ここでは、日本史の授業例を紹介する。

○通常授業で実施している活動

活動例 1 教員が課題を設定した探究学習

- ①教員が設定した課題を班ごとに調べて、その内容を他者に説明して互いに学び合う。
- ②生徒同士で協力して学び合ったことを踏まえて、単元を通観する問いを考察する。
- ③考察したことを 200 字程度の文章にまとめる。

活動例 2 生徒が課題を設定する学習

- ①授業内容を踏まえて、調べたいこと、興味・関心をもったことの中から探究課題を設定する。
- ②プレゼンテーションソフトを使って資料作成する。
- ③調べたこと、考察したことを他者に説明する。

※6 分間×3 回。各回、最大 4 名の人とプレゼンをする。

※資料の出来栄え、内容の深さ・面白さ、説明はわかりやすいかの 3 観点を生徒同士で評価。

○長期休暇等で実施している活動

活動例 3 日本史に関する書籍を読み、内容要約と考察

- ①日本史の「人物」「出来事」「その他」「地域史」よりテーマを 1 つ選ぶ。
- ②学校の図書館から選択したテーマに関する本を借りる。
- ③内容要約 (800 字程度) と考え (1000 字程度) をまとめる。

考える、話す、聞く、書くという活動を繰り返すことで、生徒が様々な視点で歴史について考察するようになった。教員から教えてもらったり、解説してもらったりすることが勉強であると多くの生徒は思っている。しかし、「なぜ？」という疑問をもち、それを解決するために自分で調べて考察する過程こそが勉強であることに、この学習を通して気づかせることができたことが何よりの成果だと思う。

2-2 スモールステップ表の活用

スモールステップ表とは、教科や活動ごとに「目標となる資質・能力」を具体化し、学年ごとに指導観点及び評価規準を明確にしたものである。一昨年度は、本校生の実態に合ったスモールステップ表となるよう、各教科で特に力を入れて指導にあたる指導観点・評価規準の見直し、研究授業の指導案には「単元目標」や「本時の目標」とスモールステップ表の指導観点・評価規準の関わりを明記することとした。

スモールステップ表を有効に活用するため、指導案にはスモールステップ表に基づいた評価規準を記載することで、その授業で育成する資質・能力を明確にした。また、スモールステップの達成状況を定期考査・小テスト・パフォーマンステストなどの結果から教科毎に年 2 回 (10 月・2 月) 評価し、達成状況が不十分だった部分については指導方法等を見直した。また、スモールステップ表を教科実践に活かせるように内容の見直しを行ったが、「単元の指導構想」が定着するにつれ、育成したいグローバルリテラシーと教科目標が統一的に目指せるスモールステップ表が必要となってくるということが挙げられた。

これまでの反省を受け、令和元年度はスモールステップ表を用いて各教科について、全学年での評価を行った。また、各教科で単元の指導構想について検討することで、スモールステップ表のブラッシュアップを目指すこととした。SGH 事業指定解除以降、評価規準として効果的にスモールステップ表を活用できるものにするとともに、カリキュラムマネジメントに活かして教科間連携や課題研究に活用することを目標に取り組んだ。

2-3 授業改善の体制づくり・教員研修

(1) 「授業力向上プログラム」の実施について

今年度は、「教員専門性開発アプローチ」の充実に向けて、前年度までの「単元の指導構想」、「スモールステップ表の目標に向けた指導」を継続しつつ、教員一人ひとりの授業力の向上を図るための実践研究を展開し、本校生の「確かな学力」の向上を目指し、2つのコースを設定した。

A SGH実践チャレンジコース

各教科から、採用から7年目以上の経験の長い先生方に研究授業に取り組んでもらうこととした。生徒が主体的で探究的な学びに向かうにはどのような取り組みが必要か、各教科で検討することができた。

*授業実践

- ①令和2年10月26日(月) 3校時 国語総合 授業者：丸森翠 教諭
単元名「漢詩の表現に慣れ、漢詩を味わおう」
- ②令和2年10月30日(金) 2校時 数学I 授業者：大沼桂 教諭
単元名「データの分析」
- ③令和2年12月9日(水) 5校時 コミュニケーション英語I 授業者：加藤亜衣 教諭
単元名「Lesson5 Food Bank」
- ④令和2年12月22日(火) 6校時 国語総合 授業者：丸森翠 教諭
単元名「自分たちの考えを伝えるプレゼンテーションを行おう」
- ⑤令和3年1月27日(水) 5校時 数学I 授業者：菅原和幸 教諭
単元名「図形と計量」

B 開かれた授業実践コース

主に採用1～6年目の経年研修に該当する教員中心に、授業力向上のための研究授業を行い、授業者のみならず教科全体で授業力の向上を図ることができた。

*初任者研修関連

- ①令和2年7月28日(火) 2校時 コミュニケーション英語III 授業者：阿部成子 教諭
単元名「Lesson4 Recycling Hotel Soap to Save Lives」
- ②令和2年7月29日(水) 5校時 数学A 授業者：菊池友也 教諭
単元名「場合の数と確率」
- ③令和2年8月24日(月) 2校時 現代文B 授業者：村上瑠 教諭
単元名「評論を読み、多角的な視点を養おう」
- ④令和2年10月12日(月) 2校時 コミュニケーション英語II 授業者：阿部成子 教諭
単元名「Lesson7 What Is College For?」
- ⑤令和2年10月22日(木) 4校時 数学A 授業者：菊池友也 教諭
単元名「整数の性質」
- ⑥令和2年12月22日(火) 6校時 古典B 授業者：村上瑠 教諭
単元名「思想に関する漢文を読み味わい、自らの考えを深めよう」

*初任者研修(2年目)関連

- ①令和2年10月20日(火) 2校時 地理A 授業者：最上龍之介 教諭
単元名「さまざまな気候帯の人々の暮らし」
- ②令和2年10月30日(金) 1校時 地学基礎 授業者：久野直毅 教諭
単元名「地層の形成」
- ③令和2年11月4日(水) 5校時 数学II 授業者：小野寺将 教諭
単元名「軌跡と領域」

- ④令和3年1月22日(金) 1校時 地学基礎 授業者:久野直毅 教諭
单元名「地球の熱収支」
- ⑤令和3年1月22日(金) 6校時 世界史A 授業者:最上龍之介 教諭
单元名「革命の時代の到来」
- ⑥令和3年2月3日(水) 5校時 数学Ⅱ 授業者:小野寺将 教諭
单元名「数列とその和」

＊5年経験者研修

- ①令和2年10月1日(木) 1校時 コミュニケーション英語Ⅲ 授業者:小野寺潤 教諭
单元「Lesson7 What Is College For?」
- ②令和2年10月6日(火) 6校時 化学 授業者:高橋唯 教諭
单元名「芳香族化合物」
- ③令和2年10月30日(木) 5校時 日本史B 授業者:芳賀雅子 教諭
单元名「江戸時代の経済・社会史」

＊その他(指導力向上や新学習指導要領に向けた自発的な研究授業実践)

- ①令和2年8月31日(月) 3校時 古典B 授業者:山田尚子 教諭
单元名「思想一人の性一」
- ②令和2年9月1日(火) 4校時 体育 授業者:白幡優樹 教諭
单元名「器械運動(マット運動)」

(2) 教員研修

- ①「SGH 事業についての職員研修」 講師:鈴木悠生 教諭
日時:令和2年5月26日(火) 13:00~14:00
目的:残り1年の円滑なSGH事業の運営に向けて,これまでの経緯とこれからの課題について全職員が共通理解をもつ
講師:研究企画部 鈴木悠生 教諭
内容:SGHの理念,本校の目指す学校の姿,本校が推進するプログラムについて確認する場となった。また,これまでの取り組みを紹介しながら確認を行ったので,新しく転任してきた教員も,これまでのSGH事業の経緯とこれからの課題について共通理解を持つことができた。さらに,SGHの指定解除後の本校の探究学習の在り方についても全教員で考えることができた。
- ②課題研究指導のための研修会「効果的な指導のあり方について」
日時:令和2年9月8日(火) 本校会議室 16:10~17:00
講師:東北大学大学院生命科学研究科准教授 酒井聡樹 氏
目的:本校職員の課題研究指導力向上の機会を設ける
内容:研究の意義や方法,テーマ設定のポイント,効果的なまとめ方,論文作成についてのポイントについて,特に高校生の段階で気をつけるべきことに特化した講演。
- ③授業改善研修会
日時:令和2年10月1日(木) 15:00~17:00
講師:國學院大學人間開発学部初等教育学科教授 田村学 氏
目的:新学習指導要領の考え方を理解し,今後の授業改善に生かし,本校職員の授業力向上の機会を設ける
内容:新学習指導要領の理念,主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善,総合的な探究の時間における探究のプロセスについての講演。

④ICT 機器利用講習会

日時：令和2年11月24日（火）本校 E 教室 13:00～14:00

講師：本校職員 鮎貝宗房 教諭・高橋唯 教諭・最上龍之介 教諭・久野直毅 教諭
山本泰介 実習助手

目的：本校職員の ICT 機器利用技能の向上の機会を設ける

内容：電子黒板等の ICT 機器の使用上の注意や授業での使用例，G Suite for Education の活用方法について教員間で研修を行った。特に，授業での活用例については，具体的な活用方法を，ICT 機器を利用して，模擬授業形式で研修を行うことができ，日々の授業実践につながる内容であった。

⑤ルーブリック評価研修会

日時：令和3年1月26日（火） 16:10～17:00

講師：研究企画部 揚野耕平 教諭・高橋智子 教諭

目的：1 学年「地域社会研究」・2 学年創造類型「課題研究 I」の全体発表会に向けて，評価に活用するルーブリック表の共通理解を図る

内容：当日の評価者となる教員中心に研修会を開催した。昨年度までのポスターと，発表の実際の記録映像を用いて，ルーブリック表に従うとどういう評価になるか，一つ一つ基準を確認しながら検討していった。評価が分かれやすいポイントが職員間で明確になり，研修会后に再度検証した結果を職員間で共有することができた。

2-4 PBL 型授業法の研究・実践

(1) 目的

文部科学省で推進している PBL (Project Based Learning) 型授業法を導入し，生徒が自ら課題を見つけ，さらにその問題を自ら解決する活動を積極的に取り入れることで，現在，生徒に求められている思考力・判断力・表現力の育成に努めることが目的である。

(2) 対象学年

今回の実践例では 1 学年と 3 学年のものを挙げる。

(3) 概要

本校では，研究授業を各担当者が年 1 回以上実施することを目標としている。その中で，PBL 型授業法をはじめとした主体的・対話的で深い学び方を取り入れることで，生徒の学力の向上，学習意欲や充実感の増進を図る取り組みを行っている。

(4) 具体的内容

① 数学（数学 I）での実践

授業者 大沼 桂 教諭 単元名「データの分析」
対 象 1 年 3 組 38 名

1. 単元のねらい

- ・度数分布表やヒストグラム，および代表値など，データを分析する上での基本的な図や指標についての理解を図る。
- ・四分位数や分散，標準偏差などの意味について理解し，それらを用いてデータを分析することで，その傾向を把握できるようにする。
- ・散布図や相関係数の意味を理解し，それらを用いて 2 つのデータを分析することで，相関関係を把握できるようにする。

2.活動のねらい

- ・さまざまな統計量から選手の特徴を捉え、考察する活動を通して、数学的根拠に基づいた判断ができるようにする。
- ・自分の考えを適切な数学の用語を用いて文章や口頭で表現することができるようにする。

3.実践内容

時数	学習内容
1	度数分布表, ヒストグラム, 相対度数
2	平均値, 中央値, 最頻値
3	四分位数, 箱ひげ図
4	範囲, 四分位範囲, 四分位偏差
5~6	偏差, 分散, 標準偏差
7~8	データの分析による問題解決活動
9	散布図, 相関関係
10~11	相関係数

この単元の学習は全11時間で行った。第6時までは基本的な統計量や図表などのデータの分析に関わる基礎的な事項の理解と習得を目標として講義と演習を中心に授業を展開した。それをふまえて第7時では、「スカウトマンになろう」というテーマで、与えられたデータを分析し、その結果を根拠として意思決定を行う活動を実施した。具体的には、3名のバスケットボール選手の過去10試合の得点数のデータを提示し、各種統計量の算出や図表への整理といった作業を通してそれぞれの選手の特徴を捉えたいうで、最も魅力的な選手を自身の観点で選ぶといった活動である。最終的には、グループ毎に各自の選出した選手を数学的な根拠を踏まえて発表し、意見交換を行った。この活動のメインテーマは分析結果を自分なりに解釈し、選手を選出することにある。結果的には、A、B、Cそれぞれの選手を37%、7%、56%の生徒が選出し、分析結果の数値が同じでもその解釈には個性が表れ、最終的な意思決定にも違いが表れる点に面白さを感じている様子がみられた。この活動を通して、数学の持つ有用性や魅力を実感した上で、9~11時には2つの変量の間になり立つ関係を分析する手法を学び、この単元を締めくくった。

② 英語（コミュニケーション英語Ⅲ）での実践

授業者 阿部成子 教諭 単元名「Recycling Hotel Soup to Save Lives」
対 象 創造類型3年37名

1.単元のねらい

- ・公衆衛生面における世界の地域格差の現状に関心をもち、資源の再利用や地域間格差の問題について、自分ができることは何かを考えようとしている。
- ・貧しい地域の人々にはどのような問題があり、彼らを援助するために何ができるかについて書き、グループ内で意見を述べることができる。
- ・公衆衛生面における世界の地域間格差の現状について、読んだり聞いたりしたことを理解し、内容に関する質問に英語で答えることができる。
- ・カヨンゴ氏がグローバル・ソープ・プロジェクトを設立した背景や活動内容について理解している。

2.活動のねらい

- ・カヨンゴ氏の経験をふまえて、自分の身の回りにある「無駄」に気付かせる。
- ・グループで意見を交換することで、新しいリサイクルのアイデアを発見させる。

3.実践内容

時数	学習内容
1～3	Lesson 前半の内容理解・音読
4～6	Lesson 後半の内容理解・音読
7	自分にできるリサイクルを考える

この単元は全7時間で行った。第6時までは、英語によるオーラルイントロダクション、リスニングによる本文導入、内容理解の問題、音読などを通して、教科書の本文理解に繋げた。そして第7時のまとめ活動では、本文の内容を自分の身近な環境に結びつけさせるための活動を行った。「身の周りでまだ使えるのに頻りに捨てているものは何か」と、「それらを使って何が作り出せるか。またはどのように再利用できるか」という2つの質問について、まずは個人で考え、ワークシートに記入させた。その後、メモをもとに英語で意見交換を行わせた。このとき、他者の考えに対して何かしらの意見またはフィードバックを必ず述べさせた。最後に、グループで最も興味深かったアイデアを各グループから発表させた。

(5) 結果と考察

多くの研究授業で、PBL型授業法を含めたアクティブラーニングを積極的に取り入れていた。共通テストの傾向や、新学習指導要領の内容と照らしてもわかる通り、現在求められている各能力を育成するためには必要不可欠なことである。

(6) 総括

このPBL型授業法をより効果的に取り入れるためには、教える側も常にアンテナを張り、地域に目を向け、課題を意識しておく必要がある。それらの課題と担当している科目に関する知識がどう有機的に結びつくのか、または課題に対してどのようなアプローチをすれば生徒にとって最適なものになるのかといったこと等、教員側の事前の周到な準備が求められる。

今後もこのような授業法がさまざまな面で展開されていくためにも、教員自身がお互いに授業を見学する機会を増やすなど、研修を重ね、さらに質を向上させていくことが必要である。

2-5 教科での観点別評価法による指導と評価の一体化の研究・実践

(1) 観点別評価についての基本的な考え方

本校は、「グローバル・リテラシー＝グローバル視野を備えた“確かな学力”」を養成し、「学ぶ意欲」の高揚を目標としている。この目標に向け、多様な資質能力の獲得状況を適正に測る学習評価、及び学ぶ意欲を高める学習評価の方法を研究・開発・実践することが重要である。この観点に立ち、本校は従来実践してきた観点別評価をより明確化し、生徒や保護者に対してその結果を知らせることで、学習への動機付けを強め、協働型学習や教員専門性開発と一体化して取り組むものである。本校の観点別評価の方法を設計するに当たっては、以下の3点を基本とした。

ア 単位認定の厳格性を確保するため、100点法による評価（評点）を堅持する。

※各観点を到達度によりA, B, Cの3段階で評価し、その組み合わせにより評定（5段階）を定める方法は用いない。

イ 現行の学習指導要領及び新学習指導要領の評価の観点を踏まえ、本校では以下の3観点を評価する。

①知識・理解と技能※ ②思考・判断・表現 ③関心・意欲・態度

※①の観点に関しては、現行の学習指導要領の「知識・理解」と「技能」を合わせた評価を行う。

ウ これまでの評価方法との連続性や、それぞれの教科特性を考慮し、教科裁量の枠を確保するシステムとする。

さらに、平成29年度からの実践開始に向けて、以下の3点に留意することとした。

ア 生徒に観点を明示する以上、教科として十分に研究と検討を行い、説明責任を果たせるよう、定期考査等における作問やワークシートやレポート等における設問作成を行う。

イ 教科の裁量枠が広がる分、教科ごとに統一的に取り組めるよう留意する。

ウ これまでの学習評価結果との間に、大きなギャップをつくらぬ配慮を持つ。学年平均点65点を目標とすることが一層重要になる。また、丁寧に統一的な説明を生徒・保護者に行う。

(2) 方法

従来、「平常点」として評価されてきたものを含めて、学習活動全般を観点別に評価し、それらの合算として評点を算出する。

①教科単位で、評価対象の種類とそれぞれの比重、3観点の年間目標比率と評価対象毎の3観点の年間目標比率を決定する(表5-1)。それを年間学習指導計画(学習シラバス)で生徒・保護者に周知する(表5-2)。なお、各観点はバランスよく評価することが理想的だが、従来評価からの激変を避けるために、「知識・理解と技能」の上限を60%と規定し、評価を実践していく過程で理想とする比率に近づけるよう、各教科に評価法の検討・改善を求めた。

表5-1 各教科の3観点の目標比率

観点		国語	数学	英語		理科	地歴公民	芸術	情報	家庭	保健体育	
				コミュ英	他						体育	保健
①	知識・理解+技能	45	50	50	45	60	60	50	40	45	50	55
②	思考・判断・表現	35	35	30	35	20	24	30	35	30	20	30
③	関心・意欲・態度	20	15	20	20	20	16	20	25	25	30	15

表5-2 シラバスの掲載例

教科名 英語(コミュニケーション英語)

観点別評価・算出方法 ① 知識・理解+技能 ② 思考・判断・表現

③ 関心・意欲・態度

各観点の比率 PT:パフォーマンステスト

重み付け	60		10		15			15			100
評価項目	定期考査		小テスト		PT(GTEC含)			課題・提出物・課題テスト			100点換算
観点比率(①:②:③)	7	3	5	5	2	2	6	2	2	6	
①知識・理解+技能	42		5		3			3			53
②思考・判断・表現	18		5		3			3			29
③関心・意欲・態度					9			9			18

シラバスへの掲載案

重み付け	60		10		15			15			100
評価項目	定期考査		小テスト		PT(GTEC含)			課題・提出物・課題テスト			評価の比率
①知識・理解+技能	◎		◎		○			○			50
②思考・判断・表現	○		◎		○			○			30
③関心・意欲・態度					◎			◎			20

- ② 3観点の年間目標比率を踏まえて、各期の評価対象毎の3観点比率を設定する。各期の比率を年間目標比率に一致させる必要はなく、年間を通して可能な限り目標比率に近づけるように評価する。各観点の比率に基づいて、考查問題、ワークシートの設問等を作成し、実践する。考查問題やワークシートには、評価の観点を原則明記する。また、ノートなどの提出物においては、提出したか否かではなく、ループリック表を活用することで、その内容について評価する。ループリック表も生徒に提示し、評価の結果を明確化させる。また、パフォーマンステストなども積極的に行い、生徒の多様な能力を広く評価できるように努める。
- ③ 各期の総括的評価では、計画に基づき次のような表によって、観点毎の評点及び評点（観点評点を合計した点数）を算出する。

表5-3 観点評点の計算例

第1学年英語表現Ⅰ（期）成績集計

番号	名前	性	定期考查(65)				小テスト(0)				Performance(25)				課題テスト提出物(10)				第1期(100)			
			①49	②16	③	小計	①	②	③	小計	①3	②12	③10	小計	①2	②2	③6	小計	①54	②30	③16	合計
101		M	42	10		52					3	8	7	18	1	1	6	8	31.3	15.5	13.0	60
102		M	20	2		22					2	8	10	20	1	0	6	7	16.0	9.3	16.0	41

- ④ 通信票とともに「学習の記録」という観点評点を明記した本校独自の成績表を生徒に配布し、生徒・保護者に周知する。
- ⑤ 学年末の総括的評価では、観点評点と評点はそれぞれ各期の平均点とする。

(3) 本校の観点別評価方法の特徴

① 観点評点による総括的評価

観点毎の評価を、A、B、Cなどの段階ではなく評点（数値）とすること、及び観点評点の合算で（総合的な）評点とすること。これらにより、単位認定を従来通り評点を基準に行うことができ、評点を重視する高校の評価制度を保持できる。

② 年間の3観点目標比率の設定

定期考查だけでなく、あらゆる評価対象（提出物やパフォーマンステスト等）を観点毎に捉える。そして、それらについての年間評価計画を当初に作成し、それを詳細化して各期の評価計画を実践する。これにより、以下に示すような点において指導と評価の一体化を促進させ、学習指導全般の計画性を高め、指導と評価の一体化を図ることができる。また、期毎ではなく年間の目標比率としていることから、単元や各期の学習内容の特性を生かした柔軟性ある指導も可能になる。例えば、1期は「知識」に重きをおいて評価し、2期は「思考」に重きをおいて評価することができる。

表5-4 本校独自の観点別成績票

教科	英語		
科目	コミュニケーション英語Ⅰ		
観点	知識理解技能	思考判断表現	関心意欲態度
1期	42/59	11/20	20/21
	72		
学年末	45/59	12/20	19/20
	75		
評定	4		

本校の観点別評価の利点を以下に整理する。

- ア 年間目標を詳細化して各期あるいは各単元の観点比率等を計画する過程で、教員は、指導目標を明確化し、それに向う体系的で効果的な指導計画を立てられ、具体的な授業改善につなげることができる。

- イ 各期・各単元の観点別比率に沿ってワークシート等を作成することで、授業後に観点に対する評価ができ、授業中の生徒と向き合う時間を増加させることができる。
- ウ あらゆる評価対象を観点別に捉えて指導することで、生徒の学習到達目標がより明確化され、目的意識の涵養と「主体的・対話的で深い学び」の成立に寄与することができる。

③ 教科裁量枠の確保

高等学校の教科はより専門性が高まることから、全ての教科で同一の評価基準を設定することは、生徒の資質・能力を正當に評価することにならない。そこで、観点別の評価基準設定に当たっては、教科毎の裁量枠の確保を重視することとした。これにより、教科単位の授業改善の一環として観点別評価を位置付けることが期待できる。また、音楽や美術といった同一教科であってもその内容に大きな差のある教科に関しては、学習指導委員会で協議の上、科目毎の評価基準設定も認めることとした。

(4) 実施までの経緯

① 平成26年度以前（従来）

学習シラバスで評価の観点を生徒に知らせ、指導においても観点別評価に取り組むよう各教員に働きかけてはいたが、それが学校全体の具体的な取組には至っていなかった。教務規定の変更もなく、評価内容を考查点と平常点に大別し、平常点は20%以内のままであった。学習評価全体が考查に偏り、評価の観点としても「知識・理解」と「技能」に偏重していたと言える。多様な資質能力の育成を図る上で学習評価の改善は避けられぬものであった。

② 平成27年度（情報収集・研究期）

- ・新たな学力観へのシフト、高大接続改革に伴う大学入試の変化や生徒指導要録の様式の変更に対応するため、観点別評価について教務部を中心として研究を開始する。
- ・次年度から、本校独自の科目である課題研究で観点別評価を試行することに決まる。

③ 平成28年度（評価方法の詳細に関する検討期）

- ・年度当初に、次年度から観点別評価に移行する予定であることが決まる。またそれに向け、今年度は考查等における観点別作問に取り組むことが決まる。
- ・教務部、学習指導委員会で観点別評価方法の検討を開始。
- ・年度末、観点別評価の方法を決定し、それに伴い教務規定も改定。
- ・次年度使用の学習シラバスを、学習到達目標を詳細化した形式に大幅に変更。

④ 平成29年度以降（実施と検討・改善期）

- ・始業式直後に、教務担当からの全生徒への告知、文書による家庭への周知を行う。
- ・観点別評価の改善と検討を、実施に合わせ行う。

(5) 成果と課題

観点別評価の導入に対して、多くの教員から肯定的な意見が挙がった。観点を意識することで、授業方法の改善につながったという意見も多かった。観点別評価は着実に定着しており、現在は考查問題（図5-1）だけでなく、小テストやワークシート等も観点別に評価する方法が浸透している。さらに、多くの教科でプリントなどの評価対象物において、ルーブリック（表5-5）を作成・提示しており、生徒が課題に取り組む際、目標を設定しやすくなっている。

図5-1 観点別に問を設定した考査問題 図5-2 評価観点を明確に示したワークシート

【四】 次の文章は、『源氏物語』「桐壺」巻の一部である。光源氏は三歳に成長し、御持斎の儀式をとり行うこととなった。本文を読んで、次の問いに答えなさい。

(本文略)

【知識・理解】

問一 二重線部A「いみじう」B「ありがたく」について、最も適した意味を次の選択肢ア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A「いみじう」 ア 非常に イ すばらしく ウ ひどく エ 意味深長に

B「ありがたく」 ア たぐいまれで イ むずかしく ウ 愛しく エ 礼を言うほど

問二 例題部①「えそねみあへたまはず」の解釈として最も適したものを、次の選択肢ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 憎み合うこともおできにならない イ その身には合っていないらしい

ウ 憎みきることもおできにならない エ その身に合うこともおできにならない

【思考・判断・表現】

問三 例題部②「もの心知りたまふ人」とはどのような人か。解答欄の「社会的な立場を気にせず。」という書き出しに続ける形で説明しなさい。

問四 例題部③「それにつけても、世のそしりのみ多かれど」とあるが、なぜ「世のそしり」が多いのか。「それ」が指す内容に触れながら、説明しなさい。

令和二年度 二学年古典B 提出課題（制作・発表・評価→思考・判断・表現）

『源氏物語』「桐壺」～③「若紫」絵日記を作ろう

年 組 番 氏名

【説明】

『源氏物語』「桐壺」～③「若紫」の範囲（第3巻ア～第3巻イ）から、好きな場面を一つ選んで、太枠に絵を描いてください。また、その場面について、登場人物の誰か、あるいはその場面を見ている人（第三者）の視点で日記を書いてください。

★絵の上書きは授業中に含まれません。人が見ることができるよう丁寧に書くようにしてください。

★選んだ場面を絵・文章で豊かに表現できているかや、分かりやすさや表現の点で工夫がみられるかを評価します。

【工夫やこだわりポイント、制作の感想など】（記述欄）

表5-5 提出物に関するルーブリック表

	A	B	C	D
関心 (ノート)	数式、グラフ、図が丁寧にまとめられている。さらにメモを書き込むなど独自の工夫が見られる。	数式、グラフ、図が丁寧にまとめられている。	数式、グラフ、図が丁寧にまとめられていない。	数式、グラフ、図が丁寧にまとめられていない。さらに字が汚い。

課題に関しても、様々な意見が挙がっている。評価方法に正解はないため、教科会や学習指導委員会を通して、観点別評価の課題と改善方法を協議し、改善することは、毎年行うべきことである。現在、上げられている問題点を以下に示す。

- (イ) 観点評点の合計と評点不一致。
- (ロ) 各観点の評価が数値のため分かりにくい。(A, B, Cなどの表記を検討すべきでは?)
- (ハ) 観点別評価の結果を教員・生徒共にその後の授業・学習に十分に反映できていない。

(イ)に関して

本校では、観点評点を四捨五入した数値を観点別成績票に記載しているため、以下のように2つの点数が一致しないことが起こってしまう。

①知識・理解と技能・・・・・・・・・・25.52点	→四捨五入→26点	} →①～③合計 <u>60点</u>
②思考・判断・表現・・・・・・・・・・22.51点	→四捨五入→23点	
③主体的に学習に取り組む態度・・・・10.52点	→四捨五入→11点	
合計 58.55点	→四捨五入→ <u>59点</u>	

本校では、100点法による評価を堅持しているため、できるだけ誤差が小さくなるように観点評点を四捨五入せずに合計し、その合計点を四捨五入した整数値を評点とする計算方法（四捨五入は1回）を採用している。上の例では、59点が正しい評点である。一方、観点別成績票の観点評点は四捨五入した数値を表記しているため、その点数を合計すると60点となり、評点と一致しなくなってしまう。このことに関しては、長い時間を掛けて議論したが、小数を含む数値は生徒・保護者にとって分かりにくく、また、25.5342・・・などと小数第1位以下に数値が連続する場合もありえるため、観点評点は整数表記とし、観点別成績票に、「観点別の点数の合計と評点（100点）が四捨五入の関係で一致しない場合があります。」という一文を示す妥協案を採択した。（なお、令和元年度までの「学習の記録」には、表を見た際の分かりやすさを重視しそれぞれの観点評点を少数第一位まで掲載していたが、令和2年度からは観点評点と評点の差をより埋めるため、少数第二位まで掲載している）この問題は、100点法と観点別評価を併用する以上、避けることのできない問題である。よって上の例では、100点法を重視する場合、評点は59点、観点別評価を重視する場合、評点は60点となる。どちらの計算方法を採用するか（つまり100点法を重視するか観点別評価を重視するか）は、学校毎に議論して決定する他ない。

(ロ)に関して

観点評点を数値で表すと、点数が明確化される利点があるが、意見で挙げた通り、生徒・保護者にとっては、A、B、Cなどの段階的な表記の方が各自の学習到達度が分かりやすい。しかし、A、B、C表記にした場合、次のような検討事項が生じる。

(ロⅠ)全観点がA、A、Aでも評点が79点、つまり評定4の場合が生じる。

(ロⅡ)A、B、Cを区切るカッティングラインの設定が困難である。

(ロⅠ)の問題も100点法と観点別評価を併用していることから生じる問題であり、各観点の学習到達度を分かりやすくすると、逆に評定との関係が分かりにくくなるというジレンマに陥ってしまう。この問題を解決するためには、100点法による評価をやめ、「A、A、Aの場合、評定は5」というように、各観点の到達度をもとに評定を定める方法に評価法を改めなければならない。これは、高校に根付く100点法を改めるという極めて大きな改訂であり、現在のところ、本校ではこの方法を採用する予定はない。そのため、分かりにくさはあっても観点評点を数値で表す方法を継続している。

(ロⅡ)に関しては、観点比率を教科の裁量によって決めていることから、カッティングラインも教科で定めるべきである。カッティングラインを決めること自体は容易だが、A、B、Cの組み合わせと評定との整合性を考慮した場合、適切なカッティングラインがどこか、という問題は途端に難解なものとなる。

(ハ)に関して

本校では期毎に、県教委が採用している県統一の教務支援システムより出力される成績票と本校独自の観点別成績票、「学習の記録」（表5-4）を配布している。これは、教務支援システムが観点別評価に対応していないためである。生徒が観点評点を確認することで、自分の足りない能力を把握し、その後の学習に生かすというねらいがあるが、そのねらいの達成度は不十分であると感じる。100点法の文化は、生徒にとっても馴染み深いものであり、多くの生徒は成績の善し悪しを、観点を意識せず、評点の“平均点”を基準に考える傾向がある。そのため、観点評点に目を向けさせるような指導を継続させる必要がある。

(6) 今後に向けて

観点別評価には、(5)で挙げたような様々な課題があるが、評価において最も重要なことは、形成的評価を効果的に行い、授業や学習におけるPDCAサイクルを円滑に回すことである。ほぼ全ての評価対象物に観点が示されるようになり、ルーブリック表の使用割合も増加していることから、確実に観点別評価は本校に浸透している。今後は、(5)(ハ)で挙げたように、評価の結果をどれだけ授業と学習にフィードバックさせることができるかが最大の要点である。そのためには日頃から、観点、つまり育成させたい資質・能力を意識した授業づくりを行うことが重要である。生徒の授業や課題に取り組む姿を見ると、生徒も観点を意識することの重要性に気付き始めている様子である。授業と評価を通して、多様な資質・能力を身に付けることの重要性を理解させるよう努めていきたい。

最後に、観点別評価と修得の関係について述べる。多くの高校では、100点法により算出された評点を元に単位の修得認定を行う。つまり評点40点以上でなければ、単位は修得認定されない。これを観点別評価と関連づけて考えた場合、ある観点が0点であっても他の観点の合計が40点に達していれば単位修得認定されるということになる。この現状は、多様な資質・能力を育成するという観点別評価の目的から明らかに外れていると言えよう。しかし、100点法と観点別評価を併用する以上、この問題は必ず生じる。観点別評価には、1つの能力に偏らず、多様な資質・能力をバランスよく育てるという利点があり、100点法には成績を公正且つ明確に数値化するという利点があり、どちらか片方を選べば解決するという問題ではない。今後も、指導と評価の一体化の研究を継続し、評価精度の向上に努める次第である。

2-6 課題研究とのリンクを図る教科指導

(1) 1学年国語科の授業・週間課題における、批判的思考力・発言力を高める取り組み

1年生では国語総合の授業において、批判的思考力を養うことを目標に、「書くこと」の指導の中で小論文作成に取り組んだ。複数の情報源から多角的な視野をもってテーマについて考えるために、教科書教材に関連のある評論文や新聞記事を読み、自分の考えを600字の小論文にまとめた。さらに、週間課題として複数の短い新聞記事を読み、内容をまとめたり、自分の意見をまとめたりする活動を行っている。週間課題の中で特に素晴らしい文章を授業の中で生徒にフィードバックして紹介することで、さらに多角的な視点を持つことができると期待している。

また、国語総合の授業では生徒がおもしろいと思う本の魅力を紹介し合うビブリオバトルを実施した。「話すこと・聞くこと」の指導の中で、地域社会研究のプレゼンテーションを念頭に置き、対話型スピーチの活動に取り組んだ。話すことはもちろん、相手の話を聞いて質問したり、よい点をほめたり、改善点をアドバイスしたりする活動を設けることで、自分のスピーチやプレゼンテーションの能力向上に役立てている。

(2) 2学年地歴公民科（日本史）における、研究に求められる各種能力を養うレポート活動

日本史でのレポート学習を取り入れる際に、本校で行われている「総合的な探究の時間」との関連性に留意した。今年度の「総合的な探究の時間」では、生徒それぞれが関心をもったテーマに基づき、調査・研究を進めながら、最終的にポスターセッションによる発表を行った。この調査・研究を進めていく中で目標の一つとしたのが、自らが設定したテーマをさまざまな視点から捉え、比較・検証していく能力の育成である。今回の日本史のレポート作成にあたっては、この目標の一助になればということから計画・実施したところである。

こうした能力の育成に加え、他にも研究活動に求められる各種能力を育成すべく、レポート作成を始めるにあたって、生徒たちには二つの条件を示した。①情報収集の手段は必ず二種類以上用いること、②グラフや表は必ず二種類以上レポート内に含めることである。

①を設定した理由は、情報の信頼度について正しい姿勢をもつことができる能力、すなわち、メディア・リテラシーの育成をはかるためである。それまでに何度か行ったレポート作成では、インターネットからの情報に終始するきらいがあった。インターネットは手軽ではあるものの、一方で

すぐに情報を書き換えることができるなど、信頼度については劣る部分がある。片や文献・資料といったものは、読みこむのに時間がかかるものの、信頼度はインターネットの情報に比べて高いとされている。こうしたそれぞれの特性を生かしながら、調査・研究も進めてほしいという思いから、このような条件設定に至った。

②については、表現力の育成を念頭に置いたものである。グラフ・表といっても、円グラフや折れ線グラフ、年表など、その表現方法は多岐にわたる。研究の成果を発表する際には、どのようにすれば相手にわかりやすく伝わるのかということを考えながら、まとめあげなければならない。それぞれの表現方法に特性があり、発表する際には内容に適したものを選ぶ必要がある。そのことを生徒に意識させるべく、このような条件を設定した。

今回のレポート作成で指導したものが、その後行われた「総合的な探究の時間」でのポスターセッションでも活かされている場面をみた。今後も、教科間の有機的な連携を図りながら、生徒たちの各種能力を高める教育活動を行っていきたいと考えている。

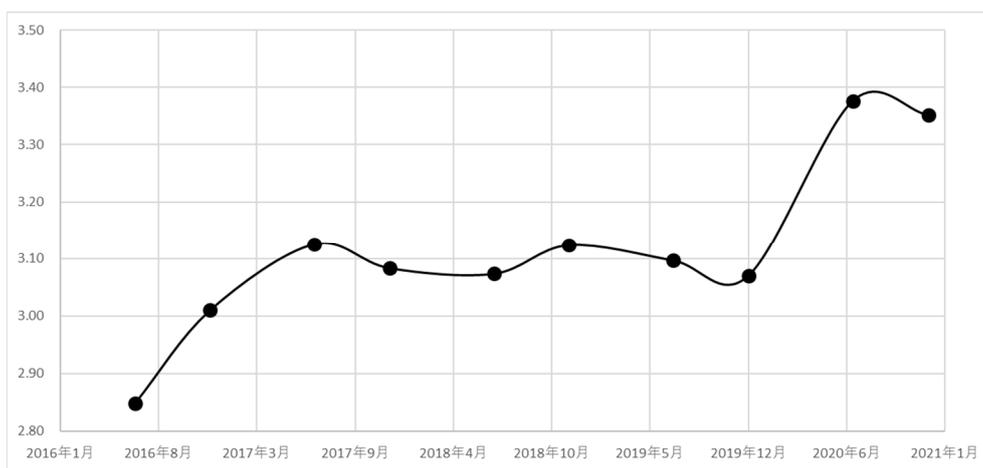
2-7 授業評価・学習実態調査による授業改善

授業改善に結びつけるため、生徒全員に授業評価アンケートを実施している。アンケートは7月と12月の年2回実施し、7月の結果をその後の授業にフィードバックするようにしている。昨年度までは、体育・芸術の実技教科と、体育・芸術以外教科に分けて、質問内容の異なるアンケートをそれぞれ実施していたが、今年度は全教科でアンケートの質問内容を統一することとした。また、アンケートの質問内容を見直し、学力の3観点に則した質問内容に改めた。その際、過年度比較できるように、質問内容を大きく変えないように注意した。以下に、授業評価の質問内容を示す。

- 質問1 あなたはこの授業に意欲的に取り組んでいますか。(学習態度)
- 質問2 この授業を通して、新しい知識や技能を身に付けることはできましたか。(学力向上)
- 質問3 先生は、授業の中で思考力や表現力を伸ばす工夫をしていますか。(思考表現)
- 質問4 先生は、話し方や授業進度に気を付けた分かりやすい説明をしていますか。(教師説明)
- 質問5 先生は、板書やプリント、ICTなど授業で用いる教材を工夫していますか。(教材工夫)
- 質問6 この授業を通して、その科目への興味や関心は深まりましたか。(意欲喚起)

アンケートはマークシート形式であり、『1. はい 2. どちらかといえば、はい 3. どちらかといえば、いいえ 4. いいえ』の4段階で評価する。各段階に点数を与え、1を4点、2を3点、3を1点、4を0点とし、各質問項目の平均点を計算し、全教員に結果を配布している。結果は、個人の結果と教科の平均点の両方を重ねて示し、教科平均と比較し、どの質問項目が高いのか、あるいは低いのかを分析しやすくなるように工夫している。また、結果は六角形のレーダーチャート形式で表し、教員一人一人に個別に配布するように配慮している。主要5教科の平均値の平成28年度から令和2年度までの結果の推移を以下の表と図に示す。

		H28		H29		H30		R1		R2	
		7月	12月								
質問項目	学習態度	2.30	2.61	2.72	2.70	2.81	2.87	2.84	2.77	3.47	3.41
	学力向上	2.80	2.98	3.11	3.07	3.02	3.08	3.05	3.06	3.46	3.47
	思考表現	3.08	3.12	3.23	3.20	3.14	3.20	3.17	3.15	3.36	3.34
	教師説明	3.06	3.19	3.29	3.23	3.24	3.27	3.23	3.20	3.37	3.33
	教材工夫	3.20	3.28	3.40	3.30	3.33	3.36	3.37	3.34	3.41	3.41
	意欲喚起	2.65	2.88	3.00	3.00	2.90	2.96	2.92	2.90	3.19	3.15
	平均	2.85	3.01	3.13	3.08	3.07	3.12	3.10	3.07	3.38	3.35



5教科の平均値は、平成29年度から上がり、令和元年度まで横這いであったが、令和2年度になると、一気に0.3ポイント程上昇し、過去最高値を記録した。質問内容を見直し、生徒が回答しやすいように質問文を改めた要因が大きいと思われるが、本校のこれまでの授業改善への取り組みが現れたものとして、肯定的に評価したい。特に、全ての質問項目で3.00を上回ったことは、大きな変化だと考える。令和2年度の7月と12月の結果を比較すると、12月は7月よりも0.03ポイントの減少となった。客観的な根拠がある訳ではないが、その原因として、コロナ禍における生活環境が考えられる。7月は、3ヶ月程の長期にわたった臨時休校が終わり、多くの生徒が普段の学校生活や対面授業を受けられる喜びを感じていた時期であり、学習に対するモチベーションが高まっていたと考えられる。12月は授業も進み、学習内容も難しくなる時期であり、授業についていけない生徒の割合が増加したと考えられる。それでも3.30以上という高水準を維持できており、本校の授業改善への成果が現れたものとする。このように、授業評価は形成的評価に繋がる貴重なデータであるため、結果の分析を継続し、今後の授業改善に生かせるよう、検討を重ねていく予定である。

2-8 ICT教育

(1) ICT機器の充実

今年度は、通常教室での電子黒板の設置、授業で使えるiPadの整備を進めた。生徒が通常利用するすべての教室に電子黒板を設置することで、教員がPCやiPadの映像を投影する手間が減り、ICT機器を利用する使用率が上昇した。また、県から新たに241台のiPadを確保し、教科の授業や総合的な探究の時間での利用に向けて、準備を進めてきた。今後も、環境整備の一層の充実を図っていきたい。

(2) コロナ禍での学校再開後におけるICT等を使った授業に関する報告

今年度のコロナウイルス感染症対策として、4、5月での動画配信による遠隔授業、6月以降での感染症対策を踏まえたパフォーマンステスト等、様々なICT機器の活用例が見られた。英語科教員による県英語科会への報告資料を次に紹介する。

<授業実践報告>

学校再開前後における ICT 等を使った授業について

宮城県気仙沼高等学校

教諭 揚野 耕平

1 本校の概要と英語教育

本校は平成28年度に文部科学省スーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定され、今年度、最終年度の5年目を迎えた。現在、「世界を舞台に活躍する、スケールの大きな人間育成」を目指すべく、国内外交流や異文化理解を促す諸活動を展開するほか、校内研究授業を繰り返し、コミュニケーション型な授業実践を目指している。

2 オンデマンド型遠隔授業の実施

新型コロナウイルス感染症流行のため、令和2年6月1日まで臨時休業となった。本校では全教科においてオンデマンド型の遠隔授業を4月28日から5月29日まで、Classiを利用して配信することとなり、英語科も実施した。パワーポイントのスライドに音声を吹き込んだり（図1）、iOSアプリ GoodNotes を活用し、指導内容の書き込みと音声の吹き込みを同時に行いながら画面録画したり（図2）して動画を作成し、1学年8講座、2学年9講座、3学年は14講座を配信した。普段と同じように、教科書の導入から入り、語彙、内容理解、精読や文法事項の説明、音読、表現活動へと促すスタイルや、文法の説明に絞ったスタイルの動画を作成した。動画視聴後はClassiのアンケート機能を用いて授業の理解度を図ったり、選択や記述問題を配信して、内容を振り返らせる工夫を施した。その他、動画に関するコメントも生徒にしてもらったが、ポジティブな回答をした生徒が多くいた。動画を繰り返し見ることができるという点で、特に英語を苦手とする生徒から好評であった。この臨時休業期間以降でも動画の配信は生徒に有益に働くという手応えを得た。



図1

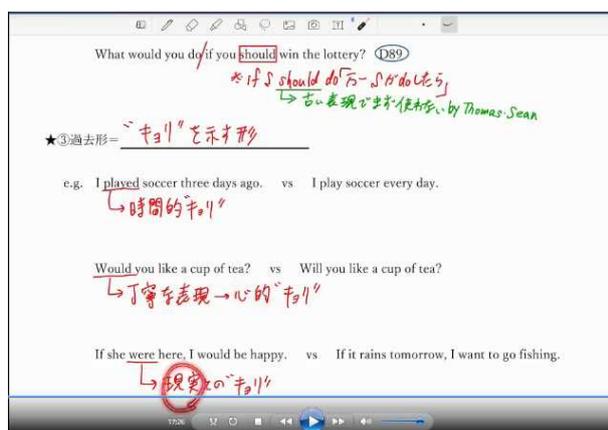


図2

3 学校再開後の授業とパフォーマンステスト

新型コロナウイルス感染症流行前は当たり前に行っていた生徒-教師間や生徒間のインタラクテ

イブな授業スタイルを再考・取捨選択する必要がある、学校再開後、感染症予防に十分配慮しながら授業を展開した。できるだけ生徒が前を向いて授業を進めるために、黒板上のスクリーンに映した語彙や例文、簡単な指示文に対するクイックレスポンスを多用するなど、思考の瞬発力を向上させる活動を多く設定したことによってスピーキング力の土台作りをすることができた。また、SGH 指定以降全学年で実施するようになったパフォーマンステストも、従来の1対1、1対複数のパフォーマンステストの形式をとることができなかつたので、i-Pad の録画機能を用いてのスピーキングテストを試験的に実施した。評価に悩んだ際に再度見直しができる点で評価の正当性を担保できるものであった。

4 今後の展望

オンデマンド型遠隔授業に関して、教材準備に時間を要するものの、大きな可能性を感じた。例えば、英語を苦手としている生徒に対して諸文法の説明動画を Classi 上に挙げておけば、生徒はいつでも何度でもどのタイミングでも視聴することができたり、Lesson 中のターゲット文法に関する文法説明動画を事前に挙げ視聴させておけば、授業では表現活動に時間を割くことが可能となる。

パフォーマンステストに関しては、コロナの情勢も相まって端末機器を使ったものに挑戦することができた。昨年度東北学院大学の村野井教授からご助言いただいたとおり、PC 室にマイク機材を導入すれば、発話内容をデータで提出することもできるし、生徒たちのスマートフォン等の端末機器から録画・録音をさせ Classi や G Suite for education 等のクラウド上に提出させることが可能となる。生徒は何度も録り直しをすることができる点も有益に働くだらう。また、音声認証の精度が非常に高くなってきたことから、「Speechy」というアプリもパフォーマンステストに活用できると考える。生徒が発話した英語を文字に起こすことができ、自身で確認できるほか、語彙数を図ることができ、Fluency を重視して評価したいときには有効なアプリだと考える。

様々な機器やアプリを活用し、授業の時間を【思考・判断・表現】の時間に少しでも多く割くことができれば、生徒の英語運用能力を4技能のバランスをとりながら育成していくことにつながる。新型コロナウイルス感染症の影響によってもたらされたものをこれからの英語教育にプラスに生かしていきたい。

英語教育
国際理解

3 英語教育・交際理解

3-1 英語科授業の充実

(1) 目的

グローバルリテラシー獲得の基礎となる語学力を養成するとともに、英語を用いて論理的に研究の概要を表現し伝える力を育成する。

(2) 対象学年

全生徒

(3) 概要

- ・外部専門機関との連携
- ・パフォーマンステストの継続的な実施と新型コロナウイルス感染症流行に伴う改良点

(4) 具体内容

①東北学院大学との連携

目的：英語科教員の指導力向上および中高の連携促進

日時：令和2年12月9日（水）

場所：D 教室
会議室

講師：東北学院大学文学部教育学科 教授 村野井 仁 氏

参加者：本校英語科教員 8 名
市内中学校教員 9 名

内容：本校英語科教員による研究授業ののちに、「中高接続を意識したライティング指導」のテーマのもと、中学校の先生方と KJ 法を用いて話し合いを行った。時代の変容に合わせて鉛筆で文字を書くほか、パソコンや iPad 等の端末機器を用いて入力させるライティング活動を授業に盛り込むといった場面設定をすることが生徒に必要性を感じさせる良い授業につながっていくのではないかといった意見が出された。

その後『主体的な学びを促す領域統合型の英語指導—ライティング指導を中心に—』をテーマとした講演を村野井先生からいただいた。聞くこと・読むことから始まるインプットをいかに理解させ、生徒一人ひとりの考えを醸成させることができるのか、様々な角度から彼らの考えを形成し、話すこと・書くことのアウトプット活動へと展開していく領域統合型授業を展開することが重要である。書くことに関して、生徒が一定量のまとまりのある文を構成するパラグラフライティングを行ったり、ライティングを作るうえで、①どのような構成で書くか考える **Planning** ②下書きを書く **Draft writing** ③英和，和英，英語活用，類語辞典を使って書き直す **Revising** ④様式を整えて、できれば他者からフィードバックをもらいながら完成させる **Editing**，の4つのプロセスを経てライティングを指導することが生徒の書く力を向上させる。最後に、ルーブリック表を作成し、妥当性と信頼性、実用性の高い評価を実施することが理想であるという貴重な話を伺うことができた。参加者からは「ライティングのプロセスなど、中学校の現場でもためになる方法を多く聞くことができてよかった。これから、より ICT の活用が求められる時代の中で、新しい評価の仕方等も取り入れていきたい」といった感想が寄せられた。今回の研修会は、中高の英語教育の接続を考えるとともに、より教育効果の高い指導法を学ぶことができた。

②パフォーマンステストの継続的な実施と新型コロナウイルス感染症流行に伴う

改良点

目的：アウトプット能力の育成および伸長を図る

内容：各学年ともパフォーマンステストを年間 3 回以上実施した。1 学年では音読テストや、主張・理由根拠・支持・結論の構成を意識したエッセイライティング、キーワードのみを使用して再発話するリテリングテストなどを実施した。2 学年では、教員の質問に答えるインタビューテスト、イラスト内の人物描写、実際に起こりうるシチュエーションでの英会話、与えられたテーマに対する意見文の作成などを実施した。3 学年では、与えられた英文の要約や、自分の好きなものについて紹介する Show and Tell などを実施した。

また、実施方法についても様々改良を加えた。新型コロナウイルス感染症流行に伴い、以前まで行っていた従来の 1 対 1，1 対複数の形式をとることができなかった。そこで iPad の録画機能を用いてのスピーキングテストを試験的に実施した。評価に悩んだ再度見直すことができる点で評価の正当性を担保できるものであった。今後、PC 室にマイク機材を導入すれば発話内容をデータで提出することもできるし、生徒たちのスマートフォン等の端末機器から録画・録音させ、Classi や G Suite for education 等のクラウド上に提出させることが可能となる。生徒にとっても何度も録り直しをすることができる点もプラスに働くだらう。そのほか、「Speechy」というアプリの活用もパフォーマンステストに活用できると考える。生徒が発話した英語を文字に起こすことができ、自身で確認できるほか、語彙数を図ることができ、Fluency を重視して評価したいときには有効なアプリだと考える。

様々な機器やアプリを活用し、授業の時間を【思考・判断・表現】の時間に少しでも多く割くことができれば、生徒の英語運用能力を 4 技能のバランスをとりながら育成していくことにつながる。新型コロナウイルス感染症の影響によってもたらされたものをこれからの英語教育にプラスに生かしていきたい。

3-2 スピーチコンテスト

(1) 目的

本コンテストを、英語運用能力を実際に発揮する場として位置づけ、ルーブリック評価により英語を発信する力を測るとともに、英語学習への動機付けに活用する。

(2) 対象学年

第 1 学年

(3) 概要

テーマ設定型プレゼンテーションコンテスト

(4) 具体内容

日時：令和 2 年 10 月 29 日（木）

場所：本校体育館

発表者：第 1 学年 各クラス代表者 6 名

内容：演題 「私の好きな気仙沼」

審査員 本校英語科教員 1 名

本校海外交流アドバイザー 1 名

出場者以外の 1 学年生徒全員(アプリで投票)

- 表彰** 最優秀賞 1名
審査員特別賞 1名
優良賞 参加者全員

次第 (司会：英語コンテスト運営委員の生徒)

- 14:50 開会宣言
審査員紹介
14:55 コンテスト開始(一人あたり3分間で発表)
15:20 審査・休憩
15:30 講評・表彰式
閉会宣言

(5) 結果と考察

「英語運用能力を実際に発揮する場」「英語学習への動機付け」としてコンテストを実施するという点においては、準備や練習を重ねて成果を発表した生徒にとって非常に有意義なものになったと考えられる。発表者の生徒は、その後の英語学習においても意欲的な取り組みを見せ、検定試験に果敢に挑戦したり、学校外でも英語で発表する機会を得たりと、英語学習に対する向上心が増している様子がうかがえる。

今後の課題は、自主的に発表した生徒以外の生徒にとっても、英語コンテストをより有意義なものにしていく手立てが必要だということだ。今回のコンテストでは、事前指導、発表のテーマとともに普段の授業とは切り離れた形でおこなったが、コンテストのテーマを授業で扱っている内容と関連付け、普段の授業内で行っている活動やパフォーマンステストなどの取り組みの成果の場としてコンテストを捉えることが必要だと考えられる。具体的には、事前に各クラス内で全員に発表をさせ、お互いに評価した上でクラスの代表生徒を選出し、コンテストを代表者数名によるクラス対抗戦にするなど、生徒の意欲や参加意識を高めるような手立てを検討していきたい。

3-3 国際理解の促進

(1) 目的

グローバルリテラシー獲得の基礎となる語学力を養成するとともに、外国語学習に対する動機付けへつなげる。

(2) 対象学年

全生徒

(3) 概要

- ①Speech Writing Workshop の実施
- ②English Café の実施
- ③World Café への参加

(4) 具体内容

①Speech Writing Workshop の実施

目的：英語を話す上で大切な構成について学び、英語で発信していくための基礎を作る

日時：第1回目 令和2年7月30日(木)

第2回目 9月3日(木)

10日(木)

造類型2年生希望者5名が参加した。毎年神奈川総合高校近郊の高校の生徒を集めて行っていた交流が新型コロナウイルス感染拡大に伴い実施ができなく、その代案としてオンラインでの実施を考えたようだ。そこで全国SGH指定校に誘いをした中で本校の参加が実現された。順天堂大学国際教養学科教授フランソワ・ニヨンサバ氏よりアフリカの飢餓や感染症に関する問題について基調講演を拝聴した。その後、3-4名のブレイクアウトルームに分かれ、様々なトピックについてディスカッションを行った。話し合ったトピックは以下の通りである。

- ①日本と海外の教育の違い
- ②世界の食と日本
- ③宗教
- ④LGBTQ+
- ⑤死生観～自分らしい最期～
- ⑥日本における外国人
- ⑦日本のODAの在り方

日本語でも話をするのが難しいトピックであったが、自分もつ表現力を発揮して何とか1日英語のみを用いてオンライン上で会話をすることができた。また、全国屈指の進学校から集まったオンライン交流会は非常にハイレベルなもので、これからの英語学習に大きなモチベーションを得ることができた。

以下は参加した生徒からの感想である。

・日本だけでなく、世界に共通する課題について多くの高校生と議論することができ、とても楽しむことが出来た。活発な話し合いができたのは神奈川総合高校の皆さんのおかげだと感じた。そこから、ディスカッションの進め方についても学ぶことが多くあった。今日学んだことをこれからの議論の場で活かしていきたい。

・同年代の人とこれからの世界の問題を深く話し合えて良かったです。

・司会として話し合いを上手に回すのが大変だった。他の人に話を振るだけでなく、相手が伝えたいことを汲み取ってそれを深めたり広げたりするのが難しかった。

・オンラインだったので、ミュートにしたりするのが大変で自分の意見を、思いついた時に言えなかったので言い足りなかった所が少しある。

・分からない単語を言い換えたり、様々な表現を試みる大切さを学びました。また、リアクションをしてもらえると凄く話しやすかったので、コミュニケーションをとるうえで頷いたり相槌を入れたりすることも大切だと思いました。

・英語に対する意識が今までと比べてより高まった。思ったことを即時に英語で話せるようになる力をつけたり、語彙を増やしたりするべきだと思った。

・文章を書くのではなく、話す時に頭の中でパッと考えて口に出すことが苦手だと思いました。とにかく単語力をつけたいです。他の高校生の英語力を知り、モチベーションがすごく上がりました。



志教育

4 志教育

4-1 1学年「総合的な探究の時間」

(1) 目的

- ・自己を客観的に分析し理解する
- ・社会の仕組みや生き方の選択肢について理解する
- ・「社会の一員としてどう生きるか」について探究する

(2) 対象学年 1学年 229名

(3) 概要

教科横断的に知識を活用し、集団や社会における自己の果たすべき役割を考え、さらに世界規模での価値の高い生き方や社会性、自己を活かす生き方などを探究する進路学習を行う。震災・防災学習、地方創生につながる学習と共に実施することにより、地域への愛着や社会性を高めるだけでなく、世界的視点をもって豊かな未来を希求する人材育成につながる。

(4) 具体内容

新型コロナウイルス感染拡大防止による臨時休校措置の影響により、今年度は例年と時期をずらしての指導となった。今年度の1学年の生徒の類型選択が確定するまでの大まかな流れは次のとおりである。

- 臨時休校期間：適性診断テスト R-CAP 実施（自宅にて各自受検）
- 臨時休校期間：定期考査・全国模試について動画配信
- 7月8日：自分の未来と類型選択について
- 7月中旬：類型選択に関する担任との面談
- 7月29日：R-CAP結果の分析、自分自身と地域の関わりを考える
- 8月上旬：三者面談での生徒、保護者との面談
- 8月26日：類型選択等に生かす将来の職業や大学等の基本知識を得る
- 9月2日：職業研究、学問研究のまとめと発表
- 9月9日：進路講話を拝聴し視野を広げる（自分と社会をつなげる）
- 10月23日：課題研究Ⅰ中間発表会・課題研究Ⅱ最終発表会見学
- 2月9日：先輩の合格体験談を拝聴し、将来の見通しから3年間の日常生活を設計

(5) 結果と考察

入学当初の進路希望調査では進学希望者が74%、公務員就職希望者が8%、未定者が17%であったが、10月の進路希望調査ではそれぞれ、83%、9%、9%と進路が明確になった生徒が増えた。

(6) 総括

学校設定科目である地域社会研究と総合的な探究の時間を関連付けて計画を立て、実施した。自分がどのような適性を持つのか、地域や世界にはどのような職業があり、どのような学問があるのか。SDGsやSociety5.0等、これからの未来を見据えさせる様々な角度から問いを設けた。年度末の地域社会研究が終わる際に進路を考え直す生徒が現れたということも、様々な科目の学びから得た刺激によるものと考えられる。次年度は類型によって探究の時間が変わるが、「総合的な探究の時間」の中にキャリア教育を含んだ指導の計画と実施をさらに深めていく必要がある。

4-2 2学年「総合的な探究の時間」

(1) 目的

探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための**資質・能力**を次のとおり育成することを旨とする。

評価の趣旨	①知識及び技能	②思考力・判断力・表現力等	③学びに向かう力、人間性等
科目の評価の観点の趣旨	探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解できるようにする。	実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。	探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。
本校の資質・能力 (GL)	A 基礎的・基本的な知識・技能	B 思考力 批判的思考力・科学的思考力、総合的思考力・未来思考力	
		C コミュニケーション力 語学力、言語的コミュニケーション力、情報活用力	
	D 多様性・協働性・多様性		

(2) 対象学年 第2学年人文類型・理数類型

(3) 概要

テーマ「自分自身の興味関心を突き詰める」

生徒にとって、自分自身の興味関心を突き詰める探究活動を通じて、夢・志を抱ききかけをつくる。また、自分自身のできることを増やし、やりたいことを広げ、その上で、教科の学習を主体的に学ぶ原動力につなげることで、生涯にわたる自己の在り方生き方を探求していく。

○コンセプト

<p>①やりたいこと・興味があることを探し、取り組んでほしい (サイクルⅠ：2年生前半)</p> <p>→ 自ら学び続ける姿勢につなげる (他人事→自分事になるもの)</p> <p>→ 「A 基礎的・基本的な知識・技能」を獲得しようとする学びの動機付けへ。</p> <p>※負担感×，持続可能性○ (やりたいこと，できること)</p> <p>→ やるべきことが多いからこそ，カリキュラム内でやる (やりたい人はもっともっとやる)</p> <p>→ 「趣味，部活動，好きな教科，希望する進路，将来の夢に関するテーマ」(主体性)で。</p>
<p>②自分にとって良いものを伝え広めてほしい (サイクルⅡ：2年生後半)</p> <p>→ 伝えたいことがある。伝えたい人がいる。自分以外の価値観に触れる (人と人とのつながり)</p> <p>→ 「C コミュニケーション力」を磨き，「D 多様性・協働性・多様性」を味わう。</p> <p>※自分がやりたくて，自分ができるところを一度形にしてみる。</p> <p>→ 根拠を持って「分かったこと」と「分からなかったこと」を明確にして表現する。</p> <p>→ 価値観の違う人の感じ方，考え方を知り，分からなかった部分の世界を広げる。</p> <p>→ 改めて自分自身の「自分がやりたいこと」「自分ができるところ」を見つめ直す。</p>
<p>③自分で意義に気付いてほしい (サイクルⅢ：3年生前半)</p> <p>→ やったことはどこかでだれかの役に立つことはないだろうか？</p> <p>逆に，やったことがどこかのだれにも役に立たないことはあり得るのだろうか？</p> <p>→ 「B 思考力」で世界 (社会) を想像し，根拠を持って自分の在り方・生き方を定める。</p> <p>※自分がやりたくて，世界 (社会) に必要で，自分ができるところを見出す</p> <p>→ 理想的な自分の在り方・生き方があり，(高校卒業時の) 進路選択ができるように。</p> <p>→ 後輩に宣言することで，ロールモデルになる。</p>
<p>④自分の在り方・生き方に向けて行動する。(サイクルⅣ：3年生後半)</p> <p>→ 進路達成に向けて，今やるべきことに目を向け，実際に行動する。</p>

○スケジュール概要

令和2年度 総合的な探究の時間（文理探究）計画

	月	日	曜		2年（令和2年度）	備考
1	6	8	月	⑦	ガイダンス	適性検査（リクルート）→ 自宅
2	6	9	火	⑦	テーマ①（情報収集①）	
3	6	23	火	⑦	（1期前：科目選択説明会）	提出後に二者面談
4	6	30	火	⑦	テーマ②（情報収集②）	
5	7	14	火	⑦	（夏休み前：進路講演会）	適性検査を受けて
6	7	21	火	⑦	テーマ③（情報収集③）	
7	7	28	火	⑦	テーマ④（研究分野・個人グループ調査）	
					FW（夏休み：オープンキャンパス・企業訪問）	夏ワーク：OC・本
8	8	18	火	⑦	テーマ⑤（テーマ決め①）	
9	8	25	火	⑤	テーマ⑥（テーマ決め②）	
10	9	1	火	⑦	テーマ⑦（テーマ決め③）	
11	9	8	火	⑦	（2期前：進路について）	
12	9	29	火	⑦	テーマ⑧（発表資料準備）	（教育実習生に聞く会）
13	10	3	土	①	FW（土曜授業：キャリアガイダンス）	
14	10	3	土	②	FW（土曜授業：キャリアガイダンス）	
15	10	3	土	③	FW（土曜授業：キャリアガイダンス）	
16	10	3	土	④	FW（土曜授業：キャリアガイダンス）	
17	10	6	火	⑦	テーマ⑨（発表資料準備）	
18	10	22	木	⑥	（3期前：小論文講演会）	
19	10	22	木	⑦	（3期前：小論文講演会）	
20	10	23	金	⑤	総探テーマ発表会	スライド6枚程度
21	10	23	金	⑥	総探テーマ発表会	アイデアメモ
22	10	23	金	⑦	総探テーマ発表会	運営
23	10	27	火	⑦	探究α①（計画）	
24	11	7	土	③	探究α②（集中研究・調査Ⅰ）	校内
25	11	7	土	④	探究α③（集中研究・調査Ⅰ）	
26	11	10	火	⑦	探究α④（研究）	
27	11	30	火	⑦	探究α⑤（研究）	
					FW（修学旅行：見学地）	各自
28	12	8	火	⑦	探究α⑥（研究）	
29	12	12	土	①	探究α⑦（集中研究・調査Ⅱ）	校内・市内
30	12	12	土	②	探究α⑧（集中研究・調査Ⅱ）	
31	12	12	土	③	探究α⑨（集中研究・調査Ⅱ）	
32	12	12	土	④	探究α⑩（集中研究・調査Ⅱ）	
33	12	15	火	⑦	探究α⑪（発表資料について）	
34	12	21	月	④	探究α⑫（発表資料準備）	冬ワーク：志望理由書、PPシート
35	12	22	火	⑦	（冬休み前：3年生0学期、第一志望宣言）	
					（冬休み前：決起集会）	
					（冬休み明け：ひたすら学習会①）	
36	1	12	火	⑦	探究α⑬（発表資料準備）	
					（冬休み明け：ひたすら学習会②）	
37	1	26	火	⑦	探究α⑭（質疑応答のやり方）	
38	1	30	土	①	全体発表会（中間）	スライド12枚程度
39	1	30	土	②	全体発表会（中間）	型を示す
40	1	30	土	③	全体発表会（中間）	論理性
41	1	30	土	④	全体発表会（中間）	
					（4期前：メンタル講座・ロジカルシンキング講座）	
42	2	2	火	①	2年生のまとめ	
43	2	2	火	④	（進路別講演会（校長先生、専門学校、就職））	
44	2	9	火	⑦	（4期前：先輩の合格体験談を聞く会（推薦））	
45	3	2	火	①	（3月：立志会～私の志望宣言～）	
46	3	2	火	②	（3月：立志会～私の志望宣言～）	
47	3	2	火	③	（3月：小論文講演会）	
48	3	2	火	④	（3月：小論文講演会）	
49	3	17	水	④	（春休み前：先輩の合格体験談を聞く会（一般））	春ワーク：志望理由書

(4) 具体内容

①「総合的な探究の時間」ガイダンス

目的：2年生から3年生を通して行う総合的な探究の時間で学ぶ内容を理解する。

今後探究する研究テーマを設定するための見通しを持つ。

日時：6月8日（月）7校時 全1時間

場所：2学年各クラス教室

講師：2学年クラス担任・副担任

参加者：2学年人文類型・理数類型 生徒

内容：これまでの「総合的な学習の時間」

の進路学習では、直接的に学問分野を調べ、職業分類を調べて、自分の将来を考える学習活動を実践してきた。今年度からは、「総合的な探究の時間」として、自分の興味・関心を突き詰める探究学習を通じて、自分の進む学問および職業を、さらには自分の在り方生き方を考えることを実践することとした。具体的には、

「気仙沼に半魚人が現れました。この後に気仙沼で起こりうることは何か」について、これまでの知識や経験を総動員して考えて考え、足りないならば新しい知識と経験を身につけ、さまざまな分野にさまざまなことを広げながら考え、「全てのこととはつながっている」ということを知った。また、3年生の前半までの研究スケジュールを知り、10月、1月、次年度7月に発表会を行うことも確認した。

総括：どんなに小さなことも、さもないことも、何かしら、誰かのためになっている。今、興味をもっている何か、疑問をもっている何か、その興味と疑問を突き詰めることで、自分の興味を徹底的に研究する準備の時間を提供することができた。



②テーマ設定

目的：自分自身の興味・関心を広げ、知っていること、実は知らなかったことに気付く。

また、思考ツール（ウェビング・マップ、マンダラート、マトリックスなど）を理解し、活用できるようになる。

日時：6月9日（火）7校時～10月6日（火）7校時 全9時間（全体計画参照）

場所：2学年各クラス教室、図書館、PC室 他

講師：2学年クラス担任・副担任

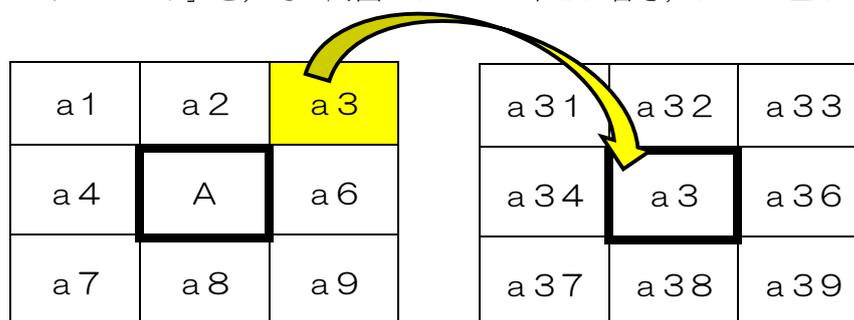
参加者：2学年人文類型・理数類型 生徒

内容：1 ウェビング・マップ

- ・中央に「自分」、8つの「メインブランチ」（得意なこと、好きなモノ、興味・関心、好きな教科、最近気になること、目標、性格、将来の夢）を書く。
- ・8つのキーワードに関連する思いつくことをどんどん書き、共有して広げる。

2 マンダラート

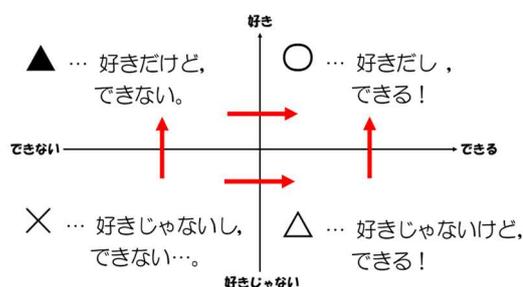
- ・ ウェビング・マップから「キーワード」を選び、中心に「キーワード」を入れ、その周囲の8マスに関連する「サブワード」を書き入れる。
- ・ 8個の「サブワード」を、その周囲の9マスの中心に書き、81マス埋めてみる



3 マトリックス (座標軸)

- ・ 縦横の軸に2つの価値観を置いて情報を分析する。グラフ上の項目の場所によって、それぞれの関係が分かり、傾向を知ることができる。
- ・ ウェビング・マップ、マンダラートでわかった自分の興味・関心を「好き・好きじゃない」「できる・できない」のグラフ軸で分類してみる。

4つの分類



4 自分の興味・関心

- ・ 「好きなこと、できることを増やす！」の広げる観点、「もうちょっと知る。もっとできるように！」の高める観点、「良いところをみる。もっと好きに！」の深める観点で自分の興味・関心を見つめる時間を確保した。

5 テーマ決定に向けて

- ・ 個人・グループ研究の希望を自分で示し、興味・関心が合う人を探す。
- ・ それぞれで、何を明らかにしたいのか、テーマの核を焦点化していく。
- ・ テーマの条件として、次のものを挙げた。
興味がある 具体的である 自分たちでできそう 知りたいことがある

6 発表資料作成に向けて

- ・ iPad・iPhone等でKeyNote, PowerPoint, Googleスライドでの資料作りを行った。
- ・ 発表資料の条件として、次のものを挙げた。
テーマ・メンバーが記載されている。
ミッション① 好きなものの自分で撮影した写真がある。
ミッション② オリジナル着眼点(切り口)がある。例 乃木坂×歴史
ミッション③ 何をどう研究していくのか(研究方法)が示されている。

総括：これまで1年生で取り組んできた「地域社会研究」の地域、海、SDGs という社会ですでに「課題」として明らかにされていることを一度離れた。まわりや人に合わせず、自分のこととして実感を持って、絞れる部分を絞ってできるだけ具体的なテーマ設定を目指した。まず情報収集してみることで自分ができることを探し、自分が知りたいことを明らかにすることで、自分の興味・関心を突き詰めることに挑戦しようとした。生徒は想像以上に意欲的に取り組む手段が印象的だった。

③「総合的な探究の時間」テーマ発表会（課題研究Ⅱ最終発表会・課題研究Ⅰ中間発表会と同時開催）

目的：これまでの研究を発表し、気仙沼高校全体として、縦のつながりをつくり、研究への多角的な見方を養う。特に、2年生人文類型・理数類型は、これから研究するテーマを紹介し、今後の探究活動に弾みをつける。

日時：10月23日（金）5,6,7校時 全3時間

場所：第2体育館（第1体育館では課題研究Ⅰ・課題研究Ⅱ）

講師：2学年クラス担任・副担任

参加者：2学年人文類型・理数類型 生徒（1年生，2年生創造類型，3年生の生徒も見学）

内容：自分の興味・関心や身近な疑問に関すること等，研究テーマ・今後の研究方針を発表した。具体的には，タイトル・メンバー，好きなもの写真，テーマへの熱い思い×3，研究していくターゲット・疑問について紹介した。構想を考え，なぜ話すのか，何を話すのか，どう話せば聞いてもらえるのか。実際に，発表する経験を積んだ。



・テーマ数 125 テーマ

・発表形式 ポスター形式（スライド6枚），発表5分，質疑応答5分

総括：2年生人文類型・理数類型の生徒は，これまでは2年生・3年生創造類型の生徒の発表を聞くだけであったが，校内全体で探究活動に取り組む体制づくりを進めることで創造類型に引けを取らないオリジナリティに溢れた発表を行うことができた。



④探究 α

目的：研究計画を作成し、自分の興味・関心に関する情報を集める。

日時：10月27日（火）7校時～1月26日（火）7校時 全14時間（全体計画参照）

場所：2学年各クラス教室，図書館，PC室 他

講師：2学年クラス担任・副担任

参加者：2学年人文類型・理数類型 生徒

内容：1 情報収集について

- ・できる限り自由に使える時間を確保し、生徒が自分で探究に臨む余裕を作った。
- ・二次情報だけの調べ学習にならず、一次情報（直接情報）を集めて探究する。
二次情報…図書，新聞・雑誌，論文，オンラインデータベース，ウェブサイト 等
一次情報…フィールドワーク，インタビュー，映像・写真，アンケート，実験 等

2 発表資料作成に向けて

- ・発表資料の条件として、追加で次のものを挙げた。
 ミッション④ 2つ以上のものを比較しましょう。
 ミッション⑤ 自作のグラフ・図・表を入れましょう。

3 発表練習，質問対応の仕方について

- ・聴く姿勢「あいうえお」である「あいづち，アイコンタクト，うなずき，笑顔，オウム返し」意識させることにした。
- ・質問「クローズドクエスチョン」「オープンクエスチョン」を練習した。
クローズドクエスチョン … 相手の考えや事実を明確にしたい場面などで有効
「はいいいえ」等で答えられる ⇔ 答えを限定する
オープンクエスチョン … 相手からより多くの情報を引き出したい場面で有効
話の幅が広がる ⇔ 答えに困ることもある

総括：生徒はテーマ発表会で、自分達が研究しようとしているテーマのことを知らないか、自覚していた。探究 α ではテーマのついて知り、二次情報をまずほとんど調べ尽くし、その上で知らないこと、分かっていないことを見つけて探究していく時間を十分確保することができた。

⑤「総合的な探究の時間」中間発表会（課題研究Ⅰ・地域社会研究・総合的な探究の時間 全体発表会）

目的：これまでの研究を発表し、気仙沼高校全体として、縦のつながりをつくり、研究への多角的な見方を養う。特に、2年生人文類型・理数類型は、進めてきた研究の中間発表を行い、今後の進路準備・探究活動に弾みをつける。

日時：1月30日（土）1,2,3,4校時 全4時間

場所：2学年各クラス教室（第1体育館では地域社会研究，第2体育館では課題研究Ⅰ）

講師：2学年クラス担任・副担任

参加者：2学年人文類型・理数類型 生徒（1年生，2年生創造類型の生徒も見学）

内 容：「総合的な探究の時間」の発表会の概要，テーマを示す。

- ・テーマ数 122 テーマ
- ・発表形式 ポスター形式（スライド 12 枚），発表 5 分，質疑応答 5 分

番号	分類	研究テーマ
1	A1	水道水と買った水、また場所によって水が違うのはなぜか。
2	A2	未成年は競馬をどう楽しめるか？
3	A3	条件付き46都道府県鉄道旅はできるのか
4	A4	逃走中の最適解
5	A5	消しゴムの消しやすさの違い
6	A6	MP5は何故世界世界中の対テロ部隊に採用されたのか
7	A7	授業中に指名される確率
8	A8	牛糞の秘密 ～臭いけど役に立つ～
9	A9	ボールペンの機能やデザインへのこだわり
10	A10	オンラインで若者の気仙沼愛を育ててUターンを増やすためには
11	A11	地方都市にある企業の現状の課題並びにその解決策とは？
12	A12	気高生の睡眠時間と学力にはどのような関係性があるのか
13	A13	外国人が親しみやすい温泉を作るには？
14	A14	今流行中の韓国の食文化は日本にきてどのようにして流行ったのか
15	A15	北欧神話の魅力とは
16	B1	ゲームをすると本当に頭が悪くなるのか ～ゲームが脳に与える影響～
17	B2	どう森の音楽とジャケットの変化
18	B3	ジブリの女性キャラの年代別の違いとは？
19	B4	カラオケで点数が取れる人と取れない人の差とは？ ～点数に1番影響してくるのは何か？～
20	B5	なぜ芸能人の中で売れる売れないがわかるのか
21	B6	東京ディズニーリゾートのおもてなしの秘密とは
22	B7	コロナ禍でも映画館とポップコーンの関係性は保てるのか
23	B8	リズムゲームの魅力とは
24	B9	RTAのチャートはどのようにして組まれるのか
25	B10	視聴率の高いバラエティ番組に多く出ている芸人
26	B11	トムとジェリーが日本人に親しまれているのはなぜ？
27	B12	世代別からわかる漫画の共通点から次にヒットする漫画は何か？
28	B13	仮面ライダーのモチーフになりやすいものはなにか
29	B14	ぼくのかんがえたさいきょーのぼけもん
30	B15	名探偵コナンの世界の被害者の分析
31	C1	新型コロナウイルスがバレーボールの世界にどのような影響を及ぼしたか
32	C2	地域密着型のスポーツチームになるには
33	C3	高校球児の髪型から見る「同調圧力」の実態とは
34	C4	過去のサッカーワールドカップの結果から日本に必要なことは何か？
35	C5	理想のランナーとは
36	C6	実用的な筋肉をつけるためにはどの時期、方法が適切か？
37	C7	粒高ラバーを使用している選手は活躍しているのか
38	C8	ソフトテニスの試合で打てない人の心理の特徴について
39	C9	グローブの進化とそれに伴ったプレースタイルの変化
40	C10	プレッシャーに負けず最高のパフォーマンスを発揮するには
41	C11	シュートフォームはどのように変わったのか
42	C12	大会中に食べるおにぎり 市販品と手作りどっちがいいの？
43	C13	カタールニヤの独立 ～どうなる！？ 世界のサッカー～
44	C14	プロ野球優勝チームの共通点は何か？
45	C15	これからテニスはどのように変化するか？
46	D1	人の心に響く”エモい音楽”はどのような変遷を遂げているのか
47	D2	プロイラストレーターに近づくにはどのような練習と期間が必要なのか。
48	D3	これから流行する曲を社会情勢の変化から予想できるか
49	D4	世界で愛される日本人アーティスト
50	D5	韓国と日本のアーティストの違い
51	D6	なぜ嵐は日本経済に大きな影響をもたらしているのか
52	D7	米津玄師の作る音楽が多くの人に愛される理由は何か。
53	D8	視聴者が興味を引くCMとは
54	D9	HIPHOPの誕生と再ブームの到来
55	D10	ラップは他の音楽に比べて記憶に残りやすいのか？？
56	D11	効果音の必要性
57	D12	音・美・食をつかった新世代イベントをつくらう
58	D13	なぜ日本で韓国メイク、中国メイクが流行したのか？
59	D14	ファッションの流行と推移
60	D15	髪型と髪色で与える印象はなにか
61	D16	髪のダメージについて
62	D17	昔の女性と今の女性のメイクに対する興味について

63	E1	総理大臣の良い政治とは
64	E2	お菓子作りと化学反応はどのように関係しているのか
65	E3	深海魚は何故浅瀬に来るのか
66	E4	なぜヨーロッパはスキンシップが多いのか 文化・歴史的観点から日本との対比で探る
67	E5	日韓における言語の歴史の背景にあるものは
68	E6	自然毒と人との関わり
69	E7	流れ星のジンクスは世界共通なのか？
70	E8	最も効率の良い徹夜のお供は何か
71	E9	言語はどのように変化していくのか？
72	E10	なぜ始皇帝は中華統一できたのか
73	E11	みりんの役割について
74	E12	ロボは人の活動をどこまで抑制するか。
75	E13	野良猫と仲良くなる方法
76	E14	人間が犬を愛す理由
77	E15	世の中に役立つ犬の鼻
78	F1	授業の面白さと理解度の関係
79	F2	なぜ大学のお金がかかるのか
80	F3	勉強前の食事によって記憶力に差が出るのか
81	F4	本の帯は高校生の読書の普及率に繋がるのか
82	F5	時代とともに変化する教育現場で柔軟に対応するためには ～大学で何をすべきか～
83	F6	養護教諭に求められるスキルの変遷
84	F7	子どもの自尊心をupしたい！！
85	F8	幼児が絵本を読むことで成長にどのような影響があるのか？
86	F9	乳幼児が絵を描く時、どのような事を考えているのか
87	F10	家庭内における教育・しつけの違いとは？
88	F11	子供のおもちゃの流行はどのように変化しているのか
89	F12	子供の自己肯定感を高めるために保育者が心がけることは
90	F13	音楽が子供に与えるものは？
91	F14	幼少期に踊っていたダンスはどのような効果があるのか ～幼少期の自分が今の自分自身へ残した影響を探れ！～
92	F15	食べ物の好き嫌いがある子供とない子供の差とは
93	G1	なぜ私たちは赤と青で区別されるのか
94	G2	ディズニーランドの経済効果を利用してインドの経済格差を解決することはできるのか
95	G3	軽度知的障がい者やグレーゾーンの人と共存し生きやすい社会にするために私たちができることは？
96	G4	待機児童による過疎地域の利用
97	G5	児童虐待を減らすために何ができるか
98	G6	孤独を孤立させない
99	G7	髪型による男女の差別はあるのか？
100	G8	兵器で見る国際情勢
101	G9	スマホが出たことによる時間の使い方の年代別変化
102	G10	SNSによって日本語はどう変化していくのか
103	G11	トレンドの戦略において私達高校生に最も効果的・魅力的なアプローチは何か
104	G12	ネットの世界はリアルにどう影響しているのか
105	G13	メジャーデビューしているネット発アーティストとボカロのつながりはどれくらい深いのか
106	G14	スマホによる高校の日常生活への影響
107	G15	病気がストーリーに与える影響
108	H1	バイタルサインと心理状態の関係
109	H2	医療服で患者にとって良い影響があるのは何色か
110	H3	夢と心の関係 ～心の状態と見る夢について～
111	H4	色と性格の関係性は？
112	H5	人の思い込みが引き起こす力
113	H6	『人を好きになるってなんだろう...？』
114	H7	血液型と人間性にはどのような関係があるのか
115	H8	夢が教えてくれる「自分」とは
116	H9	なぜ、他人同士が恋人関係や結婚に至ることができるのか。
117	H10	心理学を使った他者との交流について
118	H11	質の良い睡眠にするためにはどのような方法が効果的か
119	H12	夢ってなに？好きな夢を見たい！は叶うのか
120	H13	睡眠と記憶にはどのような関係があるのか
121	H14	悪い夢やいい夢を見るときの心理状態とはどういうものなのか
122	H15	多重人格

中間発表会は、本は第2体育館でポスター発表を行う予定であったが、コロナ禍を考慮し、校舎内での分散会場にて実施した。10月のテーマ発表会から、探究aで興味・関心や身近な疑問に関することについて、探究活動を進めてきた。具体的には、個人の視点・視野を広げ、独自のデータ収集やグラフ作成等を行い、自分の考えや、自分以外の他者と共有する機会を設けた。



総括：自分がやりたくて、自分ができるところを形にし、根拠を持って「分かったこと」と「分からなかったこと」を明確にして表現した。その中で、価値観の違う人の感じ方、考え方を知り、分からなかった部分の世界を広げ、改めて自分自身の「自分がやりたいこと」「自分ができるところ」を見つめ直す機会を設けた。

⑥ 2年生のまとめ

目的：発表会での感想を伝え合い、今年度を振り返り、次年度につなげる。

日時：2月2日（火）1校時 全1時間

場所：2学年各クラス教室

講師：2学年クラス担任・副担任

参加者：2学年人文類型・理数類型 生徒

内容：中間発表会において、聞いた発表や他の研究の良い点を互いに伝え合い、今後の活動の励みにした。

また、今年の総括として、『自分の興味関心を突き詰める』をテーマに、志を持って自分の将来を対話的に考えられるように「情報収集」、「整理分析」等に取り組み、その探究活動の成果として「研究発表」を行ってきたことを確認した。

総括：探究の過程において、課題解決への知識・技能を深め、課題を立て、情報を集め、整理分析し、他者と自己との関わりで様々な価値観に触れながら考え、新たな価値を見出すことができた。

⑦ 進路別ガイダンス

目的：進学や公務員・就職を考える上で、必要な情報を得ることを目的に、進路別・分野別の講座やワークショップを行って今後の進路選択の一助とする。

日時：10月3日（土）1,2,3,4校時 全4時間

場所：2学年各クラス教室，E教室，社会科教室，進路指導室，記念館1F・2F，第1体育館，会議室（講師控室）

講師：2学年クラス担任・副担任

参加者：2学年人文類型・理数類型・創造類型 生徒

内 容：当日のスケジュールおよび講師一覧

時間	大学・短大	専門学校	公務員	就職
8：30～8：40	SHR ※会場毎			
8：50～9：35	WS 人事部体験ゲーム	総合説明 注意点・奨学金	志望理由・自己PR・自己分析	
9：45～10：30		分野別説明会 (学校説明含む)	試験対策	自己PR実作 面接マナー指導
10：40～11：25	【文系】 入試対策講話	【理系】 入試対策講話	WS 人事部体験ゲーム	
11：35～12：20	推薦入試対策 面接マナー、自己PR指導			
12：20～	SHR ※会場毎 体育館の片付け、教室の消毒			

(ワークショップ)

人事部体験ゲーム①②	(株)さんぽう専任講師 大坂	第一体育館
------------	----------------	-------

(大学・短期大学)

文系入試対策講話	駿台予備学校	99	記念館 2 F
理系入試対策講話	養賢ゼミナール	70	記念館 1 F
推薦入試対策 (面接マナー、自己PR指導)	(株)さんぽう専任講師 阿部	169	記念館 2 F

(専門学校)

専門学校 総合説明	(株)さんぽう社員 藏川	42	E教室
建築・土木	仙台工科専門学校	1	2-1
美容・理容・メイク	仙台ヘアメイク専門学校	6	2-1
フード	宮城調理製菓専門学校	1	2-1
保育	仙台幼児保育専門学校	4	2-2
公務員	仙台大原簿記情報公務員専門学校	4	2-2
医療事務・視能訓練士	東北文化学園専門学校	2	2-2
ウェディング・観光・ホテル	国際マルチビジネス専門学校	4	2-3
デザイン・芸術 ／エンターテインメント	日本工学院専門学校 ／日本工学院八王子専門学校	2	2-3
動物	仙台総合ペット専門学校	3	E教室
看護	葵会仙台看護専門学校	10	E教室
理学療法士・作業療法士	仙台保健福祉専門学校	3	E教室
柔道整復師	東日本医療専門学校	1	E教室
自動車	専門学校日産栃木自動車大学校	1	2-3

(就職・公務員)

【就職・公務員】 志望理由・自己PR・自己分析	(株)さんぽう専任講師 橋本	20	社会科教室
【就職】 自己PR実作・面接マナー		1	進路指導室
【公務員】試験対策	仙台大原簿記情報公務員専門学校	19	社会科教室



総括： 会社で採用する人事部の職員として、採用のデモンストレーションを通じ、自分自身を客観視することができた。
また、大学、専門学校、民間・公務員就職についてのガイダンスを受けて、普段の高校生活を離れ、少し先の未来を想像し、自分の興味・関心と生涯の在り方生き方のつながりを考えた。



⑧定期考査前・長期休業前の戦略

目的：通年で探究活動を行うなか、定期考査前や長期休業前に生徒の視点・視野を意識的に変えることで、生徒自身の主体性や学習意欲に刺激を加える。

日時：6月23日(火)7校時 … 1期前：科目選択説明会
7月14日(火)7校時 … 夏休み前：進路講演会①
9月8日(火)7校時 … 2期前：探究活動と進路について
10月22日(火)6,7校時 … 3期前：小論文講演会①
2月2日(火)7校時 … 4期前：進路講演会②
2月9日(火)7校時 … 4期前：先輩の合格体験談を聞く会①(推薦)
3月2日(火)3,4校時 … 春休み前：小論文講演会②
3月17日(火)4校時 … 春休み前：先輩の合格体験談を聞く会②(一般)

全10時間

場所：2学年各クラス教室

講師：2学年クラス担任・副担任

参加者：2学年人文類型・理数類型・創造類型 生徒

内 容：1 科目選択説明会

- ・自分の興味・関心のある分野と将来の進みたい学問，職業分野との関連について考え，高校での学習科目を選択する機会を設けた。受験科目だけにこだわらない科目選択を行った。

2 進路講演会

- ・自己探究として，その道の専門家から学び，生き方在り方を考えた。

【進学】オープンキャンパス（今年度はオンラインも含む）等に参加の際に，より実りのある体験および学問研究・学科選択をできるよう生徒自身の学問への理解を深めた。

【就職・公務員】就職試験に向けての心構えや受験スケジュールについて見通しを持ち，適切な学科選択をできるよう生徒自身の学習への理解を深めた。

3 小論文講演会

- ・志望理由書や小論文の作成に必要な思考力・論述力と対応力を培った。文章の論理構造を学び，探究活動の発表資料作成に活かした。

4 先輩の合格体験談を聞く会

- ・総合型選抜（旧AO入試）と学校推薦型選抜（旧推薦入試），一般入試で合格した先輩の話を聞き，それぞれの時期にやるべきことを確認し，学習意欲の向上・生活習慣を見直す機会とさせた。

総 括：これまでの進路指導部で行ってきた学問研究，職業研究の一部を，探究活動内の流れに取り入れた。今現在のことに集中すべきタイミングと将来を見つめながら努力すべきタイミングを効果的に切り替えることを狙いながら，より良い内容，スケジュールを今後も探っていきたい。

⑨3年生0学期戦略（冬休み前12月～3月）

目 的：2学年第4期を迎えた段階で，改めて進路意識の向上を図り，自走学習の習慣を定着させる。

日 時：12月22日（火）7校時，3月2日（火）1,2校時 全3時間

（12月25日（金），1月9日（土），1月21日（木），2月3日（水）に時間外実施）

場 所：2学年各クラス教室，第1体育館，会議室 他

講 師：2学年クラス担任・副担任

参加者：2学年人文類型・理数類型・創造類型 生徒

内 容：今年度は，学習合宿のようにインパクトのあるものを一度開催して進路意識の向上を図ることは難しいので，様々な形のプログラムを数回に分け，4ヶ月に渡って実施することで，恒常的に進路を意識させて学習に励むように仕向けた。

具体策A

- 1 スタディーサポートの「成績と学習姿勢」に基づく象限別の面談
* 12月中旬～1月中旬にかけて担任との面談を実施する。
- 2 スタディーサポートの「成績と学習姿勢」に基づく象限別の面談
* 成績・学習姿勢ともに良い者（トップ層）は、更に高みを目指すために、校長先生・教頭先生・進路指導部長と面談していただく。
* 学習時間は十分だが成績の悪い者は、学習方法の見直しのため、教科担当者と面談する。

具体策B

- 1 12月22日（火） 第1志望宣言（各教室）
* 総探の時間を利用して、第1志望宣言と学習計画書を作成する。
- 2 12月25日（金） 学年集会（第2体育館）
* 学年全体で進路達成に向けた意識の統一を図る。特に冬休みに自主的な学習ができるように意識させる。
- 3 1月9日（土） ひたすら学習会（北3階教室・他）
* 8:30～17:00で、参加者全員で自学自習を続ける。
- 4 1月22日（金） ひたすら学習会（北3階教室・他）
* 16:10～18:50で、参加者全員で自学自習を続ける。
- 5 2月3日（水） メンタル講座&ロジカルシンキング講座（北3階教室・他）
* 16:10～18:00の講座選択制で実施する。
* ①受験勉強を続ける上で必要なメンタルの強さを身につける講義
②推薦入試等を意識した「考え方・話し方・書き方」に関する講義
- 6 3月2日（火） 立志会（北3階教室・視聴覚室・他）
* 進路希望別（または階層別）に仲間の前で自らの志望を宣言する。
* 3月授業の中に組み込んで実施する。



総括： 1月の探究活動の中間発表会を合間に挟みながらの0学期戦略だったが、ここでは高校卒業時の進路に焦点を定めて進路準備を行った。例年と同様の学習合宿を実施することができない状況だからこそ、教員も生徒も工夫が生まれ、2年生から3年生への滑らかなで、エネルギッシュな接続を促した。



(5) 結果と考察

1 グローバル化に関する意識アンケートについて

全校でのグローバル化に関する意識アンケートについて、人文類型・理数類型での昨年度までの「総合的な学習の時間」後と今年度の「総合的な探究の時間」後での結果を比較する。アンケートの設問と結果を次に示す。

設問1 自分の将来にグローバル化の影響はあると思いますか。

設問2 将来、グローバル社会で通用する人材になりたいですか。

影響	R1 2年文理	R2 2年文理
ある	52.8	58.5
ない	5.2	7.3
わからない	42.0	34.2

通用	R1 2年文理	R2 2年文理
ぜひなりたい	19.7	22.8
できればなりたい	70.5	65.8
あまりなりたいと思わない	8.8	11.4
まったくなりたいと思わない	1.0	0.0

表1 グローバル化の影響について
(単位：パーセント%)

表2 グローバル社会で通用する人材について
(単位：パーセント%)

設問1のグローバル化による影響は「ある」と答えた生徒は昨年度より5.7%増加したが、一方で「ない」と答えた生徒も2.1%増加した。また、設問2のグローバル社会で通用する人材についても「ぜひなりたい」「できればなりたい」の昨年度の肯定的意見の合計90.2%から今年度の88.6%に若干減少した。これらは自分の興味・関心が社会のどこかで誰かの役に立つと自分自身で価値を見出せた生徒が大きく増えた一方で、まだ自分の興味・関心と社会との関わりが明確になっていない生徒が若干いるためと考えられる。

2年生の段階では自分自身で価値を見出せる生徒が出てくることを期待して、あえて教員からははたらきかけることを控えていた部分で想定内であった。今後は予定通り、3年生の前半の探究βで自分自身の興味・関心と社会との関わりが明確にする仕掛けを積極的に準備していきたい。

2 GL (グローバルリテラシー) 到達度自己評価について

同様に 全校でのGL (グローバルリテラシー) 到達度自己評価について、人文類型・理数類型での昨年度までの「総合的な学習の時間」後と今年度の「総合的な探究の時間」後での結果を比較する。アンケートの結果を次に示す。

	知識 技能	学ぶ 方法	批・科 思考力	総・未 思考力	語学力	言語 コミュニカ	情報 活用力	多様性	協働性	行動力	健康 体力	豊かな 人間性
R1 2年文理	2.41	2.40	2.65	2.39	2.16	2.38	2.32	2.27	2.63	2.43	2.58	2.30
R2 2年文理	2.47	2.51	2.63	2.29	2.02	2.39	2.46	2.14	2.66	2.60	2.56	2.22

表3 GL (グローバルリテラシー) 到達度自己評価 (単位：なし 5段階評価の平均値)

表3, 4より, 昨年度までの「総合的な学習の時間」後と今年度の「総合的な探究の時間」後での明確な違いは見られなかった。直接的な学問研究, 職業研究と自分の興味・関心を突き詰める探究活動の取り組みで, 短期的な成果の違いは現れなかったと考えられる。

今後は, 高校卒業後の進路を考える直接的な部分と生徒の生涯にわたる長期的な在り方生き方考える部分のバランスを取りながら, 次年度の結果も踏まえて, 生徒にとってより良い指導のあり方を探っていききたい。

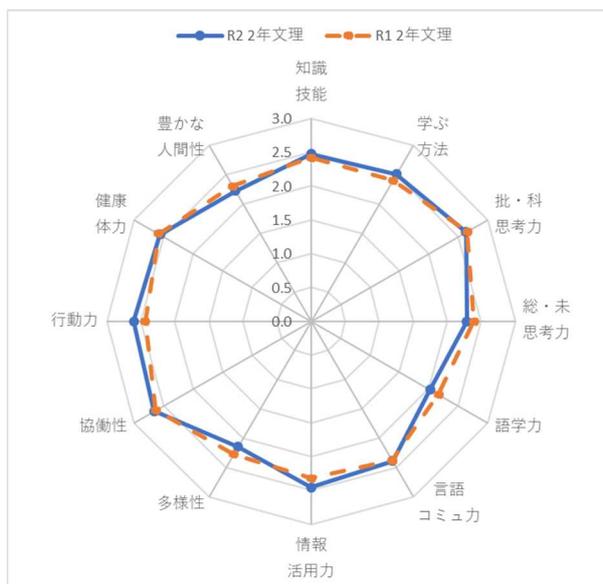
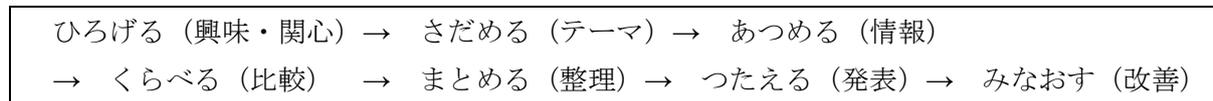


表4 GL到達度バランスの比較

(6) 総括

「総合的な探究の時間」として, 通年で探究活動を実施した1年であった。年度はじめの段階で, 運営する教員の目線合わせの時間を十分に確保し, 価値観の共有を共有できたことが, 円滑な活動の良い要因だったと考えられる。

生徒に対しては, 探究のサイクルを次の通りに示し, 研究活動を進めることができた。次年度も短期間ではあるが, サイクルを回し, 改善を図っていききたい。



「高校でこんなことを考えた・やってみた」を「次の大学・専門・職場でこれをやりたい!」につなげられるように, または「将来, 社会・世界でこれをやる!」, 「だから, 大学・専門・職場でこれを学び, 自分でこんなこともやっていきたい!」につなげられるように, 柔軟で, 創造的な時間を提供していききたい。

また, 2年生のまとめ後の生徒の感想では, 「自分の考えや調べたことが, より多くの人のためになるよう, 発信していきたい。」「今後は研究の企画前後にしっかりアンケートを取って, どれくらい自分の企画で気仙沼愛が変化したかを調べてみたい」等というコメントがあった。ここから社会への貢献意欲や, 地元地域への郷土愛がうかがえる。これは, 本校SGHの理念である, 「地域を超えたリーダー」, 「地域のリーダー」の育成につながっていると考えられる。SGHの5年間の指定中にも新たな挑戦を進めることができたことが良い収穫であった。今後も改善, 発展を図り, 探究活動を一層浸透させていききたい。

4-3 3学年「総合的な学習の時間」

(1) テーマ 『強い志を持って前進する』

(2) 対象学年 3学年229名

(3) 内容

Kプロジェクトの3年目。1年目において自己理解，社会理解，その共通部分である「志」を意識し，社会の一員としてどう生きるかを考えてきた。2年目は志望進路について主体的に考えていくことを目標に据え，自己の進路意識を高めるための実践的な取り組みを行った。具体的にはミニ課題研究やオープンキャンパス，夢ナビへの参加，志望理由書の作成などである。2年生の最後には「学びの中間報告」を行い，これまでの成果と課題を明確にした。完成年度の3年目は「強い志を持って前進する」というテーマで，2年生で思い描いた将来像をより明確にし，他者に伝える表現力を身につけ，自己の進路実現へ向けて強い志を持って前進していくことを目指した。なお，新型コロナウイルス蔓延の影響により，6月からの実施となっている。

期	月	日	曜	実施計画内容		内容の詳細(ねらい)	
				時間	合計		
1	6	11	木	1	4	総学ガイダンス	1年間の総学の流れとこれまでの学びの振り返り【クラス】
		18	木	1		進路探究①	職業理解を深める【クラス】
		25	木	1		進路探究②	仕事選びのポイントについて理解する。【クラス】
		2	木	1		進路探究③	社会人として必要なチーム力について理解する。【クラス】
2	7	17	金	2	10	小論文講演会(2h)	小論文の書き方を外部講師(学研)の講話から学ぶ【全体】
		21	火	2		学びの設計書①②(小論文)	小論文の文章形式についての基礎・基本について確認する【クラス】
		28	火	1		学びの設計書③(小論文)	志望分野の話題、重要なテーマについて図書館で調べる【クラス】
		20	木	1		民間就職・公務員激励会	9月から始まる民間就職試験、公務員試験受験者を学年全体で激励し送り出す【全体】
		26	水	2		学びの設計書④(小論文)	志望分野のテーマ例に則して実際に書いてみる【クラス】
		9	水	2		小論文講演会(2h)	志望理由書の書き方を外部講師(ベネッセ)の講話から学ぶ【全体】
3	10	1	木	1	8	学びの設計書④(志望理由書)	自分の志望について改めて考え、志望理由書の下準備をする【クラス】
		8	木	2		学びの設計書⑤(志望理由書)	講演会をふまえ、志望理由書を作成する【クラス】
		15	木	1		学びの設計書⑥(志望理由書)	完成した志望理由書を相互評価する【クラス】
		23	金	1		課研 I・II 発表会見学	課題研究の見学を通じ、研究を客観視しながら探究心を深める【クラス】
		29	木	2		学びの設計書⑦(面接)	志望理由書をふまえ、面接での回答内容を検討する【クラス】
4	11	5	木	1	6	学びの設計書⑧(面接)	志望理由書作成を通して高めた志を面接練習を通して強固なものとする【クラス】
		11	木	1		学びの設計書⑨(具体的設計)	「働く」ということについての基礎を学ぶ【クラス】
		26	木	1		学びの設計書⑩(具体的設計)	「働く」ということの構造について学ぶ【クラス】
		3	木	1		学びの設計書⑪(具体的設計)	「キャリアデザイン」について学ぶ【クラス】
		10	木	1		志望決定者講演会	講師の方のお話を聴き、社会で夢を実現するために必要なことについて考える。【全体】
		17	木	2		学びの設計書⑫(具体的設計)	働くことと幸福について学ぶ【クラス】
1	1	14	火	1	一般受験者激励会	大学入試共通テスト等の一般受験者を学年全体で激励し送り出す。【全体】	

主な取り組み内容と成果

1. 『学びの設計書』

『学びの設計書』と題し，将来像をさらに深めつつ，思い描いた将来像を的確に表現し伝えられるようになることを目的とした。そのための主な取り組みとして，「小論文の作成」，「志望理由書の完成」，「面接の練習」を行った。

1.1 『小論文の作成』

目的

社会の現状をふまえ，自分の考えを的確に書くことで伝えられることを目的とした。

内容

- ① 小論文の書き方を外部講師(学研)の講話から学ぶ
- ② 小論文の文章形式についての基礎・基本について確認する...資料I
- ③ 志望分野の話題、重要なテーマについて図書館で調べる
- ④ 志望分野のテーマ例に則して実際に書いてみる

成果

資料Iに示したように小論文講演会の内容をふまえた上で、基礎を確認し、その後それぞれの進路先に合わせて社会現象や事例等について知識・理解を深めることで小論文作成に望んだ。また、文章を通して的確に自分の考えを他者に伝えるために、原稿用紙の使い方など基本的な文章の書き方をクラスごとに担任と副担任で協力しながら指導にあたった。ワークシートや完成した小論文を見ると、概ね生徒の持つ社会への見方や各分野における知識の深まりが見られた。

3年総合的学習の時間 7/21(水) 第4回 小論文の基礎・基本について確認する 年 組 番 名前

STEP1 小論文講演会での学習事項を確認しよう。

1. ① 目的を書く
基本構成：序論(②) = (⑤) に関する一般的な傾向、状況、風潮、体勢、異体勢、自分の立場、問題提起
→ (⑥))ve(⑥))で考え、自分の立ち位置を決める
本論(③) = 意見の(⑥))を示し、(⑦))を挙げる
結論(④) = 感想にならないように(⑥))的に(⑥))を述べる

2. ① 的に考える
<パターン1> 社会の中の出来事や問題について述べる場合
→ (⑥))ve(⑥))で考え、自分の立ち位置を決める
→ どの問題が生じた(⑥))・(⑥))と(⑥))を答え、結論には(⑦))まで盛り込む
<パターン2> 人・物事についてのあり方・意義・役割について述べる場合
→ (課題文がある場合は)筆者が正論を述べている場合が多いので(⑥))
→ (⑥))や(⑥))を使って考えることも多い

3. ① (⑥))に結びつける(⑥))する
<資料の構成>
A: (⑥))・(⑥))・(⑥))・(⑥))
B: 設問(しかし、だが) → Aに答える(⑥))
C: 筆者の「意見」の(⑥))・(⑥))・(⑥))
⇒上記の構成を参考に、本論を書く際には筆者の(⑥))しながら書く

資料I 「小論文の基礎・基本について確認する」



小論文講演会の様子

1.2 『志望理由書』

目的

昨年度の志望理由書作成の経験をもとに、より精度の上げた志望理由書作成を目指しながら、明確に自分の将来像を書き、伝えられるようにする。

内容

- ① 志望理由書の書き方を外部講師（ベネッセ）の講話から学ぶ
- ② 自分の志望について改めて考え、志望理由書の下準備をする
- ③ 講演会をふまえ、志望理由書を作成する
- ④ 完成した志望理由書を相互評価する...資料II

成果

資料IIに示したように、外部講師の講話をふまえながらポイントを整理した上で具体性を持たせながら志望理由書の作成に取り組むよう指導を行った。小論文同様に担当教員2名により志望理由書の添削を行い、さらに各クラスから抽出した志望理由書を学年全体で共有し、どの点が評価に値するのか、どの点が改善点にあたるのか等について考えさせることによって自分のものと比較させ、より客観的な視点を持ちながら志望理由書の作成に取り組ませることができた。

STEP2 別編資料を参考に、志望理由書を書いてみよう。※敬称は、800字以内

私	は	持	来	、	高	校	に	入	学	し	、	進	路	を	決	め	、	志	望	理	由	書	を	作	成	す	る	こ	と	に	努	め	て	い	く	所	属	の	学	生	と	共	有	し	、	ど	の	点	が	評	価	に	値	す	る	の	か	、	ど	の	点	が	改	善	点	に	あ	た	る	の	か	等	に	つ	い	て	考	え	さ	せ	る	こ	と	に	よ	っ	て	自	分	の	も	の	と	比	較	さ	せ	、	よ	り	客	観	的	な	視	点	を	持	ち	な	が	ら	志	望	理	由	書	の	作	成	に	取	り	組	ま	せ	る	こ	と	が	で	き	た	。
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

私	は	持	来	、	高	校	に	入	学	し	、	進	路	を	決	め	、	志	望	理	由	書	を	作	成	す	る	こ	と	に	努	め	て	い	く	所	属	の	学	生	と	共	有	し	、	ど	の	点	が	評	価	に	値	す	る	の	か	、	ど	の	点	が	改	善	点	に	あ	た	る	の	か	等	に	つ	い	て	考	え	さ	せ	る	こ	と	に	よ	っ	て	自	分	の	も	の	と	比	較	さ	せ	、	よ	り	客	観	的	な	視	点	を	持	ち	な	が	ら	志	望	理	由	書	の	作	成	に	取	り	組	ま	せ	る	こ	と	が	で	き	た	。
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

資料II 「完成した志望理由書を相互評価する」

4-4 3年間を見通した進路指導

(1) 課題研究の成果を生かした総合型選抜・学校推薦型選抜の利用

1年次の「地域社会研究」では、地域の海について5つの分野（産業・人間・文化・自然・防災）を設定し、生徒自ら地域の多様な課題を理解し、科学的探求の手法を身に付け、批判的・科学的思考力やプレゼンテーション能力を養ってきた。その上で2年次ではグループや個人による「課題研究」に取り組み、自らの興味・関心に応じた研究活動を行ってきた。特に「課題研究」では、自ら進もうと考えている進路に近いものを研究する生徒もいれば、「地域社会研究」を通してより問題意識を持った事柄に着目し、それらについて深めていこうとする生徒も多い。その中で我々が最も重視しなければならないことが、「課題に対してどのように取り組んだのか」という過程についてである。もちろん、将来的に学びを深めていきたいと考える課題を2年次から始めることができれば、より具体的な目標や何を学ばなければならないのかについて知ることができ、自らの進路達成に近づくことは間違いない。しかし、どんな課題であれ、問題意識を持ち、課題の設定と解決に向けた案の提示に必要な知識や技能を身に付け、情報を収集・整理し、自らの仮説について検証していく過程が大切であり、生徒個人がそこで何を学び、何を得たのかを実感することが重要である。今年度、総合型選抜・学校推薦型選抜に挑戦し合格を勝ち得た多くの生徒は、自身の研究内容を前面に出してアピールできた生徒はもちろん、設定した課題に対してどのように向き合い、どんな手順で解決に導こうとしたのかなど、自身の言葉で表現でき、この課題研究での学びに意義や価値を見いだすことができた生徒が多かったように思う。もちろん、それらの生徒は進路達成のための手段としてのみ課題研究を行ったのではなく、純粋な探究心を持ち合わせていたことにも言及しておきたい。主体的に取り組もうとすることで、自身の課題に対する興味・関心が高まり、「どうすればいいのか」をしっかりと考えることができるようになった。今後は、多くの生徒が課題研究の成果を感じ、それらも含めた進路選択ができるようサポートしていく。

(2) 協働的なグループ研究のあり方について

創造類型の「課題研究」と同様に、人文・理数類型においても総合的な探求の時間の中で「ミニ課題研究」が行われている。こちらについては、個人研究よりもグループ研究が多数を占め、協働的に研究活動が行われている。グループに所属するそれぞれの生徒が自身の役割を果たし、協力しながら研究を進めた班が多かった。しかし、主体的に取り組む生徒が多い一方で、グループ内での互いの役割について共通理解が構築できず、研究そのものが滞ってしまうグループもあった。そのようなグループでは、テーマの設定段階で意見がまとまらず、互いに納得感を持って課題を取り上げられなかった点や、リーダーシップを発揮する生徒が班内におらず、班員全員が受動的にスタートしてしまった点等が特徴としてあげられる。1年次の地域社会研究から段階的に準備してきているが、課題研究に取り組む1人1人が、その意義や有用性を考え、しっかりと取り組めるようさらなる指導の工夫が必要だと感じている。

(3) 3年間を見通した志教育について

総合的な探求の時間を中心に、3年間を通して連動性を持たせながら志教育を進めている。1学年は「社会の一員としてどう生きるかを考える」、2学年は「『志望』進路を思い描く」、3学年では「『強い志』を持って前進する」をテーマに、文理選択や志望理由書と単発的に行うのではな

く、3年間でそれぞれの進路目標、将来の計画を考えさせ、実行できる準備を行っている。この取り組みは総合的な探求の時間のみならず、学校行事、課題研究、LHR、普段の授業と横断的に関わらせることによって、自分のあるべき姿と志を主体的に見出す取り組みとして学校全体で取り組んでいる。各学年の実情に応じて毎年見直しを行い、1時間の取り組みで多くを感じ、学べるよう工夫してきた。今後は、(1)のような課題に取り組みながらも、自身の進路、人生を考えさせる活動として継続していきたい。

4-5 類型選択指導

(1) 目的

本校では2学年より類型に分かれたクラス編成に基づいて授業が展開される。平成28年度入学生からは、人文類型、理数類型に加え、文理の枠を超えた探究的な学習活動に重点をおく創造類型が設置された。

それをふまえ、この類型選択指導は、自己の将来や特性について十分に考える機会を設けることで、次年度へ向けて適切な類型選択ができるようにすることを目的として行われるものである。

(2) 対象学年

1学年

(3) 概要

これからの時代における文理融合の思考力や他者と関わる力の重要性を説明した。さらに創造類型での研究活動によって身につく資質・能力がこれからの社会でどのような形で生かされるのかをイメージさせ、その有意性を生徒に伝えてきた。

(4) 具体的内容

新型コロナウイルス感染拡大防止による臨時休校措置の影響により、今年度は例年と時期をずらしての指導となった。今年度の1学年の生徒の類型選択が確定するまでの大まかな流れは次のとおりである。

- 7月6日 : 類型選択ガイダンス (各類型の特徴、選択後の進路、科目選択の際の留意点など)
- 7月16日 : 類型選択調査第1次締め切り
- 8月上旬 : 類型選択に関する担任との面談
- 8月下旬 : 三者面談での生徒、保護者との面談
- 10月23日 : 課題研究Ⅰ中間発表会・課題研究Ⅱ最終発表会見学
- 11月2日 : 類型選択調査第2次締め切り (最終決定)

(5) 結果と考察

最終調査では、人文類型103名、理数類型88名、創造類型36名となり、バランスがとれたクラス編成を行う準備を整えることができた。

(6) 総括

生徒が最適な類型選択を行うためには、前述の通り、「将来どのような人間になりたいのか」「いま求められている能力はどのようなものなのか」ということを深く考える必要がある。そのためにも、「総合的な探究の時間」との関連づけを工夫し、キャリア教育の一環としての指導をさらに深めていく必要がある。

4-6 心の教育

(1) 目的

学級活動、学校行事、生徒会活動、部活動等での様々な活動や体験を通じて、人と関わり、他者への関心や共感を高め、学級づくりや学校づくりへ自主的に参画することで、自己と集団の望ましい人間関係を育成する。また、自分の役割を自覚しそれを果たすことで、責任感や使命感を育み、地域や社会に貢献していける人材を育成する。

(2) 実施概要

①学級活動（LHR）

- ・「校外清掃ボランティア」2学年：9月28日（月）7校時，1学年：10月19日（月）7校時

数年前の生徒総会で決定して以降、毎年実施している。クラスごとにコースを設定し、学校周辺のゴミ拾いなどを行う。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため授業時数が減ったため、3学年の活動は実施することができなかったが、1・2学年では例年通り実施することができた。今年度から、「地域防災について知る」ことも目的に加え、校外に出た際に、本校で作成している防災手帳を利用して、コースごとに津波浸水域のポイントを確認する活動も行った。



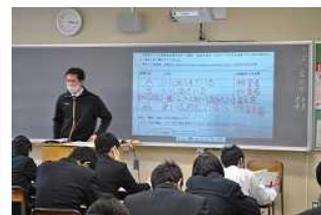
田中前コースの生徒のゴミ拾いの様子（2年生）

- ・「いじめについて考える」

1回目：10月26日（月），2回目：12月21日（月），3回目：2月8日（月）

平成29年度より、本校の「学校いじめ防止基本方針」において、年に2回いじめについて考える話し合い活動を実施することとしており、いじめのない学校を実現するために何ができるかということを考える場としている。今年度はさらに1回増やして実施することとした。

1回目は、日常生活やSNS上における友人との関わり方において、意図せず他者を傷つけてしまうことがある、ということについて自分や他者の経験等を踏まえ、どういったことに気をつけていくべきかを話し合った。自分が意図していなくても、受け手に苦痛を感じさせたり追い込んでしまったりすることがあるということについて知るとともに、多くの生徒が自分のこれまでの言動やSNS上での発信内容について



1回目の活動の様子（左：1年生，右：2年生）生徒は悩みながらも真剣に考え取り組んでいた。

て振り返り、点検することができた。2回目は、いじめに直接加担しない第三者である「傍観者」と「仲裁者」について学び、自分がいじめの現場に出遭ったとき、いじめを止めるためにどのような関わり方ができるかについて話し合った。「仲裁者」として直接いじめの仲裁に入ることは難しいにしても、他の第三者や大人への関わりや協力を依頼するなど、直接的に関わることだけが「仲裁者」の役割ではないことに気づけた生徒が多くいた。3回目は、1, 2回目の話し合い活動を踏まえて、いじめ防止のためのポスターを作成した。

各回とも実施にあたって事前に職員間での打ち合わせを行った。授業を展開する担任にとっては、「いじめ」という題材の重みをしっかりと伝えた上で活発な話し合い活動を実施しなければならず、そこに相反する難しさがあるため、指導案や資料の内容とその目的などについて詳細な打ち合わせを行い、授業の導入の仕方や伝え方、グループ分けの仕方など、配慮すべき点や注意すべき点をしっかりと共有して授業に臨んでもらった。さらに、現在の「いじめ防止対策推進法」と「学校いじめ防止基本方針」の要点やいじめと疑われる事案の発生時の対応を確認することで、職員の研修の機会とすることもできた。

実施後の生徒のアンケートでは、こうした話し合い活動を肯定的に捉えている意見がほとんどであった。いじめが悪いことであるという認識はあるものの、気づかないうちに自分が加害者になっている可能性に気づき、実際にいじめを目前にしたときに自分にどんなことができるか、ということ进行深入考える機会となった。

学校評価アンケート（生徒）の「いじめの早期発見への態勢がとられている」肯定的評価
単位(%)

年度	H29	H30	R1	R2	
				前期	後期
「そうである」と「大体そうである」の合計の割合	70.2	73.9	71.0	75.0	81.5

いじめの未然発見のために、本校では「学校生活アンケート」を隔月で実施してきたが今年度から Classi で実施することで回答する生徒と集計する教員の双方の負担を軽減できることになったため、毎月実施することとした。「いじめを見聞きした」という項目に回答する生徒が毎月1～2名程度おり、担任が聴き取りを行うと、「いじめとは言い切れないかもしれないが」や「ちょっと心配だったんで」といった、予兆や可能性を感じ取って教員に伝えてくれる生徒がほとんどであった。LHRで学んだことを実践してくれている生徒のおかげもあり、「いじめ」の予兆となるような動きや、人間関係上のトラブルなど、大きな問題に発展する前に教員側で情報をキャッチすることができるようになり、いじめ未然防止の一翼を担っていると考えられる。

こうした取り組みを継続してきたことで、学校評価アンケートにおける「いじめの早期発見への態勢がとられている」に肯定的な回答をした生徒の割合が徐々に増加してきている。次年度以降は、いじめについて考えるLHRを、3年間を見通した形で計画をたてて実施していきたい。

②学校行事

- ・「気高祭」8月27日（木）28日（金）
- ・「体育祭」10月15日（木）16日（金）

新型コロナウイルス感染症のため、様々な行事やイベントが中止になる中、授業だけでなく部活動や学校行事、進路行事等、生徒にとっても学びの場や心待ちにしていた行事が中止を余儀なくされてきた。そうした中であって、6月の学校再開時に生徒会執行部と生徒安全部教員とで今年度の学校行事の持ち方について話し合う機会をもった。生徒の要望も踏まえ、3大行事として実施してきた行事のうち、球技大会と運動祭を1つにまとめて「体育祭」として実施し、「気高祭」と「体育祭」の2つを、可能な範囲で実施することとなった。各実行委員と担当教員が「今できること」について前向きに検討を重ね、体育館に全校生徒が入れない状況を打開する策として、演奏や競技を教室に中継するなど、新たな試みも取り入れながら安全に実施することができた。生徒会執行部生徒と実行委員および各担当教員が、「こうしたい」という思いをもって、今の状況の中でできることを探りながら、何度も集まって話し合いを重ねることで、新しい学校行事をつくりあげてくれた。



左：気高祭での吹奏楽部の発表。感染症対策を講じて演奏をした。右：その様子を教室に中継したものを鑑賞する1・2年生。3年生は体育館で鑑賞した。



左：体育館入口で手指消毒を呼び掛ける実行委員。体育館での応援は当該クラスのみとし、競技の様子は教室にライブ配信した。右：閉会行事の表彰式の様子。新型コロナ対応のため体育館に全校生徒が集まれないため、屋外で実施した。令和2年度を通じて初めて全校生徒が一堂に会する機会となった。

③生徒会活動

- ・「九州豪雨への募金活動」7月～8月

平成23年3月11日に発生した東日本大震災時、今の高校生は、小学1～3年生への進級を迎えようとしている時期であった。震災から10年が経とうとしている中、生徒たちの震災当時の記憶は、鮮明に覚えている部分と徐々に曖昧になっている部分とが明確に分かれてきており、よく言えば震災を乗り越え、穿った見方をすれば震災が風化されつつある、ということである。そうした中であって、7月に発生した九州豪雨での現地の被災の様子や、被災後の避難所での生活などをニュース等を通じて目の当たりにしたことで、東日本大震災当時の苦しかった状況と全国からの支援の有り難さを強く思い出し、生徒会執行部から「自分たちにできる支援を行いたい」という話が上がり募金活動を行うこととなった。PTA会長とも連携することで保護者にも募金協力を依頼し、短期間での募金活動ではあったが集まった募金総額は124,280円となり、農場など学校自体が多くの被害を受けた熊本県立芦北高等学校に寄付をした。

・「より良い学校生活のために」

生徒の学校生活を改善するために、今年度生徒会執行部から提案されて実行に移された議案が2つある。いずれも服装に関するもので、1つ目が「夏服の軽装許可」である。本県の公立高校では普通教室にエアコンが設置されておらず、近年続いている異常気象による熱暑に加え、今年度は新型コロナウイルス感染症対策の一環として校内では原則マスク着用としているため、熱中症のリスクが例年以上に高まることが予想された。そのため、夏期間においてのみ、授業中に制服からポロシャツ等の軽装に着替えることについて、一定のルールを設けることで実施したいという申し出があり、職員会議で検討した結果、実施する運びとなった。

もう1つは、「休日のジャージ登下校」についてである。本校の校則では、休日も含め必ず制服で登下校すると定めているが、以前から「休日のジャージ登下校」を認めて欲しいという要望が生徒総会に挙げられ、話し合いがもたれてきた。11月に実施した今年度の秋季生徒総会でも議題にあがり、賛否含めて闊達な議論がなされ、生徒会として改めて「休日のジャージ登下校」を要望するということになった。その後、執行部生徒と各部活動の部長を中心に話し合いを重ねてルールを設け、学校に対して要望書が提出された。その後の職員会議を経て冬季休業から実施することとなった。

生徒会執行部生徒は、いずれの議案についても自分たちの要望を許可してもらうために、「何が必要か」「何をすればよいか」という視点で、前向きに話し合いを重ねて原案を作成した。実施後は、全校生徒も執行部の頑張りに感謝をもちながら、気高生であることへの責任と誇りを持って学校生活を送っている様子がうかがえる。生徒会担当教員も、答えを与え過ぎないように、適度な距離をとりつつも、親身になって執行部生徒を支援してくれた。執行部生徒にとっては、学校づくりに参画しているという使命感と責任感を醸成することができ、全校生徒にとっても学校づくりや学級づくりのために声を上げることの大切さを感じることができる貴重な機会となったと考える。

④その他

・「気高防護服プロジェクト」7月29日（水）

社会福祉部が中心となって全校に呼び掛けて実施したこのプロジェクトは、新型コロナウイルス感染症罹患者の治療に追われる医療現場において不足している防護服を、ビニール袋を利用して製作し、医療現場に届けるものである。市内で先駆けてこの簡易防護服の製作を行っていた「気仙沼つばき会」の方々にご協力をいただき、当日は講師として実演していただきながら生徒、教員有志で製作にあたった。急な呼び掛けにも関わらず、100名を超える生徒が集まり、予定していた会場に収まりきらなかったため、急遽会場を2カ所に分けて実施することとなった。その後も、社会福祉部が余った資材で防護服を作製し続けることで、250着以上の防護服を医療現場に届けることができた。



左：製作の様子。集まった生徒が多過ぎたため、会場を2つに分けて実施した。みな真剣に製作していた。右：完成した簡易防護服。「気仙沼つばき会」の方に医療現場へ届けていただく。

(3) 結果

誰かのために何かしたい、何かできないか、という「志」や「思い」は、目に見える形で数値化できるものではないが、本校にはそうした「志」を持った生徒が多くいることに間違いはない。まずは生徒のこうした「志」を表現できる場や機会を提供することが我々の役目であり、今年度はそうした機会を一定程度設けることができたと考える。特に、生徒会執行部生徒がより良い学校を目指して尽力する姿勢は、全校生徒にも自発的な関わりを促す良いきっかけとなっている。今後は、これまでの活動を継続することで生徒のさらなる「志」を育み、生徒自身がその「志」を自らの行動として表現していけるような後押しをしていきたい。

地域連携

5 地域連携

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、これまで行われていた地域連携に関する行事等について、実施を断念せざるを得ないものが多くなった。このような状況の中、関係者の尽力により実施されたものを、以下に記す。

【気仙沼市との連携】

5-1 気仙沼の高校生マイプロジェクトアワードへの参加

- (1) 主 催：気仙沼市（企画・運営：一般社団法人まるオフィス）
共 催：気仙沼市教育委員会
後 援：宮城県教育委員会
協 力：気仙沼の高校生マイプロジェクトアワード実行委員会
- (2) 参加者：1年生1名，2年生11名
- (3) 日 時：10月12日（月）～11月9日（月） 募集期間
12月上旬～ 高校生を応援したい大人たちによるサポート期間
12月22日（日） 発表会（会場：気仙沼市まち・ひと・しごと交流プラザ）
- (4) 内 容：「気仙沼の高校生マイプロジェクトアワード2020」は「気仙沼市担い手育成支援事業」のひとつであり、気仙沼市内の高校生が、地域課題を解決するためのプロジェクトを大人の協力者（伴走者）とともに作成・実行し、その成果を市長や地域の方々に発表するプログラムである。令和2年3月末には、本校生2名が今年、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により活動スタートが例年より3ヶ月遅れとなったが、プロジェクト実行者として12名の生徒が参加した。市長賞を受賞した1名の他、本校生2名が2月に行われた「高校生マイプロジェクトアワード」宮城県・秋田県 Summit に出場し、「幼児の防災意識を高めるには」を発表した女子生徒1名が全国大会に出場することとなった。課題解決型学習の実践の場としてとても有益なイベントであり、今後も積極的な参加を促すなど活用していきたい。

【小中学校との連携】

5-2 気仙沼中学校生徒への探究活動支援

- (1) 日 時：令和2年7月9日（木）
- (2) 場 所：気仙沼中学校（本校生徒はオンライン参加）
- (3) 参加者：本校3年生2名 気仙沼中学校生徒
- (4) 内 容：昨年度の「課題研究Ⅰ」で優秀賞となった生徒のうち2名が、気仙沼中学校とビデオ通信システム「Zoom」で結び、探究型学習の授業に参加し、それぞれが「課題研究Ⅰ」で手がけた研究について発表し、テーマ設定の方法や手法など、探究の進め方についてもアドバイスをを行った。



5-3 海洋教育こどもサミット

- (1) 日 時：令和2年11月27日（金） 13:00～16:30
- (2) 場 所：東京大学，東北各地の小中高校（オンライン開催）
- (3) 参加者：本校2年生3名（発表）本校2年生2名（開会行事司会）
市内小中学校（海洋教育推進校），東北各地の小中高校
- (4) 内 容：海洋教育をESDの軸として取り組んでいる小中高が一堂に会するサミットで，気仙沼市や岩手県洋野町で行われており，東北各県で取り組まれる海洋教育の成果を児童・生徒が主体となり発表するものである。平成28年の第1回から本校生が研究成果の発表，サミットの司会や小中学校の話し合いのファシリテーターとして参加している。



5-4 気仙沼市防災フォーラム

- (1) 日 時：令和3年1月26日（火） 13:30～15:30
- (2) 場 所：気仙沼市役所ワン・テン庁舎，気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館，鹿折公民館，中央公民館，気仙沼市内小中高校（オンライン開催）
- (3) 参加者：本校2年生1名 市内中学校教職員及び代表生徒 一般市民
- (4) 内 容：気仙沼市と市教育委員会が主催，東北大学災害科学国際研究所と気仙沼ESD/RCE推進委員会が共催しているフォーラム。今年度はオンライン開催となったが2年生1名の生徒が参加した。

5-5 教職員間連携

○ 本校での研修会への参加

本校で研修会や発表会を実施する際，市内小中学校へも案内を送付し，参加を促してきた。詳細は「2-3 授業改善の体制づくり・教員研修」及び「3-1 英語科の授業の充実」を参照。

【地域の人材との交流】

5-6 フィールドワーク・アドバイザーの委嘱

(1) ねらい

学校が設定しているフィールドワーク以外でも，自主的に課題研究に関する情報を関係者から得ようとする生徒のために，フィールドワーク・アドバイザーを委嘱し，地元企業や役所の方を紹介してもらうと同時に，探究活動への助言をもらう。

(2) アドバイザー

認定NPO法人「底上げ」理事 成宮崇史 氏

平成23年に東日本大震災のボランティアとして宮城県気仙沼市に入り，そのままNPO法人「底上げ」を立ち上げ移住する。地域に根付いて活動を展開していく中で，気仙沼，南三陸の高校生が地域課題に対して主体的なプロジェクトの企画・運営をサポートしている。

一般社団法人「まるオフィス」代表理事 加藤拓馬 氏

東日本大震災を機に気仙沼に移住し、平成24年まちづくりサークル「からくわ丸」を設立。平成25～28年に気仙沼市地域支援員として気仙沼市の様々な事業を委託され、人材育成プログラムや移住者コーディネートを展開。平成27年一般社団法人まるオフィスを起業。

(3) 内容

放課後の時間帯に学校にお越しいただき、以下の内容で相談会を実施

- ①課題研究において、必要とする情報が得られるフィールドワーク先を紹介
- ②研究成果の広報活動や実践に対する助言や協力
- ③県内外のNPO法人や企業などの連携・活用方法のアドバイス

相談会実施日

- ①10月19日(月) ②10月27日(火) ③ 6月27日(木)
- ④11月26日(木) ⑤12月 8日(火) ⑥12月22日(火)
- ⑦ 1月26日(火)

①～⑥は16:10～17:30で実施。⑦は13:55～15:35で実施。

(4) 成果

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、相談会の開始時期が10月からとなった。これまで同様「課題研究Ⅰ」に取り組む2年創造類型の生徒が中心であったが、1年生が例年以上に参加する姿が見られた。また、アドバイザーには各発表会にも参加していただき、生徒の発表に対し有益な助言をいただくなど、1年を通して生徒の研究活動に寄与していただいた。

国内交流

6 国内交流

6-1 SGHにかかわる発表

今年度は9つの発表会や研修会に45名が発表者、または見学者として参加した。コロナ禍の影響もあり、全国、全県で発表の機会は減少したが、オンライン発表等の工夫もあり、可能な限り参加した。こうした機会を通して、生徒たちは多くの気づきを得て、研究のさらなる深化につながった。次年度以降も積極的な参加を促していきたい。

表6-1 参加した発表会や研修会

月	日	発表会・研修会	場所	参加数	内容
11	7	仙台三高グローバルサイエンスフェスタ	宮城県仙台第三高等学校 オンライン開催	2	日本語での動画による研究発表（ポスター・口頭）および県内SSH・SGH校との交流
11	27	第7回海洋教育こどもサミット in 気仙沼	気仙沼市・洋野町 オンライン開催	5	「海洋教育」の研究について発表会司会・ポスターセッション
12	20	2020年度SGH全国高校生フォーラム	東京国際フォーラム	3	英語でのポスター発表、英語でのディスカッション、全国SGH校の発表見学
12	20	気仙沼の高校生マイプロジェクトアワード2020	まち・ひと・しごと交流プラザ	12	地方創生に向けたアクションプランを实践・発表
1	4～25	令和2年度みやぎのこども未来博～学びの術～	宮城県総合教育センター	5	協働ワークショップ、ポスター発表
1	9	「ダメだっちゃ温暖化」宮城県民会議	せんだいメディアテーク	1	地球環境問題に関する研究についてポスター発表
1	26	第5回気仙沼市防災フォーラム	気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館	2	防災研究の成果を発表、交流および意見交換
2	4～6	黎明サイエンスフェスティバル	宮城県古川黎明高等学校	12	研究内容について口頭発表、ポスター発表
2	11	第8回全国海洋教育サミット	オンライン開催	3	海洋教育を实践する小・中・高校生と意見交換

また、16のコンテストに25グループ、37名が参加した。昨年度から3年生創造類型「課題研究Ⅱ」の研究活動にもあるように、全員が外部コンテストに応募することを継続して実践した。限られた時間ではあるが、生徒の活動を校外に披露する機会を多く持つことは、生徒の成長を促すことができたと考えられる。

表6-2 生徒が応募したコンテスト一覧

名称	主催	応募グループ数	備考
高校生「ものづくり・ことづくり」 プランコンテスト	静岡理工科大学	1	
第8回 わたし遺産	三井住友信託銀行	1	
全国高校生・留学生作文コンクール	拓殖大学	1	
全国学芸サイエンスコンクール	旺文社	1	作文／小論文部門 高校生の部 入選
高校生論文コンテスト 2020	京都先端科学大学	2	
地域伝承文化に学ぶコンテスト	國學院大學 高校生新聞社	3	
36℃の言葉	日本福祉大学, 朝日新聞社	1	
高校生地球環境論文賞	中央大学	2	
NRI 学生小論文コンテスト	野村総研	2	
田舎力甲子園	福知山公立大学	2	
高校生小論文コンクール 2020	生涯学習振興財団	2	
言の葉大賞	言の葉協会	1	
高校生小論文・スピーチコンテスト	多摩大学	1	スピーチ部門 最優秀賞
環境甲子園	NPO 法人 環境会議所 東北	1	
全国中学高校 Web コンテスト	学校インターネット 教育推進協会	2	
SDGs-Web マルシェ	尚綱学院大学	2	高校生研究部門 優秀賞 (生徒2名での共同研究)

6-2 震災交流

(1) 目的

ダイレクターニング・アプローチの一つとして、県外の高校生を本校に招き直接交流することで、発信力を含めたコミュニケーション力を高めるとともに、地域社会に対する眼を育む。具体的には、生徒会執行部の生徒を中心に、東日本大震災直後の気仙沼市および本校における学校生活の実状や、その後の復興の過程、および地域社会研究を通して学んだ地域産業の課題と復興の現状についてまとめ、発表する。それによって、地域の良さや強みを多面的に理解し発信する力を養うことができる。また、被災地支援や防災について他の地域の高校生と考えることで、多様性や未来思考力を身につけるとともに、積極的にコミュニケーションをとる力も育むことができ、プログラムを効果的に進めるための一助となると考える。

(2) 概要

今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、ほとんどの交流会が中止となったため、実施できたのは1回のみであった。

月	日	時間	交流相手	対象生徒	内容	場所
1	6	16:00～ 18:00	北海道滝川高等学校 (生徒8名)	生徒会執行部 (13名)	両校のSSH, SGHの取組や震災についてのPPT発表, 交流会	気仙沼高校

(3) 具体的内容

これまでの交流会は、生徒会執行部が中心となって企画し、震災当時の本校や気仙沼市の様子を伝え、お互いの学校の特色を話し合い、学校をより良くするための情報交換などを行ってきた。現執行部としては、1月6日(水)の滝川高校との交流会が今年度行った唯一の交流会であったため、多少手間取る部分もあったが、それぞれの学校生活の課題や、気仙沼と北海道の違いなどについて話し合うことができ、貴重な経験となった。終了後には反省会をもち、上手くいった部分や上手くいかなかった部分などの意見を出し合い、上手くいかなかった部分については次回の交流会で改善できるように、今後準備を進めていくこととなった。



交流会のグループワークでお互いの学校の特色について話し合う様子

(4) 結果と考察

震災交流は、これまでも執行部生徒が中心となって対応してきたが、初めて会う人とのようにコミュニケーションをとればよいかということを、失敗を繰り返しながら学んでいくことのできる貴重な機会であった。また、震災当時の学校の様子などは、自分自身が経験したわけではないが、卒業した執行部生徒が代々伝え続けてきた資料をもとに、学校代表として伝え継いでいかなければならない、という責任を強くすることができ、気仙沼高校、ひいては気仙沼の代表として何を伝えるべきかを深く考えるきっかけとなり、参加生徒にとっては絶好の成長の機会となったのではないかと考える。

防災教育

7 防災教育

7-1 春季防災訓練

(1) 目的

- ①火災発生に備えた消火活動のスキルを高める。
- ②本校の防災体制について理解を深める。
- ③放課後の発災への対応を訓練する。

(2) 内容

日時 7月6日(月)

14:00～14:45 消火訓練(消火器・消火栓の使い方)

15:00～15:45 防災研修

防災マニュアルの説明・避難訓練ガイダンス

16:00～16:30 避難訓練

対象 教職員と希望生徒

想定 放課後の時間帯に宮城県沖を震源とするマグニチュード7.4の地震が発生。
この地震による津波の心配なし。火災の発生なし。

(3) 評価

コロナウイルス感染防止の観点から、今年度の訓練は、教職員中心で実施した。消火栓の使用方法や警報パネルの見方は、教職員としてぜひ知っておくべきことであり、確認できたことは有意義であった。また、避難訓練は、放課後の時間帯の発災を想定し、生徒の安否確認と避難誘導を班ごとの役割で行った。訓練実施後のアンケートでは、教職員から様々な意見が寄せられた。アンケートの内容は、全職員で共有し秋季訓練に向けた改善につなげた。



7-2 職員防災研修

(1) 目的

- ①本校の防災体制を理解する。
- ②災害時の役割を理解する。
- ③本校の防災教育のねらいを理解する。

(2) 内容

日時 7月6日(月)

15:00～15:45 防災マニュアルの説明・避難訓練ガイダンス

(3) 評価

今年度は、春季防災訓練に併せて実施した。本校の防災マニュアルを使用しながら、地域の特性、防災体制、災害時の対応、防災教育について確認した。ここ数年、災害への組織的対応に力点を置いているが、マニュアルを訓練に対応させながら確認し、改善していくことが求められる。



7-3 秋季防災訓練

(1) 目的

- ①本校の防災体制に基づく、放課後の発災への組織的対応を訓練する。
- ②春季防災訓練のアンケートをもとに以下の状況に対応する訓練を行う。
 - ・放送設備故障，管理職不在の状況に対応する。
 - ・出火場所に応じた避難経路を確保し，避難行動をとる。
 - ・負傷者の搬送に対応する。



(2) 内容

日時 11月19日(木) 14:00~15:40

対象 教職員，生徒(校舎内にいる生徒任意参加)

14:00~ 避難訓練ガイダンス・班毎打ち合わせ

15:00~15:40 避難訓練

想定 放課後の時間帯に宮城県沖を震源とする地震が発生。地震直後より校内の放送設備故障。その後，校内某所より出火。管理職不在を想定。

(3) 評価

訓練の中に様々な想定を盛り込み実施したが，班ごとに役割を決めて組織的に対応することができた。特に放送設備が故障した想定は，情報伝達の重要性を再認識する機会となった。情報伝達に際しては，トランシーバー，メガホンなどを活用した。今回もコロナウイルス感染防止の観点から教職員中心の訓練で実施したが，次年度は，この成果を生かし生徒も含めた総合訓練に取り組む。

7-4 防災手帳の発行

(1) 目的 生徒及び家庭の防災意識を高める。

- (2) 内容 ①わたし・家族の情報 ②避難場所・家族の決め事 ③非常持ち出し袋
④緊急連絡先 ⑤気仙沼西地区津波避難計画・ハザードマップ
⑥災害時の避難について ⑦備えあれば憂いなし(チェックリスト)
⑧災害に役立つスマートフォン情報

(3) 評価

今年度，3年前に発行した防災手帳の改訂版を発行し，全生徒に配布した。この手帳は，家庭での防災への取り組みの促進を企図するものである。また，学校周辺のハザードマップを掲載することで，登下校時の防災意識を高めるねらいもある。この手帳を活用し，今年度は，ハザードマップ研修を実施した。

7-5 ハザードマップ研修

(1) 目的 学校周辺の東日本大震災津波浸水域を知る。

(2) 内容日時 1年生 10月19日(月) 7校時

2年生 9月29日(火) 7校時

防災手帳のハザードマップをもとにして、クラスごとに学校周辺の東日本大震災時の津波浸水域を実際に歩きながら確認する。



(3) 評価

現在の生徒たちは、震災時幼かったため、その記憶も不明瞭であり、個人差もある。津波浸水域を実際に確認することは、津波災害への備えの意識を高める上で有効である。この取り組みを次年度以降も続けていきたい。

7-6 生活防災委員の活動

(1) 目的

① 本校における防災組織の中核を担う生徒組織の育成 ② チーム防災のリーダーの育成

(2) 内容

- ・生徒への校内避難経路の説明
- ・BRT 駅周辺の災害マップづくり
- ・市内火災予防協会主催の防災川柳への応募

(3) 評価

昨年は、防災訓練の補助を中心に活動範囲を広げたが、今年度は、コロナウイルス感染予防の観点から防災訓練の規模を縮小したため、活動は限定的となった。その中で、本校通学生徒の3割が利用するBRTの駅周辺の防災マップを作成したことは、登下校時の災害発生に備える上で有意義な取り組みとなった。

7-7 「みやぎ防災副読本の活用」

各教科、LHR等での活用を推進する必要がある。

7-8 外部組織との連携について

コロナウイルス感染症拡大に伴い、外部組織との連携も限定的となった。その中で、避難訓練については、消防署員に春季、秋季2回の訓練の助言と指導を受けた。本校の防災教育を一層推進するためにも外部連携を深化することが必要である。

7-9 地域連携の取り組み

本校の防災については、地域連携が大きな課題となっており、今年度の当初予定されていた地域連携の取り組みは、中止となった。来年度以降に実施していきたい。

7-10 「みやぎ鎮魂の日」にかかる集会

(1) 目的 東日本大震災から10年目の鎮魂の日に向けて、学校として犠牲者への哀悼の意を表するとともに震災の教訓を学び未来につなぐ。

(2) 内容 東日本大震災追悼行事及びパネルディスカッション「震災を忘れない」

日時 3月9日(火) 6, 7時間目

14:00~ 14:10 東日本大震災追悼行事

開式 黙とう(1分間) 学校長の言葉 閉式

14:15~ 15:30 パネルディスカッション「震災を忘れない」

パネラー 地元在住の震災当時本校に在籍していた卒業生(5名),
当時を知る現職員(3名)

コーディネーター 防災主任

(3) 評価

震災から10年、「震災を忘れない」というテーマで、在学時に震災を経験した卒業生を招き、パネルディスカッションを行った。当時を振り返る卒業生の話は、生徒たちにとって思いを重ね合わせやすく、主体的に考えることができた。後半は、生徒にも参加してもらいながら震災を忘れないために私たちにできることについて考えることができた。

關係資料

令和2年度 第1回SGH運営指導委員会

- 1 実施日 令和2年10月23日(金) 10:30~16:00
- 2 場所 宮城県気仙沼高等学校 小会議室
- 3 出席者(運営指導委員)
 - 気仙沼高等学校SGH事業運営指導委員
 - 国際大学国際関係学研究科教授 信田 智人
 - 岩手大学理工学部教授 小笠原敏記
 - 宮城県国際化協会総括マネージャー 大泉 貴広
 - 住友林業サステナビリティ推進室長 飯塚 優子
 - 宮城県教育委員会高校教育課
 - 教育指導班 課長補佐・班長(指導主事) 菊田 英孝
 - 教育指導班 主幹・指導主事 高木 伸幸
 - 宮城県気仙沼高等学校
 - 校長 狩野 秀明
 - 教頭 高瀬 琢弥
 - 主幹教諭 小松代晃匡(研究企画部長)
 - 主幹教諭 金谷 英人(教務部長)
 - 教諭 鈴木 悠生(研究企画部副部長・SGH主任)
 - 事務室長 長部 邦雄
- 4 内容
 - (1) 受付 10:10~10:30
 - (2) 運営指導委員会 10:30~12:00
 - ① 開会
 - ② 開会の挨拶 宮城県教育委員会
宮城県気仙沼高等学校長 狩野 秀明
 - ③ 運営指導委員の自己紹介・あいさつ
 - ④ 気仙沼高校職員の紹介
 - ⑤ 委員長選出
 - ⑥ 報告・協議
 - ア 今年度のSGH事業の取組
 - イ 指定解除後の取組の方向性について
 - ウ 質疑応答
 - エ 運営指導委員からの指導助言
 - ⑦ 諸連絡
 - ⑧ 閉会
 - (3) 発表会見学・指導助言 13:00~16:00
 - ・2学年創造類型「課題研究Ⅰ」中間発表会の見学
 - ・3学年創造類型「課題研究Ⅱ」最終発表会の見学
 - ・2学年人文類型, 理数類型「総合的な探究の時間」テーマ発表会の見学

5 運営指導委員会からの指導助言

- 「国際理解の取組」で「C-cube」がある。この取組の中で数年前、地元外国人を招いて交流されているということを聞いている。技能実習生のみならず震災復興支援で様々な方が気仙沼を訪れている。国際交流は非常に有意義である。今後も継続していただきたい。
- 生徒アンケートの結果に、フィールドワークと研究発表会の満足度が高いとあったが、体験に基づく取組は「気づき」や「新しいものにチャレンジしよう」とするきっかけとなり、将来へとつながっていく。進路選択にも資するものであり、体験からの気づきという点において生徒の財産にもなる。今後も継続していただきたい。
- 1年次から研究発表を押しつけてしまえば、生徒に負担感を植え付けてしまう。そのさじ加減は難しいが、創造類型の特徴をしっかりと情報提供することが重要である。
- SGH指定解除後も多くの事業を継続していくようだが、どれが生徒にとってどれだけ影響を与えているのか数値化し、重点化した方がいいのではないかな。

令和2年度 第2回SGH運営指導委員会

- 1 実施日 令和3年10月23日(金) 13:30~15:00
9:40~12:20(発表会見学)
- 2 場 所 宮城県気仙沼高等学校 小会議室
- 3 出席者(運営指導委員)
 - 気仙沼高等学校SGH事業運営指導委員
 - 国際大学国際関係学研究科教授 信田 智人
 - 宮城県国際化協会総括マネージャー 大泉 貴広
 - 住友林業サステナビリティ推進室長 飯塚 優子
 - 宮城県教育委員会高校教育課
 - 教育指導班 課長補佐・班長(指導主事) 菊田 英孝
 - 教育指導班 主幹・指導主事 高木 伸幸
 - 宮城県気仙沼高等学校
 - 校長 狩野 秀明
 - 教頭 高瀬 琢弥
 - 主幹教諭 小松代晃匡(研究企画部長)
 - 主幹教諭 金谷 英人(教務部長)
 - 教諭 鈴木 悠生(研究企画部副部長・SGH主任)
 - 事務室長 長部 邦雄
- 4 内 容 (1) 受付 9:10~ 9:20
(2) 発表会見学(第1・第2体育館, 南校舎2・3階)
9:40~12:20
【昼食・休憩】
(3) 運営指導委員会 13:30~15:00
 - ① 開会
 - ② 開会の挨拶 ・ 県教育委員会
・ 校長
 - ③ 運営指導委員の自己紹介・あいさつ
 - ④ 気仙沼高校職員の紹介
 - ⑤ 委員長選出
 - ⑥ 報告・協議
 - ア 令和2年度 of 取組について
 - イ SGH事業5年間の総括
 - ウ 質疑応答
 - エ 運営指導委員からの指導・助言
 - ⑦ 諸連絡
 - ⑧ 閉会の挨拶

5 運営指導委員会からの指導助言

- 5年間の取り組みの成果が出ている。特に生徒のプレゼン力の向上が顕著である。SGH指定が解除され、予算措置がなくなるが今後も発展継続をお願いしたい。
- 目標には数値化できるものとそうでないものがある。生徒のコミュニケーション能力などは必ずしも数値化できるものではないのではないか。
- 考える力、疑う力、自分で課題を設定する力を育成することはとても大切なことである。思考の訓練をしておくことが、将来様々な場面での障害を乗り越える原動力となる。課題解決能力を養っていくことと、コミュニケーション能力を身につけさせることの両輪を今後も取り組んでいただきたい。

5年間の活動と成果の総括

国際大学 教授 信田智人

気仙沼高等学校は、「海を素材とするグローバルリテラシー育成～東日本大震災を乗り越える人材を目指して」というゴールにスーパーグローバルハイスクール事業に取り組んできた。私は勤務先の国際大学大学院がスーパーグローバル・ユニバーシティーを獲得していることから、同校のSGH運営指導委員を委嘱され、委員長としてそのSGH事業を5年間観察し、評価と助言を提供してきた。

同校は初年度である平成28年度から課題研究活動および、志教育、英語教育、台湾との国際交流、防災教育、地域連携活動、国内交流など、多岐にわたって新しい分野での教育の発展に積極的に努めてきた。限られた教員数でこれらの分野での対応ができたのは、教員の方々の努力によるものだと高く評価している。

この5年を振り返り、特に課題研究において大きな進歩と成果が見られたことを強調したい。1年生全員に対して「地域社会研究」を課して、海を素材とするテーマで、産業や人間、防災、文化との関連した課題、および三陸の自然といった5領域で生徒に研究をさせてきた。この課題は生徒たちに地元の現状を見直し、さらに発展させるにはどうすればよいのかという問題解決手段を考えることを迫るものであった。これは生徒たちの郷土愛を芽生えさせ、強化する効果が見られた。探究型学習センターで先行研究をデータベース化したことによって、生徒が先行研究からより深く問題に取り組むことを可能にした。

2年生の創造類型クラスにおいては、1年次の研究経験を踏まえ、グローバル課題に取り組むシステムになっている。気仙沼というスコープから、今度は自分たちが世界とどう結びついているのかを考えるものである。グローバル課題においても学習センターのデータベースが有益な情報を与えているため、年々、研究の内容が高度になっていると感じられた。3年次においては、2年次の研究内容を見直し論文を修正したのちに英文で論文を作成、英語によるプレゼンテーションを課している。

気仙沼高校の廊下には、過去の生徒が発表に使ったポスターが数多く掲げられており、生徒たちが毎日先行研究を目にできるようになっている。これは、課題研究という活動そのものが、生徒の日常に溶け込むことを促しているものと思われる。

私は運営指導委員会において、パブリックスピーキングの指導を強化するように助言してきたが、その分野において期待以上の進歩が見られたことに驚いた。例えば、文章を読むのではなく、最小限のノートを手に持ち聴衆の目を見ながら話す、アイコンタクトの重要性を指摘した。5年目の今年に至っては全員ではないにしても、多くの生徒が前を見て話すようになっていた。これは間違いなく、気仙沼高校の先生方の指導の賜物であると考えられる。

これらの課題研究の準備や発表には多くの時間が費やされているが、それが大学進学に直接結びつくものではない。しかし自ら課題を見出し、それを研究し、人前で発表するという経験は、生徒たちの将来にとって大きな財産となる。

これからの日本の社会や企業において、プレゼンテーション能力の必要性は年々高まってきている。特に英語によるプレゼンテーション能力については、大企業がコンサルティング会社を雇い、高額で社員に研修をさせており、そのニーズはますます強くなっている。気仙沼高校での経験は、生徒たちが実社会に出たときにその重要性を実感できるものになると信じている。

気仙沼高校スーパーグローバルハイスクール（SGH）の5年を振り返って

岩手大学理工学部 教授 小笠原敏記

東日本大震災から10年が過ぎようとしているが、気仙沼高校は復興するまちとともに震災を乗り越える人材をめざし、気仙沼高校と気仙沼西高校との統合準備と同時進行でSGH事業（本プログラム）を実践してきた。その内容は、海を素材とするグローバルリテラシー育成を基本とし、授業改善、英語教育、国際交流、志教育、防災教育、地域連携など多岐にわたる。各年度の実績を踏まえながら取り組みの精度の向上を図ってきたと言える。

本プログラム初年度では、生徒がつけるべき力としてのグローバルリテラシーがどの程度養成できたかについて、客観的評価指標の構築の必要性が明らかになった。また、本プログラムの全体像や各事業の目標とその間のつながりについて、理解し意欲を持って取り組める生徒とそうでない生徒がいる中で、生徒個々のモチベーションを高める指導の難しさも明らかになった。2年目では、グローバルリテラシーの自己評価において全体的に向上していることが確認できた。特に、様々なイベントや発表会の経験により、他校の生徒や地域の人々など、周りから大きな刺激を受けた生徒は、自己評価の伸び率が高いことが実証された。一方、事業ベースにおいて、多忙な学校業務中での効率的・効果的な教職員の研修、転任による教員間の引き継ぎ、および担当者間の打合せなどの課題が新たに生じた。3年目では、事業が概ね軌道に乗ったことで、各教員が運営に積極的かつ主体的に携わるようになってきた。また、震災復興に関わる地域と連携した取り組みも見られるようになり、震災を乗り越える人材を育成する目的につながるプログラムになってきた。さらに、生徒が取り組む地域社会研究や課題研究Ⅰの内容が年々充実し、海を活かす、海でつながる、海と生きると言った海を素材とするグローバルリテラシーの展開がうまく軌道に乗りつつある。4年目では、グローバル社会に対する関心を持つ生徒や、研究に対して調べる力が高まった生徒が多くなる傾向が見られたが、その一方、自分で考える力を身につける教育の必要性が感じられた。最終年度は、コロナ禍で活動が制限されるため、非常に難しい活動であったと言えよう。こうした状況下においても、研究発表では、初年度に比べて格段に発表ポスターの質や発表の仕方が向上していることから、本プログラムの意義があったものと考えられる。今後、グローバル人材の育成が益々望まれると予想されるため、本プログラムで得た評価・育成方法を活かして、国際的な視野で考え、行動し、地域社会に貢献できる人材を育てて頂きたい。

最後に、本プログラムは、気仙沼高校の教育目標の一つにある「地域の自然や文化を尊び、国際的視野に立ち、志の実現を自ら目指し学び続ける人材を育成する」に相応しい内容であり、本プログラムに携わった教職員および生徒の成長する過程に触れることができたことに、心より感謝申し上げる。

多様化が加速する社会におけるSGHの意義

公益財団法人宮城県国際化協会 総括マネージャー 大泉貴広

SGHとしての最後の全体発表会が開催された日は、雪が舞う真冬日であったが、体育館での2時間にわたる発表の時間は、寒さも感じないまま、あっという間に過ぎていった。寒さが気にならなかったのは、学校側の配慮でいつも以上に暖房が強化されていたからだけではなく、それぞれの発表が大変充実しており、私自身が引き込まれるように聴き入っていたからである。

テーマの独自性と今日的な普遍性、現場の声を反映させるためのデータ収集のあり方、ポスターのデザイン上の工夫、発表の態度、時に問題の本質に迫る質疑応答など、初年度と比較して格段に進歩している印象を受けた。その後の運営指導委員会においても、一部の研究について論の組立に飛躍が見られる等の指摘もあったが、どの委員からもこの5年間のSGHの取り組みの着実な成果を評価する声が異口同音に述べられた。

2020年6月末現在、宮城県内には約2万3千人の、気仙沼市内には約600人の外国人が暮らしている。新型コロナウイルスの影響で、現時点では国境を越えた人の移動は制限されているものの、「外国人材」の受け入れ拡大を掲げる政府の方針を受けて、中長期的には、その数は増加することが予想される。今の高校生が社会に出るころ、あらゆる場面で多様な文化背景を持った人たちとやり取りをする、協働する、或いは生活を共にすることが増えるのは確実である。また、新型コロナウイルスの影響により、オンラインツールの活用が急激に進み、他者とつながるのに距離の問題が無くなりつつあることから、海外とのアクセスも容易になっている。

上述のいくつかの社会的要因により、自分とは異なる文化背景を持った人たちと接する機会が増えることが見込まれるなか、そうした人たちと円滑にコミュニケーションを図る能力を育成することが教育現場でも求められている。その能力を構成する要素の一つとして、もちろん語学力もあるが、それ以外のこと、例えば、異なる考えを尊重すること、自分の考えをわかりやすく伝えること、自他の考えの差異の背景にあるものを冷静に見極めること、言葉以外で表される情報をキャッチすること、といった語学力以外の能力・態度も重要なものである。

語学力については、ある種の方法論に基づいたプロセスを踏まえば一定の向上が見込めるが、それ以外の能力については、定型的なカリキュラムに基づく学習よりも、現実のやり取りを通してトライ&エラーのなかで経験的に身につくものが多い。そうした意味で、研究活動を通して、学内においては他の生徒や教員と、学外においては専門家や現場の実践者と幾度となく対話を重ねることにより、自らの意見を整理・表現することに取り組んできた気仙沼高校のSGHの意義は、非常に大きいと考える。世代、知識、経験値が異なる人たちを相手とした対話は、時に困難なものであったかもしれない。しかしながら、その過程で得たスキルは、語学力と違って客観的には測れないものの、今後「グローバル化」が一層進む社会で必ず役に立つものと確信する。

加えて、研究活動以外に組み込まれていた東日本大震災復興プログラム、その他のプログラムを通して多様な「他者」と出会ったり、様々な経験を重ねたりしたことも、教室内の座学だけでは得られない成長を可能にしていたと思われる。

気仙沼は、結婚移住女性の活躍、外国人技能実習生の増加、震災後の支援をきっかけとした海外とのつながりの継続といった、足元の「グローバル化」が進んでいる地域でもある。SGHとしての取り組みは終了するが、こうした地域の特性も活かした、異なる文化背景を持った人とコミュニケーションを図りつつ、自ら発信する能力を備えた「グローバル人材」の育成に、引き続き取り組んでいきたい。

最後に、優れた教育活動に関わらせていただき、生徒のみなさんの成長の現場に立ち会えたことに感謝を申し上げます。

「ゼロをイチにすること」

住友林業株式会社 サステナビリティ推進室長 飯塚優子

学校という組織の特性上、生徒たちが年々入れ替わっていく中であって、一貫して前年の同学年の生徒たちよりもコミュニケーション能力の高い課題発表が行われたことが、活動成果の最大の証ではないか。SGH指定第1年次の3月から民間指導委員を拝命し、関わらせていただいた4年余りの期間は、強い意志と綿密な事前計画をもって臨めば短期間で組織が成長すること、また、指導にあたる教師の役割の大きさを実感した貴重な経験であった。最終年度は、創造類型クラスの2年生に留まらず全類型クラスの2年生全員が課題研究発表に取り組んだことも、スーパーグローバルハイスクールに通う誇りと自らの成長を全校生徒が実感する機会となったはずだ。

気仙沼高校のSGH活動は、実に多種多様な取組みが重層的に組み立てられており、それら全てを計画し指導にあたられた先生方のご尽力に感服している。グローバルリーダー育成に向けた開始当初、地域社会研究はもちろんのこと、震災に関する研究テーマが非常に多かったのが印象的だった。東日本大震災からまだ5年であり、「海」がテーマとして与えられていることや、郷土愛ももちろんある。生活のあらゆる場面で耳目に飛び込んでくるとはいえ、課題研究テーマを選ぶにあたり社会課題は「震災」「防災」関連であらねばならぬという生徒たちの思い込みもあったのではないかと振り返ってみると、生徒たちの発表はいくつかの例外もあるものの、「やらされ感」があったようにも感じられた。

しかし、研究テーマは年々多種多様なものへと進化していった。2年目からはSDGsの考え方も共有され、次々とユニークな視点で新しいテーマに取り組む生徒たち。防災教育や観光振興、人口減少、海洋ゴミ対策など初年度からの継続的なテーマに加え、英語教育、訪日観光客、地域の外国人との交流の在り方、ゼノフォビアなどのテーマを選ぶ生徒もでてきた。ジェンダー、LGBTQ、介護などでは社会課題に対する深い洞察が感じられ、出色の発表が目立った。

進化したのは、もちろん研究テーマ選定時の課題設定力だけではない。フィールドワークやアンケート調査の実施など、実際の調査をもとに考察を進められるよう各種事業が工夫されており、その調査内容や実施方法についても質問があれば生徒は的確な説明を返せる。調査プロセスで地域の人との関わりができ、コミュニケーションからのフィードバックを得ていることも、生徒の思考を深め、更なる探究心、自信につながっている。一部「結論ありき」で実施される調査もあったが、年を追うごとにその傾向が改善されたことは、教師の導き方が変わっていったことの結果だろう。

発表ポスターの完成度は素晴らしい。過去のスライドやポスターがきちんとデータベース化されており、先行研究例という「知」に容易にアクセスできる仕組みが整えられたことが飛躍の原因とみる。校外、県外の活動に参加する機会も得る中で、より多くの発表資料、プレゼン、フィードバックに触れる機会を得た一部の生徒が持ち帰った新たな知見・ノウハウの共有による効果もあるだろう。ポスターを褒めれば、工夫した点や改善しきれなかった点などをコメントできるのは、タイトルや文字の級数、図表の挿入などレイアウトについてしっかり考えながら作り上げたからだ。

発表ポスターとともに、大きな成長を感じたのはコミュニケーション能力である。何事も「場数を踏む」ことが重要であり、全ての生徒が自身の役割を持って発表を行い、聴衆側にあっては適切な質問を考え、発表者の気づきにつなげる。生徒の意識、心構え、自信が導き出した成果もあろう。また、英語によるプレゼンも非常にレベルが高い。手元の原稿を見るのではなく聴衆の反応を見ながら、質問を投げかけ巧みにプレゼンに巻き込む生徒もいた。先輩の発表を聞き、質問をし、自ら考え、次の課題設定と発表につなげていくというプロセスが、学習年度を超えてよい循環を生み出している。

最後の運営指導委員会の説明の中で、教師側の意識の変化について触れられていたことも強く印象に残った。「ひとつの組織が一丸となって」「全構成員がワガコト感をもって」というのは、多くの組織が掲げるお題目ではあるが、実際に達成することは非常に難しい。しかしながら、創造類型クラスの担任教師やSGHの担当になった一部の教師だけでなく、全員が気仙沼高校のSGH活動に関わるようになったとのことだった。最終年度には地域の方に留まらず参加必須ではない3年生や卒業生が課題発表会に駆け付けていたことも、5年という期間の成果であろう。

冒頭述べたように、計画に基づき先生方の知識と経験が高まったことが、生徒たちのアウトプットの変化の大きな礎となっている。その点において、学校組織の外から大学の講師陣が生徒へ直接指導にあたる機会が計画されていたことも、教師側の成長につながった要因ではないか。生徒も教師も、そして企業に勤める傍ら運営指導委員として関わらせていただいた自身にとっても、新しい出会い、新しい経験、新しい知識に触れることの重要性を実感した。自ら考え、課題を見つけ解決していくことは、民間企業の従業員研修でも求められる重要な課題である。SGH校の生徒指導に関わることは、企業人にとっても貴重な体験になるはずで、企業と高校の交流について今後、取り組みを広げていけたらよいと考える。

ゼロからスタートしたSGH活動を形にして軌道に乗せるまでは大きな困難が伴ったと思うが、ここからの継続・改善にはまた別種の困難が待ち受けているだろう。5年を一つの節目としながらも、今後もSGHの活動が継続することを強く願っている。



気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

No. 29 令和2年2月21日

海を素材とするグローバルリテラシー育成
～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

宮城県気仙沼高等学校

全体発表会がおこなわれました 「地域社会研究」「課題研究Ⅰ」

1月25日(土)に、1年生「地域社会研究」と2年生創造類型「課題研究Ⅰ」の全体発表会が行われました。

「地域社会研究」は、地域と海を素材として研究テーマを設定し、地域理解講座、フィールドワーク等も含めて、課題研究活動を行ってきました。5つの分野ごとの口頭での中間発表会を経て、初めてのポスター形式での発表会でした。

2学年創造類型「課題研究Ⅰ」は、これまで取り組んできた研究内容を、一人一人が研究テーマを地域からグローバルな視点に広げ、昨年10月の中間発表会での大学の先生らによるアドバイスや12月の台湾研修で深めてきた成果を踏まえ、ポスター発表しました。



2月4日(火)、大崎市の古川黎明高校にて「古川黎明サイエンスフェスティバル」が開催され、本校からは1年生「地域社会研究」最優秀班の菅野みらいさん、小松龍生くん、高橋理央さん、田鎖陽聖くん、遠藤かのんさんと、2年生創造類型の齊藤恵梨佳さん、齋藤里圭さんの計7名が学校代表として参加しました。黎明高校や他の学校によるたくさんの研究発表を聴くこともでき、貴重な経験となったようです。これからの活動に活かしていきたいと決意を新たにしていました。

古川黎明サイエンスフェスティバル





気高SGH通信

文部科学省指定 スーパーグローバルハイスクール



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

No. 30 令和2年2月12日

宮城県気仙沼高等学校

台湾の高級職業学校の校長先生ら8名が本校を訪問



2月5日(水)、台南の国立華南高級商業職業学校・高雄市立三民高級家事商業職業学校・国立屏東高級工業職業学校・国立佳冬高級農業職業学校の校長先生ら8名が、社団法人台南市台日友好交流協会の職員とともに、訪日教育旅行の実施に向けた視察の一環として、本校を訪問し、授業参観や本校生徒との交流などを行いました。

ご一行は、宮城県の訪日教育旅行誘致促進事業によるツアーで、仙台空港到着後、岩手県中尊寺・巖美溪を視察後、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館に立ち寄り、教育施設としては唯一本校を訪問されました。狩野校長から本校概要をスライドで紹介した後、各クラスの授業を見学し、その後、創造類型の2年4組の生徒37名との交流会を行いました。



授業参観のようす



授業参観のようす(物理基礎)



2年4組生徒と対面



代表生徒による学校の紹介



代表生徒による本校授業の紹介



代表生徒による課題研究発表



代表生徒による課題研究発表



代表生徒による課題研究発表

生徒との交流会では、生徒たちが制作した気仙沼市の概要、課題研究などの授業、行事紹介などのスライドを使って説明し、質疑応答が交わされました。最後に、合唱曲スピッツの「チェリー」を披露し、台湾の校長先生方から大きな拍手をいただきました。



みんなで記念撮影



合唱「チェリー」を披露



電子ピアノ演奏は畠山君



みんなで見送り「謝謝！」



気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

No.31 令和2年5月22日

宮城県気仙沼高等学校

SGH最終年度がスタートしています

～コロナ禍の中の探究活動～

令和2年度は昨年度末からの新型コロナウイルス感染症の影響で、5月末まで臨時休校という、これまで経験したことがない困難からのスタートでしたが、本校では、4月下旬から「Classi(クラッシー、タブレット端末等へ宿題や小テストなどを配信する SaaS 型のクラウドサービスです)」を活用した動画配信を全科目で行うこととし、1学年「地域社会研究」と2学年創造類型「課題研究Ⅰ」でも、『Microsoft PowerPoint』でスライドショーを作成し、配信しました。

「地域社会研究」では、「SDGs」と「Society5.0」と「新しい生活様式」から「自分×未来」について考えてもらう講座などを、「課題研究Ⅰ」では、課題研究とは何かや、身に付けたい力と達成するために頑張りたいことについて考えてもらう講座を配信しました。

「SDGs」って何だろう？

- SDGsとは、持続可能な開発目標、のこと = Sustainable Development Goals

世界を良くするために将来の世代と現在の世代・それから開発途上国も先進国も共通して目指すことになった目標

「誰一人取り残さない社会」を目指して、多様性と包摂性のある社会の実現を目標とするもの。

2016年から2030年までの国際的な目標として決められた。「貧富の格差」「気候変動への対応」など17分野のゴール(目標)と、その具体的な169のターゲットが設定されている。

SDGs

目標 (17個)

ターゲット (169個)

視聴後のアンケートからは、自らの将来や現代における様々な課題について真剣に考え、答える生徒の姿を感じ取ることができ、そのような生徒たちの学ぶ意欲・探究心に応えていきたいと、指導者側にとって気持ちを新たにした動画配信期間となりました。

祝 文部科学大臣賞!!! 全国高校生MY PROJECT AWARD2019



3月末、『全国高校生MY PROJECT AWARD2019』全国Summit(全国高校生マイプロジェクト実行委員会主催、文部科学省・日本ユネスコ国内委員会後援)が、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けてオンラインで開催され、地区Summitを通過した48プロジェクト、99名の高校生が参加しました。

県代表として本校から『気仙沼クエスト～「内輪受け」が起こす観光革命～』で参加した畠山瑛護くん(参加当時2年、現3-4)と吉城拓馬くん(同、現3-6)は、自作スマホゲーム「気仙沼クエスト」などを通じ、気仙沼の人や地域の魅力を発信することで活性化を図っていこうという取り組みが高く評価され、最高賞の文部科学大臣賞と、参加高校生の投票で選ばれる高校生特別賞をダブル受賞しました。

受賞後、2人はテレビの全国放送や新聞の取材に引っ張りだこですが、「ゲームを通じて気仙沼のファンを作りたい」「地元の人にまず遊んでもらい笑って欲しい」と一層気合いが入った模様です。今後とも応援よろしくお願ひします。





気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

No.32 令和2年7月6日

宮城県気仙沼高等学校

6月 探究活動本格化～1年「テクニカル講座」を実施～

6月より通常授業がスタートしました。すべてが元どおりになったわけではなく、「新しい生活様式」に従い、一部行事が中止となったり、内容を変更したりと制約がある状態ではありますが、感染拡大防止に向けた取り組みと、教育活動の充実を両立できるよう、取り組んでいます。

SGH事業につきましても、いよいよ活動が本格化しました。6月24日(水)には1年生「地域社会研究」において、今後の研究をすすめる上で必要となる「ITを活用するための技法」「図書を活用するための技法」について学ぶことを目的に「テクニカル講座」を実施しました。「IT活用講座」と「図書情報講座」の2講座を2クラスずつでローテーションし、「IT活用講座」では、インターネットを用いた情報検索方法、新聞データベース検索、論文検索についてを、「図書情報講座」では、参考文献の書き方、書籍分類や探し方、校内外の蔵書検索方法について、本校教員が講師となって授業を行いました。



「探究成果展」はじまる～伝承館とケー・ウェーブで～

本校で行われている探究活動に対する理解を深めていただくことを目的に、7月4日(土)から、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館と気仙沼市総合体育館ケー・ウェーブで「気仙沼高校探究成果展」が開催されています。

伝承館には、昨年度1学年「地域社会研究」5分野(海と産業、海と人間、三陸の自然、海と文化、海と防災)の優秀賞受賞班と、2学年創造類型「課題研究Ⅰ」の成績優秀者から3名、3学年創造類型「課題研究Ⅱ」の成績優秀者から2名のポスターが展示されています。またケー・ウェーブには、「地域社会研究」「課題研究Ⅰ」の健康・栄養等に関連した研究ポスターを展示しています。



この機会にぜひ足を運んでいただき、本校の探究活動の一端に触れていただきたいと思います。



気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

No. 3 3 令和2年7月22日

宮城県気仙沼高等学校

海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

震災・防災講演会を実施しました!

7月に入り、本校の探究活動も一層本格化し、生徒達は研究テーマの設定など、真剣に取り組んでいます。

15日(水)に昨年に引き続き東北大学災害科学国際研究所から佐藤翔輔准教授をお迎えし、1年生を対象に「震災・防災講演会」を行いました。

前半は「災害とは何か」「防災と減災」「災害時の『生きる力』」等について講演をいただき、休憩を挟み、可視化するための防災ワークショップを実施していただきました。講演中には、生徒に災害等に関する様々な質問をしていただき、生徒も積極的に答えていました。また、後半のワークショップでは講演から学んだことを付箋に書き出し、グループで話し合っ



中学校の探究型学習に協力しました!

7月9日(木)に気仙沼中学校で、本校とビデオ通信システム「Zoom」で結んだ探究型学習の授業が行われました。新型コロナウイルス感染症の影響でオンライン開催となりましたが、中学生は全校生徒での参加となりました。

本校からは、斉藤有紗さんと齋藤里圭さん(ともに創造類型3年4組)が参加し、自身が昨年度の「課題研究I」で手がけた「男女格差」「海洋のプラゴミ」についてそれぞれ発表し、テーマ設定の方法や手法といった、探究の進め方についても話しました。

中学生側からは、画面の向こう側で発表する本校生に対し、次々と質問を浴びせ、対面と変わらない活発なやりとりが交わされました。





気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

No.34 令和2年8月20日

海を素材とするグローバルリテラシー育成
～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

宮城県気仙沼高等学校

「台湾に関する講演会」を実施

7月22日(水)、南三陸町在住の佐藤金枝さんを講師にお招きして、2年4組創造類型38名を対象に「台湾に関する講演会」を開催しました。新型コロナウイルス感染拡大により、今年度の台湾研修は中止になりましたが、日本と海外との比較を踏まえた研究活動や台湾の高校との交流に向けて、台湾の言葉、食文化、台湾国内の現状まで詳しく、わかりやすく紹介していただきました。近隣のアジア諸国から影響を受けた沖縄についても関連づけて話してくださり、生徒の中島恭佑くんは、「シーサー等の台湾と沖縄との共通の話題があって、台湾研修には行けないが、たくさんの台湾についてのことが学べて良かった」とのことでした。



フィールドワークはオンラインで実施

7月下旬から8月にかけて、東北大学、東北工業大学、宮城大学、宮城教育大学の各大学とオンラインで結び、「課題研究Ⅰ」のオンラインフィールドワークを実施しました。大学の先生から直接指導を受けることに緊張した様子の子供たちでしたが、専門家に直接質問することができる貴重な機会ということで、いざ始まると研究の進め方について熱心にアドバイスを受け、自身の研究に関する質問をするなど、充実した時間となったようです。はじめてオンラインで実施しましたが、戸惑うことなく、限られた時間の中で多くのことを吸収しようと意欲的に取り組む姿が印象的でした。

現在は、フィールドワークを通じていただいた助言をもとに研究計画を練り直し、10月の中間発表会に向けて研究活動に取り組んでいます。





気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

No. 35 令和2年9月23日

宮城県気仙沼高等学校

海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

Speech Writing Workshop

7月30日(木), 9月3日(木), 10日(木)の3回, 海外交流アドバイザーのダニエル・ロス先生を講師に, 1年生対象の「Speech Writing Workshop」を実施しました。ロス先生は気仙沼市内で長年英会話教室を営んでおり, 日本人が英語を話せるようになるノウハウをお持ちです。今回は, 英語を話す上で大切な構成について学び, スピーチ原稿の型となる, Intro-Body-Conclusionの構成とそれらを支える指示文や具体例を加えることの大切さを知る時間となりました。本校では英語の授業でパフォーマンステストを実施していますが, 生徒の中にはこのワークショップ直後に行われたパフォーマンステストにおいて, 今回学んだことを生かして成果につなげた者がたくさんいて, 生徒にとって非常に有益なものとなったようです。

これから行われる英語コンテストや各種検定のスピーキング部門, その他英語を使用する場面において, この学びが生きてくることを期待します。



課題研究講演会を実施しました

9月8日(火), 東北大学大学院生命科学研究科の酒井聡樹准教授を講師にお迎えし, 課題研究に関する講演会を実施しました。

酒井先生は, 植物の進化生態学を専門として研究活動を行っていますが, 分かりやすいプレゼンテーションや論文のまとめ方を教える講演会を全国各地で開催しています。

課題研究発表会を10月23日(金)に控え, 研究をまとめる上で心がけることや, 序論の書き方, 分かりやすいプレゼンテーションのコツ, ポスター作成を含む論文作成のポイントなどについて, たくさんのアドバイスをいただきました。





気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

No. 36 令和2年10月12日

海を素材とするグローバルリテラシー育成
～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

宮城県気仙沼高等学校

授業改善研修会～深い学びと「探究」を探究する～

10月1日(木)、國學院大學人間開発学部初等教育学科教授の田村学先生を講師にお迎えし、授業改善研修会～深い学びと「探究」を探究する～を実施しました。田村先生は文部科学省の教科調査官や視学官を歴任し、3年前から國學院大學で教鞭をとられています。

各教科や「総合的な探究の時間」で、生徒にどんな資質・能力を身につけようとしているのか、学習指導要領の改訂の読み解き方や、そこで語られる「主体的・対話的で深い学び」の意味、高校の教育課程におけるカリキュラム・マネジメントの方法など、田村先生が学校現場でインタビューしたさまざまな生徒たちの声や学びの事例を紹介していただくなど密度の濃いお話を頂きました。

限られた時間でしたが、盛りだくさんの内容に、参加した先生方は集中して耳を傾けていました。



1 学年「地域社会研究」フィールドワーク

10月7日(水)の5校時から7校時において、市内32の事業所等を対象に、1学年「地域社会研究」のフィールドワークを実施しました。気仙沼の海と産業・社会活動・文化・自然・災害の関連を中心に、生徒が興味・関心を持つ分野の専門家からお話を聞くことができました。生徒は初めての聞き取り調査で緊張している様子でしたが、現場で活躍されている方々に積極的に質問し、気仙沼の現状と今後について理解を深めて地域研究に対する刺激を大いに受けた様子でした。フィールドワークを受けて、自ら積極的に教員と相談し、アンケートや他の訪問先への聞き取り調査を検討し始めた生徒たちもみられています。

現在は11月11日(水)に開催される「地域社会研究」の中間発表会に向けて研究を進め、PowerPointを用いた発表資料作成など発表準備を行っています。





気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

No. 37 令和2年10月30日

海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

宮城県気仙沼高等学校

「課題研究Ⅱ」最終発表会

「課題研究Ⅰ」中間発表会

「文理探究」テーマ発表会

10月23日(金)、第1・2体育館にて、令和2年度「課題研究Ⅱ」最終発表会・「課題研究Ⅰ」中間発表会・「文理探究」テーマ発表会を開催しました。これまでの研究を発表し、気仙沼高校全体として、縦のつながりをつくり、研究への多角的な見方を養うことを目的とし、英語による成果発表、発表方法・技術の向上、研究テーマの紹介に臨みました。感染症対策を十分にしながらの実施でしたが、5分間の発表の中で、いかに自分の思いや成果を伝え、関心・実感を持ってもらえるか、生徒のみなさんは創意工夫を凝らしながら取り組みました。

参観者の方々からは、「高校生だからこそその柔軟な視点、発想でこれからも研究に励んでいただきたい」「質問から課題の探究の糸口を掴んでいる人が多く素敵でした」などの前向きな意見をたくさんいただきました。生徒からは「コロナ禍で制約も多く、限られた中で発表することができた」と達成感を聞くことができました。





気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

No. 38 令和2年11月20日

宮城県気仙沼高等学校

海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

「地域社会研究」中間発表会

11月11日(水)5校時から7校時において、1学年「地域社会研究」中間発表会を行いました。今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、壇上前に樹脂シートを貼った状態での発表会となりました。当日は東京海洋大学、宮城教育大学、宮城大学の先生方、NPO団体の方にアドバイザーとして来校いただき、また、東北大学災害科学国際研究所の先生はオンラインによる参加で、これまでの研究成果を発表しました。高校入学後、初めて発表する相手が初めてお目にかかる大人の方ということもあり、非常に緊張感に包まれた中での開催でした。発表後のアドバイザーの先生方の質問や指導助言は多面的でかつ奥深いものばかりで、これからの生徒の研究活動に必ずや生きてくるものと感じました。休憩時間に先生方に積極的に質問する生徒の姿が見られ、「専門家」と接する活動が生徒の意欲をさらに高める1日となりました。



「第2回台湾に関する講演会」

11月17日(火)、南三陸町在住の佐藤金枝さんを講師にお招きして、2年4組創造類型38名を対象に「第2回台湾に関する講演会」を開催しました。1回目の7月の講演会では台湾の文化を中心に紹介していただきましたが、今回は中国語の発音や簡単な自己紹介、台湾の高校に宛てたメッセージカードの書き方を教えて頂きました。台湾の高校との交流会に向けて、理解を深める良い機会となりました。生徒の及川澄恵さんは「自己紹介やひまわりの約束の中国語バージョンなど様々なことに取り組むことができたので、とても貴重な経験になった。もともと中国語に興味があり自分で調べたり本を読んだりしたことがあったので、その内容がでてきたり実際に中国出身の方に発音を指導して頂くことができて嬉しかった。歌の練習を頑張りたい」と感想を述べていました。





気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

No. 39 令和2年12月25日

海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

宮城県気仙沼高等学校

1学年フィールドワーク②



12月12日(土)に、地域社会研究において2回目のフィールドワークを行いました。

宮城大学、東北工業大学、宮城教育大学を訪問した班は、対面で教授に質問したり、実際に実験をさせてもらったりしました。市内の企業等を訪問した班は、飲食店からレシピのアイデアを頂いたり、気仙沼の医療現場の現状をお話しいただいたりしました。

また今年度は、新型コロナウイルス感染予防の観点から、大学とのフィールドワークは一部オンラインで12日(土)、16日(水)、23日(水)の計3回実施しました。例年訪問できていなかった遠く離れた東京海洋大学の先生とも繋がりにアドバイス頂けたのはオンラインだからこそではないでしょうか。対面でお話ししているように質問に答えて頂き、今後の研究に活かせるヒントを沢山得たようです。今後は1月30日にある最終発表に向けて研究をさらに進めていきます。

全国高校生フォーラム

12月20日(日)に「全国高校生フォーラム」が開催され、参加した及川澄恵さんが、オンライン上で「How to increase the number of people working on picking up garbage」というテーマで研究発表し、及川里菜さんと齋藤花音さんが「自然環境と生活: どうしたら持続可能な開発が可能か?」をテーマにしたディスカッションに参加しました。例年とは異なりオンラインでの開催でしたが、英語で学校の特色についての紹介や国際的な視点での課題について熱い議論を交わし、全国の高校生と交流を深めることができました。



気仙沼のマイプロ発表会

12月20日(日)、PIER7にて、気仙沼の高校生「マイプロジェクトアワード2020」最終発表会が開催され、気仙沼高校からは12組、14名の生徒が参加しました。発表会では、岸佑衣子さんが「在宅で看取りやすい社会を創るには」で最高賞の「市長賞」を、伊藤ひなたさんが「子どもの自尊心をupしたい!」で「共感賞」を受賞しました。





気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

No. 40 令和3年2月2日

海を素材とするグローバルリテラシー育成
～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

宮城県気仙沼高等学校

「課題研究Ⅰ」「地域社会研究」全体発表会 「総合的な探究の時間」中間発表会

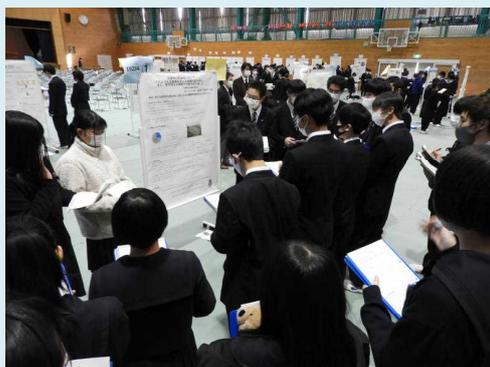
1月30日(土)に、令和2年度2学年創造類型「課題研究Ⅰ」1学年「地域社会研究」全体発表会、2学年人文・理数類型「総合的な探究の時間」中間発表会を開催しました。これまでの研究成果を発表し、気仙沼高校全体として、縦のつながりをつくり、研究への多角的な見方を養うことを目的とし、ポスターやスライドによる成果発表に臨みました。

2学年創造類型「課題研究Ⅰ」は、一人一人が研究テーマを地域からグローバルな視点に広げ、昨年10月の中間発表会での大学の先生らによるアドバイスを踏まえ、これまで取り組んできた研究内容をさらに深化させながらまとめ、後輩のモデルになるようにポスター発表しました。

1年生「地域社会研究」は地域と海を素材として研究テーマを設定し、地域理解講座、フィールドワーク等も含めて、課題研究活動を行ってきました。5つの分野ごとの口頭での中間発表会を経て、これまでの研究成果を初めてのポスター形式で発表しました。

今年度本格的に探究活動をスタートさせた2年生人文・理数類型「総合的な探究の時間」は、10月のテーマ発表から取り組んできた研究の中間成果を、内容が比較的近い生徒でのグループごとに発表しました。次年度7月に計画されている最終発表会に向けて、弾みがついたのではないかと思います。

これまで同様、感染症対策を十分に講じながらの実施でしたが、創意工夫をして積極的に取り組んだ成果が、遺憾なく発揮された、素晴らしい発表会となりました。





気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

No.41 令和3年2月15日

宮城県気仙沼高等学校

古川黎明サイエンスフェスティバル

2月上旬、「古川黎明サイエンスフェスティバル」が開催されました。今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、1日(月)～5日(金)の期間、参加各校の発表動画を事前発表し、相互視聴を行い、6日(土)にリアルタイム発表を行う形式での開催となりました。

本校からは1年生の熊谷藍斗くん、畠山真衣さん、三浦瑛くんの班が事前動画発表で、内海雄太くん、萩野谷南帆子さん、小山桃果さん、金野大和くんの班と、小野寺真大くん、小山夕稀さん、熊谷一夏さん、佐藤杏哉くん、小松創くんの班がリアルタイム発表で参加しました。

参加した生徒は「他校の発表を聞いて、スライドの構成や発表の形式・態度などについて新たな学びを得るとともに、自分たちの発表にもまだまだ改善の余地があることに気づきました。今後の研究活動に生かしていきたい。」と語り、探究への思いを強くしたようです。



全国海洋教育サミット

2月11日(木 建国記念の日)、東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センターと公益財団法人日本財団との共同主催で「第8回全国海洋教育サミット」が開催されました。これまで実施された発表会同様、オンライン開催となりました。本校からは1年生の泉虎太郎くん、大内明音さん、千葉将敬くんの班が「気仙沼市内における海産物を利用したバイオマス発電を実現するには」のテーマで発表し、閉会行事の際、海洋教育センター長の田中智志先生からお褒めの言葉をいただきました。

大内さんは「海洋教育サミットは今回が初めての参加でしたが、全国の高校生の研究や貴重なお話を聞くことができ、とても良い経験になりました。学んだことを研究に生かし、さらに良いものにしていきたいと思います。」と感想を述べていました。



平成28年度指定
スーパーグローバルハイスクール
研究開発実施報告書 第5年次

令和3年3月30日 発行

学校名 宮城県気仙沼高等学校

代表者 校長 狩野 秀明

所在地 〒988-0051
宮城県気仙沼市常楽 130 番地

電 話 0226-24-3400

FAX 0226-24-3408